

ヤンデレが怖いので炎
帝ノ国に入って弓兵
やっています。

装甲大義相州吾郎入道正宗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「……おかしいねサリー、他の女がいるよ?」

「……そうだね肅清しようか、メイプル」

現実世界で過剰なまでに干渉してくる妹分の幼馴染とその親友から離れてゲームを楽しみたい青年は、一人『New World Online』を遊び始める。

そして始めの森で出逢ったミイというプレイヤーとコンビを組んで、正義の味方をロールプレイ。

やがて彼女がギルドを立ち上げたと聞いて、ふらり顔を見せに行くと。

「ああ遅かったじゃないか！ この席が君の居場所だよ、副団長として存分に寛いでくれ。——大丈夫、炎帝ノ国全ての力を持って、君を【悪い女】から守ってあげるからね」

青年は、その光を映さない瞳に見覚えがあつたが、きつとゲームの仕様だと信じて加
入してしまった…。

※弓の仕様などオリジナル設定がありますので、緩い目線でご覧ください。

目次

ヤンデレと未来のお話

赤い弓兵とヤンデレの炎帝 — 1

ログインと第1回公式イベント

弓使い達とヤンデレのマーキング

12

炎の少女とヤンデレのプライベート侵

害 — 37

女生産職とヤンデレの依存症 — 51

迷宮探索とヤンデレのストーキング

66

集団戦闘とヤンデレの拉致監禁未遂

81

蹂躞戦闘とヤンデレの不法侵入

94

ライバルとヤンデレの独占欲(1)

125

ライバルとヤンデレの独占欲(2)

137

炎帝ノ国と第2回、第3回イベント

固有装備とヤンデレのマッチポンプ

(1) — 150

固有装備とヤンデレのマッチポンプ

(2) — 166

第2イベとヤンデレのハイエース

184

第??イベと??ン??レのターニ
????ポ??ン

ト

197

番外迷宮とヤンデレの「来ちやつた…」

214

掲示板民とヤンデレの交友関係調査

244

炎帝ノ国とヤンデレの傷害致死事件

277

天然二人とヤンデレの付き纏い行為

294

限界超越とヤンデレの変わる恋模様

313

第三イベとヤンデレのR—15行為

330

無限の剣製と防振りのメイプル

炎帝の影とヤンデレ愛の行き着く先

350

弓兵不在とヤンデレの献身 —— 369

四者集結とヤンデレのドキッ！ 水着

だらけの慰労会（ポロリもあるよ）

385

兄妹恋愛とヤンデレの被害妄想

403

ヤンデレと未来のお話

赤い弓兵とヤンデレの炎帝

「ほ、報告します！ 西の空から巨大な…巨大な亀が飛んで来ます！」

第4回公式イベント二日目。

赤の装束に身を包んだ斥候役が、息を切らせながら幹部役達に情報を伝達する。

「亀…ですか？」

1人は純白の僧侶服を纏う回復のスペシャリスト、ミザリー。

謎すぎる単語を理解出来ず、思わずオウム返しをしてしまう。

「そういえば最近、緑の浮遊物体を見かけたとか掲示板で見た気がする…」

ローブで顔を隠しているのはトラップアーの異名で知られるマルクス。

偶然知っていた情報を口に出すが、それだけでは何も分からないよね…と少し落ち込む。

「このイベントでモンスターの類は出現しないはず…。一体、何者だ？」

彼ら、彼女らを含めた大勢の赤装束が揃う中心で、報告を聞いていたのは紅髪の美少女。最強の炎使いとして名を馳せ、類稀なるカリスマによって一大ギルドを率いる有名

プレイヤー【炎帝】のミイといえど判断に困ってしまう内容だった。

本来ならば自ら攻撃部隊に加わる予定だったが、とある【男】からの提案で自陣防衛に就いていた彼女は迅速に指示を出そうと思いい悩む。

イベント開始時、見晴らしが良すぎる廃墟エリアを拠点に指定された為、ただでさえ狙われやすい状況に置かれているにも関わらず、謎の浮遊物体接近の報。

どのような脅威度を持つかわ不明だが、同ギルド以外は全て敵という状況下で楽観視はできない。最悪の場合、空飛ぶ亀に釣られて他のプレイヤーが押し寄せる事態も考えられた。

ミイは頼れるギルドマスターとして判断を迫られたが、内心の内気な性格が不安を煽って押し潰されそうになる。やがて脳内で下したのは静観。ここで直接乗り込んで来るまでは、安全策を取るべきだと判断したのだ。

しかしその思考は、ミイの代わりに攻撃へ赴いていた筈の男によって遮られる。「――亀の正体はメイプルだ」

珍しい褐色肌筋肉質の身体。背中には珍しい武器種である弓を背負った赤い外套の偉丈夫が、確信を持って進言した。

「副団長……帰還されたという事は、ひと段落したのでしょうか？」

「ああ、【単独行動】は文字通り得意だね。予定数のオーブは回収してきたさ」

ばらばらと中空に翳した手からストレージを開いて10数個にも及ぶ、光り輝く玉をミザリーに差し出す。

今回のイベントはギルド対抗戦。

ギルド毎に設置されたオーブを奪い合い、合計ポイントを競う生き残り戦であり。数人規模の小規模ギルドを始め、ミイやミザリー、マルクス、ここには居ないが崩剣のシン、そして副団長と呼ばれた男を含めた大規模ギルド【炎帝ノ国】であろうとポイント対象であるオーブは一つのみ。

ならば、先ずは狩りやすい小規模ギルドを狙いに行くと1人飛び出した男の成果が、それであった。

周囲の団員からは「さすが副団長」「弓兵の名は伊達じゃないな」「さらつとミザリーさんの手に触れてんじやねえよ」と賞賛の声が漏れ聞こえる。

報告を終えた彼は、そのまま無然と立ち尽くすミイに向き合った。

「…まずは任務ご苦労。しかしあれが噂のメイプルだと確信する理由はなんだ」

「あんな馬鹿げた真似をするのはアイツしかいない。…というのが一点。もう一つは直接、視認したからだ」

「ほう…目が良いのは知っているが、この距離から見えるのか？」

「スキル【千里眼】と【鷹の目】を併用すれば、辛うじてな」

男は虚空を見つめるように西へ再び視線を向けた。

ゲームシステムの後押しによって強化された視覚には、未だ臆気ながら亀の上に女の子座りをしている黒髪の少女が見える。

更にはその両隣。左右に位置する場所には髪色以外そっくりな双子も確認出来た。

「訂正しよう、敵は合計3名プラス亀。メイプルに双子の少女を追加したメンバーだな。それと……ハンマー二本持ち、だと……？」

小柄な見た目に反して、背中に背負われた二本ずつのハンマー。両手持ちが基本の大槌を、そんな装備の仕方が出来ている時点で異常事態だった。

驚く言葉を聞いたマルクスが、げんなりした顔を覆う。

「それ絶対ヤバイ奴じゃん……。どんなSTRしてるって話だよ……ああ、楓の木ってギルドに常識は無いのか」

「落ち着いてマルクス。まだ戦ってもいないのに悲観し過ぎるのは良くないわ」
「だって……」

「……【アーチャー】。対処は可能か」

規格外の情報とメイプルという理不尽の塊として名を馳せる相手の来襲に動揺が広がるギルド内を鼓舞するように、ミイは焦らず自分が最も信頼している男の名を呼び、質問を投げかけた。

「いやいや、流石に副団長でもあんな浮遊要塞みたいな相手じゃ…」

「ふっ…。では早速足止めくらいはしておこうか」

「つて、出来るの!?!」

マルクスの突っ込みをスルーしてアーチャーと呼ばれた男はニヒルに笑い飛ばすと、地面を蹴つてなるべく高所に陣取るべく、瓦礫になった建造物の一つに位置を移す。

背中の弓を片手に持ち、西の空のはるか彼方を見据えて狙撃態勢を取る。ストレージから【特製の矢】を弦に番えて引き絞ると、眩くように詠唱した。

「……我が骨子は捻れ狂う」

装填された矢は赤黒い光を放ち、渦巻く波のような軌跡を描いて凝縮されていく。やがて青空の下で夕闇を煮詰めたような漆黒が迸り、滾る。

臨界寸前まで高められたソレは発射の瞬間、一条の極星となってメイプルへ放たれた。

「【カラドボルグ・Ⅱ】！」

煌めく暗黒の光条は一直線に、かつ正確無比の狙いによって着弾。ミイ達の目からもハッキリと分かるような大爆発を引き起こし、空中に大輪の花を咲かせた。

「すげえ！ あの距離から当てたぞ！」

「ミイ様も凄いが、あの人も大概だな……」

「ミザリーさんの胸に埋もれてえ」

「やったか!？」

もうもうと立ち昇る煙に紛れて空飛ぶ亀は見えない。

アーチャーが今しがた放った一撃は、並のボスエネミーであれば半分以上HPを削るだけの威力を持つとっておきのスキルだった。

当然、それなりの効果を期待しての攻撃だったのだが……。

「……………無傷だな」

「……「無傷!？」……」

メイプルという野生のラスボスには有効なダメージを与えるには至らなかつたようだ。

しかし、アーチャーは予想通りの結果だと言わんばかりに確証を得た答えを告げる。

「HP は削れんが、ノックバックは発生するようだ。このまま狙撃して落下させるぞ」

アーチャーの強化された視界には亀からズレ落ちかけて、あたふたとする彼女達の様

子がしっかりと映し出されていた。

AGIが0であるメイプルにとって機動力を奪われるのは何よりも痛い弱点であり、まして今回のイベントで小規模ギルドが高得点を獲得するには、リタイアによってオーブ絶対数が減る前に早期に数を確保しておく必要がある。

「凡庸な遅滞戦術だが、だからこそその効果がある。…悪く思うなよ、楓」

理不尽の塊、メイプル。そして『生まれた時からの妹分』である楓への親愛を振り切るように矢を連射していくアーチャー。

先ほどのような威力も爆発も無いが、確実に命中を繰り返して、態勢を崩していくと主人の落下を気にして亀の動きも鈍っていく。

やがて遠巻きに「あくれ〜」と落下する三つの影を確認してようやく狙撃態勢を解き、再びミイ達幹部の側に歩み寄った。

「これで足止め完了だな。落下ダメージでも入れればいいが…まあ無理か」

「お見事ですわ、副団長」

「ああ…ウチも規格外があるんだった。リアルのエイム力でゴマ粒みたいな相手に必中とか、もう僕怖いよ…」

「……………よし。これで当面の危機は去ったな。各員、傾注！ これより最低人員を残して周辺に進撃。ギルドオーブを奪って安全地帯を拡大せよ！」

ウオオオオオオオ!!!

ミイの指示によってあらかじめ編成されていた攻撃部隊が四方へと移動を開始し、攻勢に出た。

彼女一人のカリスマ性によって率いられる炎帝ノ国は、数あるギルドの中であつても最も信者が多い一面岩の構成である。

不平不満を漏らす者はおらず、命令に嬉々と従っているのはまるで宗教のようだ。

そして攻撃部隊の指示としてミザリーが行軍に参加し、拠点周辺の設置魔法を敷く為にマルクスが離れると、周辺を警戒する遠巻きの団員を除いてその場にいるのはミイとアーチャーだけになった。

「さて、こうなると怖いのは理…サリーだな。1日目は入れ違いで遭遇しなかったが、ミイを退けるだけのプレイヤースキルは相変わらず凄まじい。万が一にも私の正体がバレないように潜伏を…」

「寂しかった!」

「ぬおっ!?!」

眩きの最中に、胸に飛び込んで来たのは先程まで凛々しい顔つきで団員達を導いていた、あの紅髪の団長ミイだった。

羽交い締めにするような密着状態から顔を上げると瞳を潤ませて甘えたような声色

を出しながら身体を摺り寄せる。

「側に居て欲しかったのに1人で行っちゃうし、ミザリーとぼつか話してばかり…あとは団員に任せればいいから、ずっとこうしてよ？　ね？」

ぐいぐいと迫る仕草に、顔を引きつらせながら後ろに退がるアーチャーだったが、まるで吸盤でも付いているのかミイの抱擁…ベアハッグはまったく剥がれる様子がない。

「ミ、ミイ？　こういう事はせめてイベントが終わってから話し合えないかね。君も私も責任ある身だし、節度を持って…」

蜜月の幸福を少しでも強く伝えたい想いはベアハッグから鯖折りへと物理的に切り替わり、拘束判定のスリップダメージが入り始めたアーチャーは、必死の形相で無理やり抜け出して肩を掴むと、彼女は途端にビクリと動きを止めて、濁った瞳で彼の顔を覗き込む。

「……ごめんさい。私が悪いんだよね私が頼りないから私がしつかりしていればずっと側に居てくれるのに私をもっと強ければ「あの女」も倒せるし私が弱いとダメなんだ私を好きになって欲しい私だけを見て欲しい私を側に置いてください私はなんでもします私を好きにしているから私を捨てないで捨てないで捨てないで捨てないで捨てないで捨てないで」

「ミイ…」

「！ え、あ…私…あの……」

「…疲労が溜まっているのでは無いかね？ 少し休憩を挟もう」

「えっ…あの…変な事しちゃって…」

「ああいや、別に気にしてはいないよ。ここからも気を引き締めていこうか」

「はい！ …あついや、うむ。任せたまえー！」

バツと正気に戻って離れるミイだったが、この時点でアーチャーのHPはガッツリ減少している。

どうしてこうなったのか。

元々、サービス初期のソロ時代からコンピを組んでいた彼女とは縁があり、気弱な性格とは真逆のロールプレイで引くに引けなくなったのを見兼ねて、期間限定の補佐役として入団した筈だった。

だが、蓋を開けてみればあれよあれよ退路を塞がれ、今では周囲公認の副団長扱いだ。更にミイのフォローをしている内に、彼女の中で彼への依存性が強く現れていき、先程のような情緒不安定になって取り乱す事態も頻発するようになった。

もはやここまで来ると無責任に離れる訳もいかず、せめて人前で症状が現れないように宥め付けるのが精一杯といえる。

溜息を吐くアーチャー。

イベント2日目で既に心労が崇っているが、ここからは間違いなく【あの2人】と接敵するだろうと予測し、気を引き締める。

ミイに関してゲーム内の話で片がつくが、もう一方はリアル側で何をされるか分かったものではない。

俗に言う【ヤンデレ】に常日頃から晒されている彼にとつて、『New World Online』は一時の間とはいえ現実を忘れられる時間であり、同時に別の【ヤンデレ】のお世話をする場所でもあった。

これは人生の退路を奪われた青年の、リアルスキル【女難の相】を巡るお話である。

ログインと第1回公式イベント

弓使い達とヤンデレのマーキング

27：名無しの弓使い

【速報】森蜂を確殺する弓使い現る

28：名無しの弓使い

嘘乙

29：名無しの弓使い

騙されんぞ…

30：名無しの弓使い

メチャクチャ疑り深くて笑う

31：名無しの弓使い

運営公式の不遇職だからね仕方ないね

32：名無しの弓使い

森蜂ってフォレストクインビーだろ？

理想値のDEX極でも一撃で倒すのは無

理って結論出てるから

33：名無しの弓使い

目の前で死んだのは事実だよ！

34：名無しの弓使い

ソースは？（煽り）

35：名無しの弓使い

まーたイキリ弓使いが増えたか…

36：名無しの弓使い

アンチは消えろ

37 : 名無しの弓使い

ここは弓民の地だ！ 異教徒は去れ！

38 : 名無しの弓使い

はいソース。

ちようど動画撮ってたから切り抜いといた！

39 : 名無しの弓使い

!?

40 : 名無しの弓使い

マ？ 有能過ぎじゃん

41 : 名無しの弓使い

は？

4 2 : 名無しの弓使い

マジで死んだるやんけ

4 3 : 名無しの弓使い

一撃…だと

4 4 : 名無しの弓使い

えっ何これは…

4 5 : 名無しの弓使い

森蜂がポップした瞬間、矢？がぶっ刺さって爆発したな

4 6 : 名無しの弓使い

>> 2 7 がクツソびびって「うひゃあ」声かわゆす

4 7 : 名無しの弓使い

ああだから画面が揺れたのかw

48 : 名無しの弓使い
てか、矢つて爆発せんだろ

49 : 名無しの弓使い
これは検証民の程度がしれますね：

50 : 名無しの弓使い
ありえん……。本物かそれ？ コラじゃなくて

51 : 名無しの弓使い
実際やれてるんだから、やり方次第で火力上がんじやねえの

52 : 名無しの弓使い
レベルを上げて弓で殴ればいい

53 : 名無しの弓使い

>>52せめて矢を使え

54：名無しの弓使い

レベルを上げて矢で殴ればいい

55：名無しの弓使い

違うそうじゃない

56：名無しの弓使い

もしかして：ユニークスキル？

57：名無しの弓使い

その手があったか

58：名無しの弓使い

あったよ！ ユニークスキルが！

59：名無しの弓使い

でかした！

60：名無しの弓使い

DEX2倍とか？

61：名無しの弓使い

そんなぶつ壊れスキルあるわけ無いだろww

62：名無しの弓使い

ゲームバランス壊れちゃう

63：名無しの弓使い

でも弓界を救う手立てになるかもな：野郎共、こいつを炙り出せ！

64：名無しの弓使い

ヒヤッハー！

65：名無しの弓使い

新鮮な弓使いだ！ 困め！

66：名無しの弓使い

>>27はもう情報持ってないの？

67：名無しの弓使い

魔法職以下の射程、近接以下の火力…うっ、頭が…

68：名無しの弓使い

正式サービス直前でねじ込まれた武器だから…バランス調整中なだけだから…（震え声）

69：名無しの弓使い

ごめん。姿は見えてないけど相方？ さんとは会話した

70：名無しの弓使い
ほう？

71：名無しの弓使い
そいつも弓使いか？

72：名無しの弓使い
いや魔法使いだと思う。弓で狙撃したってさ。赤髪が綺麗な子

73：名無しの弓使い
それで指指す方向に向いたら木の上に弓持った男が立ってた。

74：名無しの弓使い
お猿さんかな？

75：名無しの弓使い
何を思ったら木に登るといふ発想が生まれるんだ：

76：名無しの弓使い

障害物だらけの場所でこれほどの狙撃を：

77：名無しの弓使い

弓ならプレイヤーのエイム力で狙ったって事だよな

78：名無しの弓使い

動画見る感じヘッドショットは間違いない

79：名無しの弓使い

バケモンやんけ：

80：名無しの弓使い

やっぱ時代は弓だわ

81：名無しの弓使い

よっしや街で木の矢買い占めて来るわ！

82：名無しの弓使い
無邪気にテンプレの失敗するな

83：名無しの弓使い
テンプレって？

84：名無しの弓使い
ああ！

85：名無しの弓使い
前スレで作成したけど普通にスルーされてたな…

86：名無しの弓使い
マジで人気無くて草

87：名無しの弓使い

お勞しや兄上…

88：名無しの弓使い

こちらも（弓を）引かねば…無作法というもの

89：名無しの弓使い

ちよつと盛り上がりそうだからコピペしてくるわ

90：名無しの弓使い

おねしやす！

91：名無しの弓使い

だが逆に考えて欲しい。眞実を知って人が減るのでは？

92：名無しの弓使い

ヤメロオ！

93：名無しの弓使い

てかこれさ、矢じゃなくて剣じゃね？やたらデカいやん

94：名無しの弓使い

は？ 弓使いが剣を使う訳ないだろ！いい加減にしろ！

95：名無しの弓使い

矢のスロットに剣を入れるとか相当な変態だぜ？

96：名無しの弓使い

スロット（意味深）

97：名無しの弓使い

以下テンプレ貼り

98：名無しの弓使い

本スレは『New World Online』における弓使いを考察する掲示板です。弓は正式サーブिसー週間に実装された産まれたての武器種です。

公式からも未調整部分があるとアナウンスされているので不満があっても無闇な凸は控えるように。

荒らし、アンチはスルーしましょう。

99：名無しの弓使い

注意事項

- ・ 弓の攻撃力はDEX依存。必ず振るように
- ・ STRが無用なのでステ振りの特化させやすい
- ・ 魔法と違って直接エイムする必要あり
- ・ ヒット部位によってダメージ倍率が変わります。頭や心臓など弱点部位を狙いましよう
- ・ 基本的に魔法以下の射程。近接以下の火力です
- ・ 矢は消耗品
- ・ スキルショットで矢作成：Iを買う
- ・ 攻撃力は弓×矢の乗算なので木の矢から鉄の矢にするだけで攻撃力が2倍に

・ただし資金の消耗は4倍です

100：名無しの弓使い

テンプレ（暫定）ビルド

・AGI型

回避しながら矢を射るのでプレイヤースキル必須。腕に自信があるならオススメだが、それなら剣を握った方が早い

・VIT型

あえて攻撃に晒されながら耐える。至近距離で戦うので狙いが付けやすいが、それなら剣を握った方が

・DEX型

現在の最優テンプレ。火力が上がり、攻撃回数が減るので矢代の節約になる。

ただし極振りすると移動速度低下による引き撃ちが困難になったり、積載量不足で矢数が足りなくなるので程々に。

・INT型

産廃。MPを確保しつつ上げればスキルの連続使用が可能。だが、そもそも有用なスキルが無い。今後次第で化ける可能性はある。

・STR型

真の産廃。弓と何のシナジーも無いので振るだけ無駄。強いて言えば他武器を待つと強い。本末転倒。

素直に剣を持って

101：名無しの弓使い

STR君ボコボコで草

102：名無しの弓使い

STRは犠牲になったのだ…犠牲の犠牲にな…

103：名無しの弓使い

恵まれた筋肉から放たれるヒョ口矢

104：名無しの弓使い

他武器と違って検証進んで無いからマジで茨の道

105：名無しの弓使い

でも男の子ってそういうのが好きなんでしょ？

106：名無しの弓使い

たし蟹

107：名無しの弓使い

あえて弱職を選ぶ。あると思います！

108：名無しの弓使い

さて、森行つて探して来るわ。木の上にいるならすぐ見つかるだろ

109：名無しの弓使い

そこで暮らしてる訳じゃないんだよなあ…

110：名無しの弓使い

え、STR振ったら駄目か

111 : 名無しの弓使い

やっちまっとな

112 : 名無しの弓使い

転生しろ

39?? : 名無しの弓使い

ふーん、私はそういう愚かなプレイとか好きなんですけどねー

114 : 名無しの弓使い

刹那、STRには振るなよ！

「STRは…駄目だったのか…」

人もまばらな早朝を走る区間バス。

設置された座席で、一人の青年がスマートフォンからネット掲示板の書き込みをチエックしながら落胆している。

画面をスクロールして前スレを眺めるが、少なくとも掲示板の住人には一人としてSTR型の弓使いは居ないようだった。

道理で通常攻撃の威力が変わらなかつた筈だ…。

青年はスマホの電源を落として天を仰ぎながら瞼を閉じる。

思い返せば、そもそも普段からFPSシューティングゲームばかりに興じて、こういったRPGをプレイして来なかつたのが原因だろう。

装備品の着脱はまだ分かるが、ステータスの割り振りからビルドと呼ばれる型構成、狩場の模索など、装備を付け替えて腕を競い合うのがメインであるFPSとは勝手が違いすぎて把握し切れない。

ましてキャラクタークリエイトの画面で「STR：筋力」と表示されていれば攻撃力が上がると思うのは致し方ないとも言える。

それにしてもSTRへ極振りに近い振り分けをしたのは彼自身の責任ではあるのだが…。

そして言い訳になるが、この『New World Online』というゲーム。プ

レイ開始時にチュートリアルが設定されているにも関わらず、強制イベント扱いではないせいで、そのまま初期の街から外へ出られてしまうのだ。

青年はそれを知らずに、不親切なゲームだと思いついたまま付近の森で狩りを開始。初日から矢の補充以外はひたすら籠り続けたせいで、他プレイヤーと情報共有もしないまま時は過ぎ去り、とある事件が起きるまでこうして攻略サイトや情報収集の大事さも知らずにプレイを重ねてしまう。

その結果が、青年を孤独なSTR型弓使いへと変貌させてしまった訳である。

しかし不幸な面だけが彼に訪れた訳ではない。

掲示板で話題になった森蜂殺しの弓使い。強力な一撃を放ったプレイヤーの正体は何を隠そう、この青年である。

そのカラクリは推測されていたレアスキルではなく、とある「仕様の穴」というか【開発のミス】を突いたバグじみた方法であり、このお陰で彼は驚異的な狩り効率を叩き出し、他プレイヤーと一線を画す高レベル帯の一人なのだが、本人はまだ気がついていない。

今日も今日とて退屈な学校生活が始まるが、部活や生徒会にも在籍していない自由の身。帰宅後の時間は充分にあると、学生特有の呑気さを醸し出して眉間を擦る。

青年は『自称』何処に出してもおかしくない一般人。

中流家庭の長男に生まれ、親が一軒家を持つくらいには裕福でゲームハードを一通り揃えている以外に特筆すべき点はない。

ただ蓋を開ければ、親子共々相当なゲーマー一家であり、両親はRPGとSLG、妹は格闘、そして彼はFPSシューティング系ジャンルを得意とした生粋のゲーミング家系。

必然的に家事が疎かになりがちで、割と毒親な気質を持つ両親に代わって料理や洗濯、掃除を幼い頃から主夫の才能を發揮して、こなしてきたのは青年だった。

その延長線上で、近所に住む産まれた時すら一緒に幼馴染の面倒をみる事が多く、人からは気苦労が絶えないと同情されたりもするが彼にとっては日常すぎて負担には感じていない。

様々な事情で疲れはするが、ゲームさえしていれば機嫌が良くなる性格を自笑し、毎日の楽しみを迎える為にさあ頑張ろう。

そう考えて閉じていた瞼を開けると。

——鼻先まで迫る女の顔が、こちらを覗き込んでいた。

「ヒェア…」

光を映さない混濁の瞳。見開いた瞳孔。

驚きでおかしな声が漏れる。バクバクと激しいビートを刻む心臓がバスの排気音をかき消すほど高く鳴り響き、総毛立つ悪寒に体温が急低下していく。

瞬きすら忘れて呆気にとられる青年の脳裏に「死」が過る。次の瞬間、女の顔はまるで映画の別シーンに切り替えたかのように明るく元気な微笑みへと変貌し、ステップで距離を離すと、弾んだ声で朝の挨拶を口に出した。

「おっはよー！ ちよつと寝てたみたいだから悪戯しちゃった」
てへり、と笑顔を見せる少女を青年は知っていた。

運動部系な性格と快活そうな見た目に反して重度のゲーマーで、単位すら危ぶまれるほど情熱を注ぎ込んでいる同級生、白峯 理沙は仲の良い「友人」といえる間柄だ。

知り合うキツカケになったのは、青年と同一年にも関わらず「お兄ちゃん」呼びをする幼馴染。その世話を焼く過程で年齢を重ねるにつれて性差によるフォローが困難となり、助け舟を出してくれたのが彼女だった。

幼馴染にとって親友とも言うべき理沙は、青年と同じく世話焼きな一面から意気投合する事が多く、またジャンルは違えどゲーマーである事も手伝って、女性の中では2番目に親しい間柄と言える。

「それで、気が付いて無いみたいだけど本当に眠そうだよ？ 目にクマができてるもんほら」

そう言つて男の頬を無遠慮に摘んでムニムニと動かす理沙。

その顔は屈託のない喜色満面の表情で、とても先ほどまでのホラー顔負けの形相をしていたとは思えない。

瞼を閉じている内に本当に夢でも見たのかも知れない…。

青年はそう思うことにして、子供のようなちよつかいを出してくる手をやんわりと掴んで離そうとする。

が、瞬間的に返ってきたのは女性の力とは思えない強い握力だった。

「ふふふ…こうしているとアタシの物になったみたいで楽しい」

女性のしなやかな指先にある爪が、強く握られたせいで青年の頬に食い込み、跡を残す。

その赤くヘコんだ窪みを愛おしそうに撫でて、恍惚の微笑みを浮かべる理沙は普段はあまり感じない色気を僅かに漂わせ、戸惑いの感情を残していく。

しかし次の瞬間、彼女は何事もなかったかのように手を離して、いつも通りゲームや学校生活、幼馴染についての話題が流れた。…やはり寝ぼけていたのかと錯覚する青年。

その後は不審な行動も見られず、特に幼馴染の話題になれば言葉の節々に彼女への親愛が伝わってくる。

幼馴染のポンコツな性格と真逆の性格だからこそ意気投合するのだろうか。ここだけは昔から謎だと青年は思う。

やがて軽い感じで談笑を進める内に、ふと彼女の事で気になった点を質問してみた。

最近、テストの点数が落ちてるらしいけど…。

「うぐっ…それは…」

やはりというか、当然というべきか。

理沙は露骨に顔を顰めて視線を逸らすのが、全てを察した青年は大きく溜息を吐いた。

この反応は今までの経験からこっぴどく親から叱られた後だと推測出来る。となればさっきの異様な行動も、きつとストレスが溜まって衝動的に起こしてしまったのだろうと納得した彼は一つの提案をした。

毎日、1時間程度なら勉強を見ると。

「本当!? やった!」

バスの車内にも関わらず、飛び跳ねて嬉しそうな理沙の姿に苦笑する。

そう言えば、幼馴染関連で話すようになった当初はただの知り合い程度で、こうして気兼ねなく接するようになったのはいつだったのだろうか。

確か3人合わせて深夜まで夏休みの宿題を片付けている時、急に肝試しをしてみた
的な話が出て…と口に出した。

すると理沙は露骨に驚いた顔をした後、嬉しそうに頬を緩ませて笑顔を見せた。

「そうだよ…。その時の君は、物凄く格好良くて…ゲームも運動もワンマンプレイが多
かった私は……」

妙にしつとりとした彼女の声色は、偶然通りがかった車のクラクションに掻き消され
て聞こえなかった。

「この気持ちは楓にも負けないから…」

青年は首を傾げながらも話を合わせて、今日も幼馴染が乗り込むバス停まで二人で過
ごすのだった。

炎の少女とヤンデレのプライベート侵害

唐突だが、青年はRPG（ロールプレイングゲーム）を額面通り受け取って、『New World Online』でキャラクターを作成する際、自分の思い描いたキャラクターになりきって遊ぶ事になっていた。

別に痛い趣味が暴走しているとかではなく、日常的にプレイしているFPS系ゲームでは情緒のない罵り合いや暴言に晒されるのが日常茶飯事であり、偶には紳士的な態度で他人と接してみたいと常々思っていたのだ。

そこで彼が、このゲームをプレイする上で目指す目標として掲げたのは「正義の味方」。

弱きを助け、強きを挫く。

男なら小さな頃に一度は夢見る文字通りのヒーローに、昔から強く憧れていた彼は、それを電腦世界で目指してみたいと強く願い、モチベーションが高くなる。

ただ、そのまま人助けをしつつ強くなっていくだけでは味気ない気がした青年は、ふと一計を案じる事にした。

それが、ロールプレイ。役になりきれば、多少中二病的な台詞を吐いても精神的に余

裕が持てるし、何よりそういった言い回しが好きな自分があると彼自身も理解している。

そこで参考にしたキャラクター像は過去に一代ムーブメントを引き起こした、とあるゲームに登場する主人公の姿だった。

正義の味方を志しながらも理想と現実の狭間で苦しみ、死後ですら捧げてきた男。紳士的だがニヒルな役回りは男として憧れるし、何より世話焼きと家事が得意という共通点から親近感もある。

そして万が一の可能性だが、あの「友人」と「妹分」が同じゲームを始めた場合、他人のふりをする事が出来る。

別に彼女達を嫌っているわけではないが、たまには友人や知り合い無しの状態からゲームを楽しみたいのだ。

無論、顔つきだけはどうにもならないので髪色を白髪に。髪型も逆立てた感じに変更。肌を褐色へ変更すると元ネタと大分雰囲気似ている上に、青年とは思えない見た目の変化に自画自賛する。

最後にキャラクター名をそのまま彼の名前にするのは露骨すぎると自重して、プレイスタイルも考慮した「アーチャー」を名乗る事にした。

「これで俺は……いや、私は正義の味方を目指していくよ」

ログイン画面では己のアバターというべきアーチャーが待ち受けている。青年はVPMMO特有のヘッドギアを身に付けてゲームの世界へと飛び立った。

「うう…：やっぱ魔法使いソロでレベリングはキツかったかなあ…」

森の鬱蒼と覆い茂る草木を掻き分けて、赤髪の少女が恐る恐る前へと進んでいく。

しばらくすると、目の前の草むらから林檎のウサギを象ったモンスターが周囲を警戒しながら飛び出してきた。

周囲に敵モンスターがいる気配も無く、まさに狩り頃といえるだろう。

「…火球」

少女はそつと魔法の名を口ずさむと、掌に炎を灯して下手投げの要領で投擲する。

炎はウサギに着弾すると、フワツとした投げ方に反して一瞬で燃え盛り、魔法を放った相手にヘイトを向ける間も無くデジタルのエフェクトとなつて散つていった。

「よしっ…：」

グツと胸前で小さなガッツポーズを取るが、すぐ正気に戻つて悲しげな顔で地面に体

育座りをしてしまう。

一般人から見れば、突然の奇行に首を傾げるばかりだが、ある程度ゲームに精通した人間から見れば彼女が何をしているのか推察できるだろう。

手持ち無沙汰で自分のステータス画面を流し見る少女はMP（マジックポイント）の数値に注目し、やがて全体の5%ほどが自然回復したところで深い溜息を吐いた。

「やっぱり回復時間の待ちが長いよお…でもMPポジションは高いし、低レベルの内は我慢しないとだけど…」

NWOは一般的なMMORPGと同様、MPは時間経過と共に自然回復していく。

特に魔法使い系は威力が高い魔法を扱う分、消費も激しく装備やアイテムによる補強を受けられない序盤や、代わりに戦闘や補助をこなしてくれる仲間がいない場合、レベリングの効率が極端に下がってしまう。

かといって、引っ込み思案な性格をしている少女：「ミイ」にとって見知らぬ相手に話しかけるといえるのはかなり難易度が高く、サービス開始間も無い時期特有の全体的に焦った雰囲気にも飲まれて、一人で狩り続ける事態となっている。

イジイジといつも通り一人時間を潰すミイ。しかし、いつもより運が悪かったのか周囲にモンスターが次々とポップし、自然の包囲網が形成されていくのに対して、頭の中

で妄想に耽ったり、今後の育成や方針を思い浮かべているせいで反応が大幅に遅れてしまふ。

「……んう？」

何気無しに顔を上げると、そこにいたのは自身の身長を2倍は上回ろうかというオオムカデの姿。表情にピシリと亀裂が走り、思わず後退りするが視線を動かす度に周囲からこちらを覗き込むモンスターの数が増えていく。

「あ、あははは……」

乾いた笑いは虚しく空を切り、ゴクリと喉を鳴らした瞬間。ミイは涙目で一目散に駆け出した！

「無理無理無理無理！ 範囲魔法はまだ覚えてないもんー！」

木々を掻き分けながら逃げの一手を尽くすミイだったが、移動速度に影響するAGIのステータスをあまり割り振っていない為、足の速いモンスターから順に近づかれてしまふ。

このままではギリ貧だと、なけなしのMPを捻出して魔法を放つが、まさしく焼け石に水。魔法威力を高める為にINTを上げているので一撃毎に数を減らせるが、明らかに数的劣勢を覆せる物では無かった。

やがて大樹に道を阻まれて行き場を無くすと、後ろから迫るモンスター達は確実にト

ドメを差すべくミイを中心に半円の包囲網を敷く。

「ああ……ここで私は死ぬんだ……お父さんお母さん、ごめんなさい……」

別にゲームなので死に戻るだけなのだが、精神的摩耗が激しいせいで辞世の台詞じみた言葉を最後に、解釈を待つ罪人のように目を瞑ってお祈りのポーズを取る。

次に生まれ変わる時は、リア充になれますように……。

夢い思いと共に、モンスターは一斉に飛び掛かろうと準備態勢を取る。その瞬間。

「……助太刀させて貰おう」

「え？」

鋭い風切り音と共に男の声が、ミイの耳朶を打った。

そして続けざまに放たれる音の嵐。それはモンスター一体一体を満遍なく打ち据え、彼女へ向いていた敵対心、ヘイトを移し替える為の攻撃だった。

ミイからは見えていないが、男は案外付近にいるらしくガサガサと近くの茂みを鳴らして移動しているのが分かる。

間髪入れずに叩き込まれる連撃は途絶える様子もなく、ひたすらモンスターを穿ち続け、

やがて全てが男のいる方向に集まっていくと、今までの音の正体。つまり攻撃手段が判明する。

「ゆ、弓矢…?」

不遇として逆に有名な武器の活躍に動揺を隠せずにはいられない。

しかも放たれた矢はまるでオートで狙いでも付けているかのようや正確さでモンスターの頭を狙う。

ただ威力が低いせいでどれもが倒し切れておらず、このままでは殺到されて自分と同じ目に合うだけだと直感したミイは、気弱な自分を叱咤して叫ぶ。

「あのー、わ、私は大丈夫ですから…その逃げて下さいー!」

それはあからさまな強がりだ。『New World Online』ではプレイヤー側への痛覚が実装されており、攻撃を受ける度に痛みが走る。

それを自分の油断で招いた事態に巻き込むのは申し訳ないと思ったのだ。

しかし弓矢の主は、草むらから顔を出すと浅く笑いながら弓を持つ手を片手に構え、

そして「反対側の手で剣を番えた」。

「なけなしの鋼鉄剣だ。存分に味わえ!」

「あの、いえ、私の方こそありがたいとうございしました！ 横殴りなんて…貴方がいなければ、そもそも生き残れるなんて思ってもいませんでした、ので…」

「なに、正義の味方を目指す者として当然の…いや今、心意気を台無しにするスキルが手に入ったような…む、怪我をしているのかね？ ポーションがあるが」

モジモジと両の手を擦り合わせて俯くと、男は勘違いをして回復アイテムを差し出そうとするので慌てて止める。そのまま話すのは恥ずかしいと感じたミイは気になった所を聞くことにした。

「た、助けて貰って失礼かも知れないんですけど…弓矢ってそんなに威力が出るものなんでしょうか？」

「む？」

「Wikiとか見てると威力が低いし、エイム力が必要とされるから当てるのも一苦労って載ってたので気になって…」

「それは…」

ミイの言葉に声を詰まらせる男は顎に手を当てて、悩むような顔つきで天を仰ぐ。

やがて絞り出すかのような声色で告げられたのは驚きの事実だった。

「あの威力の正体なら、これだ」

「これって…片手剣？」

それはゲーム開始時に選択式とはいえ、全てのプレイヤーに与えられる最低限の威力を持った武器、俗に言う初心者用の剣だ。

「そうだ。この武器に限った話ではないが、弓矢を使う際は矢を専用のスロットにセットしなければ攻撃そのものが出来ない。しかし最近、気が付いたのだがね。このスロットに【剣も装備出来る】」

「え…剣を、弓使いが装備出来るんですか!?!」

「まあ、スキルの類はあまり身に付かない仕様のようだがね。だが大事なのは剣を矢として扱う場合、木の矢がSTR＋1に対して初心者の剣ならば＋12。攻撃力は弓×矢の乗算で算出されるはずだから…」

「じゅ、12倍の攻撃力!?!」

「さっきのは鋼鉄剣だから20倍になる。無論、使い捨て用のスロットに装備しているせいで一度使えばロストしてしまうのが難点だがな」

それでも単発火力が初期装備で跳ね上がるのはバグじみた話であり、ネットでこの情報が拡散すれば弓使いの地位が一気に向上するかもしれない一大的な発見だ。

「そんな仕様があるなんて…」

「他の弓使いが同じ手段を取らない所を見ると、恐らくはステータスの影響で装備の可否が決定されているのかも知れないな」

「なるほど…弓使いならDEX上げが基本ですから、特殊なビルドで効果を発揮したかも…」

「…そうだな。普通はそっちに割り振るな」

「え？」

その後も青年と話を重ねたミイは、Wikiや掲示板を確認するのを疎かにして情報不足で苦労していた事、地雷扱いされるビルドで落ち込んでいたなど、愚痴や不満もチラホラ混ざった相談を投げかけられる。

その様子にさつきまで感じていた頼りになるイメージからのギャップが可笑しくてクスリと笑う。

そうして緊張感から解き放たれたミイは男にフレンドがない&レベルも近い+優しそうな人柄から思い切って話を振ってみた。

「私と…その、フレンドになつて頂けませんか！ それとしばらくここを狩り場にするので…パーティを組んで貰えたらなつて…」

最後の方は小さく聞き取れない程だったが、男は意外そうな顔をした後

「こちらこそ宜しくお願ひしよう。…それで失礼だが名前を伺つてもいいかな？」

「あつ!! 私はいつて言います」

「なるほど…ああ、すまないこちらから名乗るべきだった。……私の事はアーチャーと

呼んでくれ」

「アーチャー……さん」

「ああ、どれぐらいの付き合いになるか分からないが宜しく頼むよ、ミイ」

「は、はい！ 私もよろしくです。アーチャーさん！」

ここにやがて炎帝と呼ばれる少女と、その副団長と（勝手に）目される弓兵が邂逅を果たした。

本来の物語であれば、ワントップ型の組織を率いる羽目となり、本来の性格と求められるカリスマ性の狭間で苦しむ彼女だったが、彼という心の拠り所を「得てしまった」場合、展開がどう切り替わっていくのだろうか。

そして今はまだログインすらしていない2人の「規格外」の存在。

まともに対抗出来るのは廃人ただ1人とされる野生のラスボスに、炎帝と弓兵が挑み掛かるのは、まだ先の話である。

スキル【正義の味方】

効果：

STR・VIT・AGIを+30%

取得条件：

自身のステータスを上回る20体以上のモンスターから、ターゲットイングされるプレイヤーを無傷で守り切る。

「ん？ 理沙、こんな所で何してるのー」

「楓…ちようど良かったこっち来て」

「およ？..」

夕暮れに包まれる閑静な住宅街。その一角で年頃の女の子2人が電信柱の影に隠れて、何かを伺っていた。

視線の先には何の変哲も無い一般家庭の家屋のみ。

しばらく時間が経つと二階の一室に光が灯り、人影が動き出すと理沙はその様子を瞬きもせずに熱心に見つめ続ける。

しかし事情が分からない楓は純粹に疑問を口にした。

「お兄ちゃんと遊びに行きたいなら、私と一緒に来る？　合鍵なら持つてるよー」

「いやそれはこの前コピーしたから良いや」

「え」

「それよりも、あの動き気にならない？」

問題はそこでは無いとばかりに、明かりのついた部屋を指差すとカーテンに遮られているせいでぼんやりとしているが、人影は椅子に座った姿勢にも関わらず、激しく手を振ったり身体を逸らしたり、室内にも関わらず何かと戦っているような仕草だ。

「んー勉強とかじゃないよね、何だろ」

「たぶん…VRMMO関連だと思う」

「そうなの？」

「そう。つまりはオンラインゲーム、仮想空間で人との繋がりを持つてるといふ事。それは私たちの許可なく女と遊んでる可能性があるのよ、楓」

「ええー！　そんなのヤダよー」

「大丈夫、そんなのは絶対許さないから…ちよつと楓は探りを入れてくれない？」

「うん、わかった！」

青年は気付かず、今日も『New World Online』に没頭している。

しかしその裏では間違いなく包囲網が狭まっているのだった。

女生産職とヤンデレの依存症

「お兄ちゃん。私、今度『New World Online』ってゲーム買うんだー」
なん、だと…。

青年は幼馴染にして妹分の楓から飛び出た爆弾発言に思わず耳掃除の手を止めて、聞き間違いが無いか聞き直す。

全体にピンク色が散りばめられた彼女の部屋でベッドに座り、いつものように世話を焼いていた所へ青天の霹靂である。

基本的に新しくルールを覚えて頭を使うゲーム関連が苦手な彼女から出る言葉ではないので再確認しようとするが、急に耳かきを止められたのが不満なのか、膝の上に乗せた顔の頬をふつくら膨らませて無言の抗議をしてくる。

「む〜〜〜…」

仕方なく、昔ながらの竹の棒で耳奥をくすぐって上げるとニコニコ顔で「いやあん?」と甘えた声を出して丸くなる。

年齢の割に幼い顔立ちと仕草に苦笑して、しばらくはご機嫌取りとして彼女の望むままにしておく。

やがてポツリポツリと漏らす言葉の中から、どうやら理沙が入れ知恵したらしく、猛烈なオススメをされて通販での購入を決定したとの事だった。

これに焦ったのは青年だった。

彼女が苦手なゲームに挑む事自体に異存はない。むしろ、天然すぎて予想外の事態を引き起こす謎の才能を、オンラインゲーム上とはいえ人付き合いを増やして自覚し、矯正出来るのではないかという一抹の願いすらある。

だが、長年の付き合いから青年が確信しているのは、同じゲームをプレイしているのが分かれれば、楓と発起人の理沙はオンラインゲームにも関わらず、何だかんだ理由を付けて確実に「彼の家へ入り浸る」。

これは自意識過剰でも単なる予想でもなく、過去、実際に前例があったからこそその危険であり、そして何より恐ろしいのはVRMMOというゲームの特性上、ダイブ用のヘッドギアを被ると現実側の感覚が鈍くなる点だ。

もし、ログインしているのを感じつかれて家探しされようものなら、一般的性欲を持ち合わせている青年の私物を探す為に、床をひっくり返す勢いで家宅捜索が行われるのは間違いない。

それだけは何とか回避しなければ…。

膝の上では耳かきの心地良さに夕飯前だというのにスヤスヤと寝息を立てる楓の顔。

そつと横に退こうとしても、むずがる子供のようにはズボンを掴まれて抵抗されてしま
う。

こんな純真な子にシモな事情を明かしたくない兄貴分としての感情が顔を出す。今
後バレないようにどうするか、彼女の母親が呼びに来るまで真剣に考えるのであった。

「むにやむにや…えへへー食べちゃいたいなあ…」

夢の中で楓は青年と楽しそうに遊んでいた。

物心ついた時から一緒に居る彼は、どれだけ側にいても不快にならないどころか、お
気に入りの枕やぬいぐるみのような安心感を与えてくれる『お兄ちゃん』である。

彼女自身あまり自覚は無いが、昔から天然な性格をしているせいで思春期の男子にか
らかわれて虐められる事があった。

けれどその度に助けにやって来てくれる彼は、楓の中で立派な「正義の味方」に映り、
怒ったりもするけれどそれは自分を戒める為に、あえて強い口調を使ってくれているん
だと、一人っ子の楓は兄として彼を認識するようになった。

そこに年齢は関係なく、今でも平然とお兄ちゃん呼びを繰り返しているほどだ。

青年は夢の中特有の、何でも有りな見た目を駆使して巨大な毛玉になったかと思えば

毒々しい紫色になったり、天使の羽を生やしたり、挙句に機械的なパーツを生やしたりと、謎の行動を繰り返している。

「あははー、お兄ちゃんつてば変なのー」

何処からか、「お前が言うな」と聞こえた気がしたが、どうせ夢なので楓は毛玉な彼をベッド代わりにして、ここが夢なのに更に眠り出した。

意識を手放す前に思うのは当然、お兄ちゃんの事。

昔、3人で近所の林へ肝試しをした時、遠くで光る車のヘッドライトを人魂と勘違いした理沙は、腰を抜かしてまったく動けなくなつた事がある。

その状況が、中学生に上がる前の子供にどれだけの恐怖を与えたのかは想像に難くない。

恐怖に駆られて泣きじやくり、涙を流す理沙に釣られて何だか楓も怖くなつて目尻に涙を浮かべた時、青年は2人を勇気付けながら同時に背負つて林から抜け出したのだ。

同学年の子がその重量を運ぶのは確実に無理だったはずなのに、彼は一言も文句を溢さず、心配する声すら絶やさずに2人を自宅に送り届けてくれた。

この時、楓は思つたのだ。あの場で動けなかつたのは理沙だけ。それでも私を連れて逃げてくれたのはきつと。

――私だけが特別だから。

微睡む意識の中で、今では当たり前になった彼女の価値観だけが怪しく存在感を主張していた。

「すまない。遅くなった」

「あつ、アーチャーさん！ そんな私も今来た所ですから気にしないで下さい」

初期村の自然囲まれた長閑な風景に溶け込んだ噴水広場でアーチャーとミイは、いつものように待ち合わせをしていた。

言葉とは裏腹に、明らかに待ちぼうけをさせてしまったミイにキチンと謝罪をしたい所だったが、彼女はその嘘がバレていないと思っているのか、それとも一緒に遊べる仲間と出会えて嬉しいのか、これ以上話題を引き摺るつもりは無いらしく笑顔が眩しい。気分を取り直して、今日の目標について話し合う。

「さて、森の狩り場に関しては、ほぼ敵無し。…というより場所を変えてレベリングか、ドロップ品を狙ってダンジョンに挑戦したい所ではあるな」

「だったら東の奥に毒竜のダンジョンがあるらしいので、そっちに行ってみませんか？」

「毒竜か…。あからさまに解毒薬を用意しておくようにと忠告されているようだな」
「フフツ、たしかに」

最初は引つ込み思案な性格だったミイも、リアル側で物心ついた時から幼馴染を世話して来た経歴の持ち主であるアーチャーから溢れ出る父性…というか母性に後押しされて随分と表情が明るくなってきている。

特にアーチャーがロールプレイの一環で意図的に口調を変えていると話題にした時には、臆病な自分でも楽しくゲームが出来るのではないかと、随分と興味深そうに聞いていたので、近いうちに彼女なりの楽しみ方が出来るかもしれないと微笑ましく思うようになった。

そのまま確認事項やたわいもない日常会話の後、ダンジョンに向かおうとして、はたと気付く。

「……：そういえば君も私も初期装備のままだったな」

「えっ……あつそういえば……」

視線を街中に移せば、サービス開始から1ヶ月も経たない短い期間にも関わらず、多くのプレイヤーが彩り豊かな服装や武器に身を包んでいる。

赤い大楯を背に歩く偉丈夫や、身の丈を超える斧の持ち主、あえて全身をマントで隠したレンジャー系と分かる人物など。

折角のファンタジーゲームなので個性的な見た目にも拘る人は多そうだと思うミイ。「二度、装備更新と回復薬の補充でもしておこう。こういう時はテンプレ装備？」というのがあるのかね」

ゲーム内の知識については、ミイが何でも聞いてくれと申告してきたので、あえてWiki類の情報を絞っているアーチャーは質問を投げ掛ける。

それに頼られる事が嬉しいミイは、最近有名になってきたある職人の名を出す。

「テンプレも良いですけど、この街にイズって生産職専門の女性がいて、何でもオーダーメイドの武器や防具。その人にあつた装備をおススメしてくれるらしいんです」

「ほう…？　一プレイヤーにしては随分と親身になってくれる人なのだね」

「かなりのやりこみ派らしくて、もう自分のお店まで構えているみたいですよ」

「それは凄いな」

「はい！　なので私達の変則ビルドでも力になってくれるかと思つて…」

そういうええぶそうだったとアーチャーは思い返した。

自身はSTR特化で通常攻撃こそ弱いのが、剣弾による一撃で纏め狩りを基本とする戦闘スタイルだ。そのせいか被弾する事態は今まで訪れず、防御や回避は余り考慮してこなかった。

むしろ初期服を間違つて売り払つてしまい、裸扱いのタンクトップ姿に慣れてしまつ

ていた。

そして最初期こそ必要経費として木の矢を購入していたが「矢作成Ⅰ」のスキルをシヨップで購入し、そこから辺の木を破壊して素材を集めれば、簡単に量産出来るようになったのと、初心者剣ならばタダ同然で手に入る値段なのが幸いして、資金的にはかなり余裕がある。

ついでに言えば、掲示板ではお金さえ払えば取得できる「矢作成Ⅰ」を前提にSTR型ビルドが否定されていたが、こういった作成系のスキルに関する習熟にはステータスのSTRが一定以上必要になって来る。

つまり本人はまだ気がついていないが、生産職としての側面も彼は持ち合わせており、今後消費コストが高くなるであろう剣ですら、自前かつ望んだ性能で製作してあげるヤバそうな可能性を秘めていた。

対してミィの戦闘スタイルはINT特化の短期決戦型。最近では強力な範囲魔法を手に入れ、大量のモンスターを薙ぎ払う火力の持ち主となっている。

反面、アーチャーの資金面と比べてMPへのステータス割り振りが少ないビルドのおかげで息切れを起こしやすく、MPポーションの消費が激しいせいで、やや心許ない。

単純な防御力やINTを強化するより、MPを確保できる装備が彼女には好ましいだろう。

彼女を連れ立って、目的地であるイズのお店に向かって石畳の街中を歩いていくと丁度、人が捌けた後で暇そうにしている女性がカウンター越しに見える店舗を発見した。

「あら、いらつしやーい」

ドアのカウベルを鳴らしながら店内に入るとライトブルーの髪を揺らす店主と思わしき女性が笑顔で出迎えてくれた。

NPC相手のローカルゲームならいざ知らず、身振り手振り全てが伝わるVRMMOゲームにおいては相手は本物の人間である。

キチンと礼節を持って接するロールプレイを重んじるアーチャーは丁寧に言葉を選んで返した。

「お邪魔するよ、美しいお嬢さん。少々装備品について店主の方に相談したいと思って
いるんだが、取り次いで貰えるかな？」

「まあお手。でも店主はこの私、イズよん」

「ほう、これは驚きだ。生産職として名を挙げる一流の腕を持ちながら、見目麗しい美人でもあるとは…いやはや天は二物を与えずというが、貴方を見ていると僻みより先に目を奪われてしまうな」

「うふふ、なにになに。もしかして私ってばナンパされてる？」

「フツ…貴方を素直に褒め称えたいと思っただけさ。高嶺の花といえど、言葉を紡いで

愛しむくらいは許してくれるだろう？」

アーチャーの中では歯の浮くような台詞も原作キャラが喋ってそう、という免罪符でスラスラと口を突いて出てくる。

幸い、イズもそのノリを理解してくれているようで軽い調子で話を合わせて談笑が続く。

だが、それを快く思わない同行者は動揺がバレないように視線だけを右往左往させてから、意を決したように口を開いた。

「……すまないがイズ殿。彼と私の分の装備を見繕って貰えないだろうか」

普段の一步引いた態度と口調から一変したミイに誰よりもアーチャーが驚いた。

なぜか無言で睨みつけられるが、心当たりがない彼は狼狽えるばかり。

しかしミイという人間をこの場で初めて接したイズは彼女が男顔負けの偉丈夫だと勘違いしてしまう。

「……内心の彼女は「ええ〜：焦ってたら固い言い方になっちゃったよお〜」と顔こそしかめつ面だが、真逆の感情に揺れ動いていた。

「あらあらゴメンなさいね。装備のご相談という事だけど、2人はどんな戦い方をしてるの?」

そこから告げられた内容に顔を顰めるイズ。

「ミイに関しては資金に難があるのでMP上昇の補助アクセサリーだけの販売となるが、有ると無いとでは大違いだ。」

そして彼女の鮮やかな髪と同様に染色した「魔法のコート」をオマケしておいた。

毒竜の付近ではMP自動回復量を底上げする防具がドロップする事も告げておいたので、しばらくは資金集めに余裕が出来るはず。

彼女に関しては消費アイテムも含めればこれぐらいが妥当だろう。

しかしアーチャーの装備については頭を悩ませる。

弓使いは絶対数が少なく、有効な武器や防具の情報が不足している上に彼はSTR特化。

必然的にHP、VIT、AGIといった耐久や回避面が疎かになっている。

重い近接武器ならばHPかVIT。軽武器か魔法職ならAGIかそもそも、火力に振り切るかでビルドが明確に振り分けられるのだが、そのどれも無いSTR特化というのは何とも判断に困ってしまう。

無意識に唸り始めたイズに申し訳なきを感じながらも時間が掛かると判断したアーチャーは、店内を見て回る事にした。

「……………」

棚や壁には剣や槍、斧といった武器から服や鎧に装飾品が所狭しと並べられ、調べて

見ればどれもが高性能な代物であり、如何にイズが評判通りの腕前を持っているのかよく分かる。

「……………」

残念ながら、弓のラインナップはごく僅かだったが、初心者の方とは比べ物にならない強さだ。まずはこの辺りから調達すべきか、とアーチャーは考えて資金と性能を吟味していく。

「……………」

「……………ミイ、先程からずっと私の背後に張り付いているが、何かの遊びかね？」

「へあ!? ベ、ベベ別に気のせいで…おほん! 気のせいだよアーチャー」

「口調まで変わって、気のせいは無理があるのでは？」

イズとの会話以降、ミイとの距離が（物理的に）狭まっていた。

アーチャーが右に進めば右に、左は左へ。そして一步前に出ればすり足で近寄る。

気になって話を向ければ、ボロこそ出るが凛々しい顔をしてキチンと受け答えが返ってくる様は、以前の彼女とは思えない別人のような立ち振る舞いであり、それが以前打ち明けたロールプレイの一環だと彼は気づいた。

なぜ、このタイミングで？

という疑問はあるが、ミイは頬を赤らめながら何故だか嬉しそうな顔している所を見

るに、きつと役を演じるのが楽しいのだとアーチャーは解釈しておいた。

耳を澄ますと荒い鼻息が聞こえるが、女性相手に指摘しづらいのでそこはスルーしておく。

やがて、とある一角に何とも琴線に触れる武器が展示してあるとアーチャーは手を伸ばして性能を確認した。

「イズ嬢。これは…」

「ん？ ああそれ？ スキル上げの為に製作したのは良いけど、装備ポーンスがDEXだから人気が無いのよね…ってまさか」

「ああ、気に入った。…まずはこれを貰おう」

そう言ってアーチャーが取り出したのは弓でも矢でも無く、

【黒と白の双剣】だった。

『New World Online』では職業によるキャラクターの住み分けは存在せず、装備する武器種や戦い方によって獲得するスキルが変化して多様性を生み出している。

別に魔法使いだから剣を持つてはいけないという縛りは存在しないせず、装備ポーンスが高ければ優先して使う事もあるだろう。

ただそのまま剣を使い続けて魔法剣士のようなビルドが可能かと思えば、先にアー

チャーが述べたように使い続けている武器種にスキル優先度があるらしく、育成は困難を極める。

「うーん、単純にステータスUPの装備品扱いでも良いと思うけど、それなら防具を充実させた方が…」

「心配ないさ」

アーチャーは自信たっぷりに笑い、双剣を手にとると、まるで曲芸のようにクルクルと回転させて順手、逆手と持ち替えて手触りと重量を確かめる。

その動きは明らかに初心者では無く、手慣れた強者を思わせる滑らかな動き。彼が最初から双剣使いと呼ばれても納得できる巧さだ。

そして、両手の剣を十字に交差させて、感触に満足いったアーチャーは含み笑いで告げた。

「弓兵が双剣を使うのも、面白いとは思わんかね？」

「はあ。」

繰り返し告げるが、アーチャーは「あの幼馴染の世話役」である。

本人は普通のつもりでも、少なからず影響を受けているのは間違いない無かった。

迷宮探索とヤンデレのストーリーキング

「スキル： 仕切り直し を獲得しました」

アクティブ状態の敵に背を向けた時、基礎AGIに+50。

獲得条件：

ダンジョン最深部から連続100回の離脱を成功させる。

「これはまた不名誉な獲得条件だな…」

「ハアハア…な、何か…スキルでも、得られた…の?」

毒竜の迷宮入り口で悩むアーチャーと息を切らせているミイ。

今日も今日とてレベリングや新しいスキルを身に付けようと2人でダンジョンアタックを繰り返していたのだが、どうにもうまくいかない。

「特に有用でもないがね…。さて装備を整えたとはいえ、ここに挑むには早かったかな?」

「ううん…奥のヒドラ以外は安定してボス部屋に辿り着けるから、毒対策さえしておけば勝機はあると思うの…でも」

人前とは違い、2人きりになると気弱な性格に戻るミイは、体育座りになりながら攻略法について頭を悩ませている。

ボスモンスターとして最奥で待ち受けるヒドラを始め、そこに辿り着くまでの雑魚モンスターやフィールドギミックなど、至る所に毒の状態異常が待ち受けるダンジョン構成は、盾役や回復手段が乏しい2人には荷が勝ちすぎるようだ。

撤退と再挑戦を繰り返し、何度か死亡判定を受けてしまったミイとは裏腹に、ここまでノーデスのアーチャーから、今回でちょうど100回目だと告げられて、めげるように呟く。

「ああ、このダンジョン難しい！　こんなの絶対攻略なんて出来ないよ」

「しかもユニークアイテム入手には更にソロかつ初回踏破だったか…鬼畜にも程があるな。それと、やはりパーティメンバーでも募集するかね？　最近街で金髪の僧侶姿をした魅力的な女性が…」

「それは却下します」

「むう…」

ミイ曰く、バグ仕様の剣弾を含めて今は情報を他人にバラすべきではないと諭されてコンビだけの冒険が今でも続いている。

ネットではそろそろ第1回のイベントが開催されるのでは？　と噂になっており、そ

ういった情報戦対策の話だとは分かるのだが、派手なエフエクトを撒き散らす剣弾による纏め狩りを自重した結果。育成が滞っているのも事実だった。

正義の味方を目指すアーチャーにとって、強さとは最低限以上に確保しておきたい要素であり、少し焦りが出ていた。

「……ミイ。一つ提案なのだが、しばらく互いにソロで活動してみないかね」

「えっ……」

一瞬で瞳から虹彩が失われ、虚無へと沈む眼。

しかしアーチャーにとってそれは『見慣れた反応』だったので、女性にはよくある話と勘違いして話を進める。

「いやなに、私と君では少々、プレイスタイルが噛み合っていないからね。スキルが手に入るまで手分けするのも手だと思わないか」

遠距離攻撃を得意とする2人だが、矢さえあれば休みなく継戦可能なアーチャーに対し、MP消費が激しい魔法使いのミイでは補充及び回復のタイミングが違いすぎて、足並みが揃わない事が多々あった。

サービス開始から今まで集まった情報の中でスキルの習得条件には、先ほどのような連続で高難易度の行為を繰り返したり、長時間フィールドで寝たりと一風変わった、言い方を変えれば尖ったプレイが必要とされるのが判明している。

現段階では互いが互いに遠慮して中途半端な行動が多くなっているのは確かな事実。特に今まで一度も死に戻りしていないアーチャーだが、ミイを気にせず戦い続けたらどうなるのか。少なくとも研究する余地はあっただろう。

決して彼女の相手をするのが面倒くさい、というわけではなく、強くなる為の一時的な処置。

そう言い聞かせてアーチャーは説得を試みる。

そしてたつぷり2時間ほど掛けて、途中ダンジョン攻略に来た赤い大楯使い達に痴話喧嘩だと茶化されたりもしたが、ようやく話がまとまる。

「分かった…我慢する…」

「…理解してくれて嬉しいよミイ。とりあえず1週間は離れて活動してみよう。だが、連絡したい事があればいつでもチャットしてくれて構わんからな」

「うん…五分おきにすゆ…」

「おっと？ それは流石に困るな」

別れ際に「絶対強くなる絶対強くなる絶対強くなる」と俯きながら呪詛のように繰り返していたが、アーチャーは気にしない事にする。

それぐらいは「友人」も普段から呟いているので、きつと女性にはありがちに違いはない。

：彼の価値観は世間一般から明らかにズレているのだが、指摘する者はいなかった。去つていくミイを見送つて一息ついた彼は、久し振りに自分のステータス欄を確認する。

アーチャー

Level 35

HP 100

MP 50

STR 85 $\langle +1 \rangle$

VIT 13 $\langle +18 \rangle$

AGI 13

DEX 24 $\langle +38 \rangle$

INT 0

装備

頭 $[\text{空欄}]$

体 $[\text{空欄}]$

右手 $[\text{白亜の洋弓・III}]$

左手 【木の矢】

足 【空欄】

靴 【空欄】

装飾品

【フォレストクインビーの指輪】

【フォレストクインビーの指輪】

【フォレストクインビーの指輪】

スキル

【弓の心得：Ⅳ】 【短剣の心得：Ⅰ】 【矢作成：Ⅱ】 【生産の心得：Ⅱ】 【鍛冶：Ⅰ】

【見切り】 【正義の味方】 【仕切り直し】 【遠目】

レベルに関しては、適正レベル帯をかなり超過しているせいで上昇速度が緩やかになってきている。

そしてこの男、資金の殆どを武器に一点集中させすぎて、防具を更新していないので未だに全裸。…もといタンクトップ姿のまま。街ではある意味悪目立ちしているのに気がついていない。

「改めて見るとステータスUP関連のスキルがほとんど無いな…。ふむ、今日からは趣

旨を変えて双剣でも戦ってみるか」

弓を仕舞い、取り出したのはイズの店で衝動的に購入してから更に一段階強化を施したお気に入りの「白亜の短剣・Ⅱ」と「黒曜の短剣・Ⅱ」だ。

戦闘中の装備変更には専用のスキルが必要となる為、未取得のアーチャーはミイに敵を近づけさせないよう弓ばかり使ってきた。

たまには近接系の武器を使用して別系統のスキルを獲得したいと考えての選択である。

そして新たな狩り場を目指してマップを頼りに森を進んで行くと、何やらポコポコというか、ゲシゲシというか、小気味良いリズムが聞こえてきた。

不審に思ったアーチャーは、ここが低レベルプレイヤー向けの森林地帯だと知っていたので無遠慮に近づいていく。

やがて草むらを掻き分けた先に居たのは、一人の少女と大量のモンスター。

彼らは群がって攻撃を仕掛けるも、彼女にはまったく効いた様子は無く、そのまま呑気に寝続けているという奇怪な場面だった。

「なんでや」

呆気に取られるアーチャー。

少なくとも10は下らないモンスターに攻撃されてダメージを負わない防御力も充

分異常だが、何より驚いたのは黒髪のショートヘアに緩い幼顔をした少女に見覚えがあまりすぎたからだ。

頭に手を当てて、深い深いため息を吐く。

「よもや、まったく同じ姿にするとは……らしいと言えはらしいが何をしているんだ、楓」
事前の話では、理沙が親からテストで良い点を取るまではゲームを禁止され、楓もそれに付き合うような流れだった筈。

しかし蓋を開けてみれば、目の前にいるのは見間違えるはずもない産まれた時から一緒に居る妹分の姿。

：正確には寝ているだけなのだが、相変わらず行動基準が分からないと、アーチャーは声を掛けようとして、踏み留まった。

ここで下手に接触を持てば、自分がこのゲームをプレイしているのが2人に知れ渡ってしまう。それだけは回避したいと見た目や口調まで変えているのだ。

自分からボ口を出すわけにはいかなないと、胸に誓う心とは裏腹に「こんな所で無防備に寝て、もし悪い奴に捕まったら……」と完全に兄目線で心配する自分もいるアーチャーは、何とか足を動かして、ブリキ人形のようにゆっくりと距離を取る事に成功した。

そんな様子を遠巻きに見ていた赤い大楯使い……クロムは掲示板に少女メイプルのも書き込みながら、さつきまで美少女と会話してたのに今はもう別の女の子を狙う怪し

い不審者がいると、住人に注意喚起するのだった。

後にこれが原因でアーチャーへのHEIGHTが高まり、公式イベントを引つ掻き回す大問題に発展するのだが、今はまだ誰も知る由もない。

所変わって、街の南側に位置する地底湖に移動したアーチャー。

スキルの取得も目標の一つだが、現在の装備である白亜の短剣を生産及び強化する素材として、この湖から釣りで取れる純白の魚鱗が必要だとイズから教わっていたのだ。

あらかじめ購入しておいた釣竿を垂らして1時間程。

釣果に関わるDEXの数値を一時的に弓を装備する事で高めたアーチャーは、それなりの速度で目的の鱗を集めていたが、延々と釣れた魚に短刀で一撃を入れる単純作業に飽きが来ていた。

ただの釣りスポットという事もあって、周囲に人影は無く、気を使う必要も無い。

そこでアーチャーは片手に持ったそれを何となく眺めていたかと思えば、一計でも案じたのか立ち上がって身構えると、

『湖に向かって弓を構えた』

「いわゆるガチンコ漁という奴だな」

岩を投げ込んだり、露出した岩肌には振動を与える事で水中に衝撃を伝播。気絶させる古典漁法の一つ。

本来ならば他に様々な条件が整わなければ不可能なやり方だが、ここはゲームの世界。やってみる価値は充分にあると、よりにもよって森で放ったレーザービームじみた威力の鋼鉄剣を装填した。

「……フツ！」

一息の後に、地底湖中央目掛けての一矢。

それは以前と同じように光の奔流を生み出して湖面に突き刺さると、轟音を立てて水飛沫を撒き散らし、美しい地下水を湛えていた湖に大穴を開けた。

凄まじい威力によって穿たれた水底に見えるのは、次々と絶命していく魚のエフェクト。当然、目的の品である大量の鱗もドロップしていく。

上手くいったな……。とほくそ笑むアーチャーだったが、直後にゴゴゴ……という地響きを聞いて立ち竦む。

視界の端に地底湖の横穴がチラリと見えたが、それよりも早く彼の頭に過ぎったのは

『退避』の一言。

劍弾によって掻き分けられた大量の水が、引き潮の如く押し寄せて津波を引き起こしたのだ。

「そ、そこまで再現するのがこのゲームは?!」

大穴へ押し戻された水流が殺到し、ぶつかり合い。反動で発生した波が四方八方へと散らばっていく。

その時、何処からか「いいいやああ!」と絶叫が響き、驚いた視線の先にはいつから其処に居たのか、金髪タレ目の少女が波に攫われて溺れかけていた。

幸い、魚達からヘイトを買ったのか取得したばかりの「仕切り直し」のスキルが発動したアーチャーは、罪悪感による焦りと高AGIによる瞬発力で彼女の元へ素早く向かうと、すかさず抱き抱えて出口へひた走る。

「ちよつ、ちよつとなに、何が起こってるのよ?!」

「…まさか湖を撃つたら津波が起こるとは…」

「馬鹿じゃないの!?! どうやったたらこんな範囲攻撃…つて来てる、来てるううう!!」

開けた平地ならいざ知らず、狭いダンジョン内で引き起こされた津波は行き場を失い、鉄砲水となって2人に襲い掛かる。

「すまないが、君もしつかりと捕まってくれ」

「ひいー」

途中の通路でポップした雑魚モンスターに引つかからないよう、ステップを刻みながら駆け抜けるアーチャー。

金髪の少女は、もはや脳の処理が追い付かずギョツと抱き締めて固まるばかりだ。

すぐ後ろでは水に巻き込まれたモンスター達が、サイクロン洗濯機のような回転で迫る地獄絵図の中、ようやく見えた出口を目指してラストスパートを掛ける。

そして、差し込む光の元へ抜けた瞬間。吹き出した濁流に飲まれた2人は地面を転がりながらも、何とか脱出に成功した。

【スキル： 守護者 を獲得しました。】

戦闘状態が継続する限り全ステータスに＋1。(最大＋30)

獲得条件：

一定以上の総ダメージから他プレイヤーを守る。

「ぐう…何というマッチポンプだ…」

短時間ながら神経をすり減らすプレイングを繰り返した為、ハアハアと息を切らせる

アーチャーは愚痴を溢す。

その隣ではリアル側で気絶してしまつたらしい金髪の少女が、打ち上げられたマグロのように横たわつて目を回していた。

そして誤算だったのは、波に巻き込まれたモンスターが窒息ダメージで死亡した上、同じ方向に流される関係で周囲を埋め尽くす程のドロップアイテムに囲まれる事になった。

もはや魚の鱗など小山が出来るほど積み重なっている。

思わぬ収穫に喜びたいアーチャーだったが、自分のミスで危険に晒してしまつた彼女に詫びを入れねばと身体を揺するも、完全に伸びているらしく、芳しい反応は返つてこない。

流石にこのままにはしておくのは気が引けるアーチャーは、安全な街まで送り届けるために彼女：フレデリカの肩を抱き、膝裏から手を差し込む『お姫様抱っこ』の形で移動を開始するのだった。

——その様子を

木陰からじっと見つめていた紅髪の少女。

一度別れたものの、本当に5分おきにチャットを入れていたミイは、返事が返ってこない事に不安を覚えて、彼をストーリーキング……もとい、偶然道がいつしよだったと言いつつ、後を尾け回し……散策していた。

地底湖への道は一本道の洞穴だったのでバレないように、近くの木に隠れて待っていたのだが、目の前のアレは何だろうか。

大事な宝物を抱えるような繊細な手つきで抱かれ、あまつさえ彼と密着するような至近距離で遠慮もせずに身を預けるなど、以ての外。

「その顔……覚えてぞ、女」

一方的な嫉妬に燃えるミイはその後、日常生活に支障が出るほどゲームにのめり込み、数々の強力なスキルを手に入れる。

しかし「まだだ……まだ足りない……」と、約束の1週間が経過しても取り憑かれたように狩りを繰り返し、更には他プレイヤーへストイックな対応をしている所をクールかつ沈着冷静な性格だと誤認され、密かな人気を博していた。

そして第1回公式イベント当日。

肝心のアーチャーは経緯を知らない為、未だに連絡がつかないミイに対して「他に気の合う仲間でも見つけたのだろうか」

と楽観視し、今回得た素材の隠し球を引っさげて、バトルロイヤルへ身を投じるの

だ
っ
た。

集団戦闘とヤンデレの拉致監禁未遂

第1回公式イベント『バトルロワイヤル』

参加者全員を一齐に特設フィールドへ転送。それぞれをランダムに配置した後、制限時間まで生き残りを賭けて戦う集団戦だ。

キル数と総ダメージ、被ダメージ量によってランキングが変動し、上位10名のみ記念品を進呈するという、確実に荒れそうな内容にも関わらず、初イベントという事もあってプレイヤー達の意欲はとて高い。

集合場所である街の広場には一万人と超える人が溢れんばかりにひしめき合い、開始の時を今か今かと待ち構えている。

光り輝くような純白の甲冑に身を包む騎士。

巨大な戦斧を軽々と背負う猛者。

自らの手札を見せない為にあえて潜伏する魔法使い。

物理的にも精神的にも燃えている紅髪の少女。

あまりの参加人数の多さによって、それぞれの存在を認識出来ないが、他と一線を画す雰囲気の際は間違いなくランキングに上り詰める逸材達だ。

そんな雑踏ひしめく中、当然アーチャーの姿もあったが、彼を知る者が見れば今日の出で立ちに驚くだろう。

何せ今まで全裸装備（風評被害）だったのに対し、イベントの為か防具を身に付けているのだ。

そして周囲で一部のプレイヤーがマジマジと彼を見つめて気がつく。

（頭だけフードで隠した全裸……？）

（何で頭装備だけなんだよ！）

（筋肉モリモリマツチョマンの変態だ）

重ねて伝えるが、全裸と呼ばれるのは防具が未使用という意味のネットスラングであり、実際にはタンクトップにストラックスという夏場の男性なら割とある格好である。

ただ、中東の日除け外套に似た装備だけ羽織っている。というのがランキング入りを狙う血気盛んなプレイヤー達からは浮いて見えるようだ。

（ふむ……？ 何故か視線が多い気がするな）

多い気がするどころの話では無いが、これには理由がある。

先日、楓ことメイプルを発見した彼は、さり気なくリアル側の彼女からイベント参加の可否を聞き出し、絶望していた。

今回の参加者が1万人を超えるのは確実。その中で戦闘区域が被るほど接近する確

率はかなり低いだろうが、僅かでも遭遇する危険性があるなら対策は必須。

確実に本人と分らないよう、イベントまでに変装装備を用立てる必要があったのだ。

もはや顔馴染みになったイズに相談した所、オーダーメイドかつ生産職として二流の仕事は出来ないと、結構な値段と素材を要求されて、他装備に回す資金が底をついてしまう。

彼女にはマイルドにアーチャーの事情を話したが、カラカラ笑うばかりでまともに取り合つて貰えず、本人にとってこれは死活問題であると説得しても安くはならなかった。

値引きを諦めたアーチャーは今日までに何とか資金繰りを重ねてきたが、『隠し球』の製作にも金を回す必要があり、何とか数を揃えた所でタイムアップ。

ギリギリ装備だけ済ませてイベントに臨んでいる。

何はともあれ、顔を殆ど隠しているのに反して視界は充分確保出来ているし、何より装備ボーナスでDEXが底上げされているのも良い。

そしてリアル側で変声機を掛けて声色も変えている以上、よっぽどの事が無ければメィブルにバレる心配は無いだろう。

やがて上空にはマスコットキャラらしき、デフォルメされたドラゴンがカウントダウン

ンを開始し、緊張感が場を満たしていく。

最優先事項はメイプルに存在がバレない事。しかしアーチャーもランキング上位を目指すつもりでいる以上、今まで秘匿してきた剣弾と『隠し球』を駆使して戦い抜くつもりだ。

「3……2……1……」

転送され次第、即戦闘もあり得る。

至近距離戦を想定して双剣を携えたアーチャーは一瞬の浮遊感を感じた後、輝く光の眩しさに目を閉じて、再び開けた瞬間。

そこに広がるのは深緑豊かな森林と一体化するように建造物が顔を出す廃墟の王都。崩れかけた城壁や剥き出しになったエントランスなど木々に囲まれながらも、ある程度視界が確保出来る立地からのスタートだった。

特にすぐ傍に、周囲を見渡せる監視塔らしき小窓部屋があるのが素晴らしい。

まずは当たりを引いたなど、アーチャーは安堵して双剣を下ろし

「ん？」

「おっ？」

隣にメイプルがいた。

「……………」

ダンジョン入口に入ったと思っただらラスボスがいた。その事実思わず意識が飛びかけるアーチャー。

「まだだ…まだ諦めるな。何のために変装までしているんだ。自分だとバレる筈がない。」

むしろここで仕留めれば、少なくともこのイベントで接触する機会は訪れないのだ。そう思い直し、心を冷徹に研ぎ澄ませて向き合う。

「どうしたの、お兄ちゃん…？」
一瞬でバレた。

可愛らしく首を傾げて不思議そうにしているメイプルは、アーチャーの正体に微塵も疑問を感じていない様子だ。

そもそも、このゲームをプレイしているどころか、VRMMOというジャンルに手を出している事すら知らせていないのに、何故ここまで自信を持って話しかけられるのだろうか。

まさか、監視でもされている？ いや流石にそこまでではされないだろうと思考を打ち切る。

「い…いや勘違いでは無いか？ 私の名前はアーチャー。残念ながら妹はいないぞ」

「え……うん…？ たしかに声も喋り方も違うような…」

「！　そう、そこだよ。世界には3人似た人物が居るといふからな。君も勘違いしたの
だろう」

「そう…なのかな？」

確信めいた発言から論されて、疑惑へと転ずるメイプル。

この時、アーチャーは言葉巧みに話を逸らして煙に巻くつもりだったが、残念ながら彼女の本能では、既にアーチャーⅡお兄ちゃんの図式が完成しており、そのお兄ちゃんが言うなら違うかも知れないという謎の論理矛盾が生じて、別人扱いしているだけだったりする。

知らぬは本人ばかり也、とはまさにこの事。

両者ともすれ違いのまま、アーチャーは他人という認識で話は進む事になった。

「ええと、それでメイプルは、これからどうするのかね」

「どうつて？」

「いや、自分から戦いに行くか、待ち構えるか。決めているなら参考迄にな」

頭の中で逆の選択肢を選ぼうとする策士アーチャー。

「え〜と私AGIが0で足が遅いから、ここで待とうと思うよ」

「0…だと…？」

「うん！」

あまりの極振りに頭痛がしてきた彼は、浮き上がる嫌な予感を感じ、周囲にプレイヤーがいない事を確認してからメイプルというキャラクターの性能について聞いて聞いた。

この時点で顔見知り以上の対応なのだが、2人とも普段の距離があまりにも近すぎて気が付いていない。

「……毒竜を食べ…食べた？ え、いやそれ以前にVITが200超え…？」

その内容はスキル「ヒドラ」やユニークシリーズの装備を始め、ステータス面だけでも理解の範疇を超えており、自信を持っていたバグ仕様の剣弾すら確実に上回る理不尽の塊と言えた。

そのヤバさを一端でも伝えると、まずは「ヒドラ」。

周囲に毒霧を発生させたり範囲麻痺攻撃で行動不能にした上で、強力な召喚獣ともいうべき本体のヒドラを戦わせる事が出来る複合スキル。

本来はMP消費が激しいという弱点があるのだが、「悪食」というスキルを盾に装備した効果によって、触れた相手を無条件で武器ごと喰らい尽くす上にMPへ還元。

即死と状態異常の無限ループが可能になっている。

そして、それらを乗り越えてメイプルに到達したとしても、待ち受けるのは鉄壁じみた防御力を誇る天然の城塞。

アーチャーは、遠い目をしてから一人頷く。

(なるほど…メイプルは天然からの偶然とはいえ、プレイヤーはここまで強くなれるものなのか。なら…ランキングに入る為にも自重しているべきでは無いな)

最後に確認しておこう。

彼は『メイプルの兄貴分であり、その影響を受けている』。

ニコニコと心底楽しそうにしている彼女を他所にアーチャーは決心して告げる。

「すまないが、私もランキング入りを目指す人間でね。ここらでお暇させて貰うよ」

「え」

そう、ここで手をこまねいている場合では無かった。遠方では巨大な火柱が周囲を焼き尽くし、重なる魔法陣から光が照射され爆発を起こす。そこかしこでプレイヤーの悲鳴や雄叫びが木霊する生き残りを賭けた戦いは既に始まっているのだ。

下ろしていた双剣を再び構えてメイプルに背を向けた。

「袖振り合うのも他生の縁、私はここから離れよう。さらばだ！」

自重という言葉を外付け破壊装置で摘出されたアーチャーは、戦場に参加するべく駆け出した。

「先ずはそこに隠れている長剣使い。悪いが仕留めさせて貰う……」

メイプルと会話しながらも、強かに建物内の死角に潜むプレイヤーを察知していたアーチャーは不意打ちを狙って鋭く斬り込む。

バレると思っていなかった相手は驚きから対処が遅れ長剣を振り被るが、既に遅い。踏み込んだ低姿勢から、鎌首を持ち上げる蛇の軌跡で迫る黒と白の双刃。もはや剣を合わせる事も出来ずに立ち尽くし

「……」【パラライズシャウト】

「ぬおおお!!」

「ぴぎゅっ!」

突如放たれたメイプルの範囲麻痺攻撃に、両者とも前のめりに倒れ込む。

「な、何が……」

起こった? と感想を漏らす間も無く、うつ伏せになって動けないアーチャーの耳に入ってくるのはズリズリ……と重い何かを引きずりながら近づく足音。

それはつい先ほどまで居た位置からゆっくり…ゆっくり…聞こえてくる。痺れる体に鞭を打ち、何とか頭だけを逸らして上を仰ぎ見ると。

ガシャン！ と顔の真横数センチに、黒い大楯が突き立てられて息を飲むアーチャー。

「ねえ……何で逃げるの？」

「メ、メイプル……？」

その表情は、本当に純粋な疑問を浮かべた子供のような無垢さで、心底訳が分からないうという顔だ。

しかし見下げられる角度と太陽の逆光のせいか、薄ら寒いナニカを感じずにはいられない。

「お兄ちゃん……アーチャーさん？ なら傍に居てくれるよね。もっとお話してよ」

「ぐ、が……が……」

「あつ、そつか！ ついつい、やっちゃった…。痺れて喋れないよね。ごめんなさい」
そこに一切の悪感情は無く、

「…でも、これでゆっくりお話し出来るから瓢箪から駒…？ 籠の中の鳥、だね！」

メイプルは大楯を退けたかと思えばそれを持って、同じく動けない長剣使いに近づ

「ちよつとお邪魔しますよーつと」

転んだ角度が悪いせいで、一連の光景を麻痺からの行動不能で目撃してしまった彼は、少なからず麻痺耐性があつたのか、泡を吹く直前のような顔つきで必死に命乞いを口にする。

しかし、メイプルの頭の中を占めるのは、暇になると思っていたイベントで楽しく過ごせる相手が見つかった嬉しさのみ。悲痛な叫びは一切、聞こえていない。

「お、おのれ……この黒薔薇の騎士、があああああん！」

盾に触れた瞬間、煌めくエフェクトになつて散る不運な長剣使い。

話には聞いていたが、何という理不尽さだろうと彼は怖気を感じた。

当のメイプルといえば、一仕事終えたとばかりに「んー！」と背伸びをしてから、疑う事を知らない笑顔で振り向く。

そう、出会つてからずっと。彼女は笑っている。

その瞳に落ち窪ぶような陰湿な雰囲気は微塵も感じられず、太陽のような明るさのまま本当に彼の側にいられるのが嬉しくて堪らないのだ。

燦々と輝く日の光が、自らの眩しさに気付かないように。

屈託の無い親愛の感情は彼の目を焼き、何処に隠れても照らして探し当て、苦しんだとしても理解はしない。

メイプルにとって、彼は絶対に共にいるべき存在だと。世界の常識だと疑わない子供じみた独占欲と横暴さが、その胸を占め続ける故に。

「さっ、お兄ちゃん。こっちでお絵かきでもしよー」

未だ痺れて動けないアーチャーを、お気に入りぬいぐるみのように引きずって、開けたエントランスに居座るメイプル。

無駄に画力が高い彼女は昇り竜のアートを描きながら、他愛もない話を投げかけ続ける。

麻痺に耐性を持っていないアーチャーは適当に話を合わせながら、症状が時間回復するのを待つ。

しかし、ここで無策に逃げようとしても再び麻痺を掛けられて無限ループに陥るか、深刻な禍根をリアル側で残す可能性が高い。

このままでは不味いと、必死に思考を巡らせるアーチャー。
やがて苦渋の決断と恥を忍んでメイプルに取引を持ち掛ける。

それは、今イベントにおける最大最悪同士の共闘依頼だった。

蹂躪戦闘とヤンデレの不法侵入

555：名無しの実況使い

ペインもヤバいけど、ドレットも半端ないな

556：名無しの実況使い

誰だそいつ

557：名無しの実況使い

ご存知…ないのですか!?

558：名無しの実況使い

短剣使いのトッププレイヤーやろ。早すぎて運営のカメラでも追い切れてない

559：名無しの実況使い

早すぎイ!

560：名無しの実況使い

まさかさつき映ったプレデターみたいな奴？ 完全に人間辞めてんじゃん…

561：名無しの実況使い

いたぞおお！ いたぞおおおお！！

562：名無しの実況使い

>>560

そうそれ

563：名無しの実況使い

ヒエツ…近寄らんところ…

564：名無しの実況使い

ここにいる奴はもう死んでるんだよなあ…

565 : 名無しの実況使い

死んだ兄貴はサツサと成仏してどうぞ

566 : 名無しの実況使い

開始3ヶ月のゲームでここまで差がつくとかバランス調整どうなってんのつと

567 : 名無しの実況使い

まあ初期だから逆にしやあない

568 : 名無しの実況使い

運営が自分の国とか言いださなきやおk

569 : 名無しの実況使い

うわ

570 : 名無しの実況使い

ん？

571 : 名無しの実況使い
待った待った

572 : 名無しの実況使い
うわああああああああああ

573 : 名無しの実況使い
ちよつw ビーム飛んでるw

574 : 名無しの実況使い
ゴジラかな？

575 : 名無しの実況使い
なんだアレ、、ビームとドラゴン？

576 : 名無しの実況使い

今画面端で大虐殺が起こってなかった???

577：名無しの実況使い

毒霧と毒液と麻痺で王城が汚染されとるw

578：名無しの実況使い

【速報】王城跡でラスボス降臨（オプシヨン付き）

579：名無しの実況使い

まるで意味が分からんぞ！

580：名無しの実況使い

いや本当なんだこれミツ首のドラゴン？が毒吐いて麻痺ばら撒いて逃げたらビームで狙撃されてんだけど

581：名無しの実況使い

阿鼻叫喚で草

582 : 名無しの実況使い

悲鳴しか聞こえねえw

583 : 名無しの実況使い

お、誰かドラゴン使いのプレイヤーに斬りかかったな

584 : 名無しの実況使い

やつちまいなー！

585 : 名無しの実況使い

この距離ではドラゴンは貼れないな！

586 : 名無しの実況使い

は？

587 : 名無しの実況使い

は？

588 : 名無しの実況使い
理解出来ないんじやが：

589 : 名無しの実況使い
大斧喰らってピクリともしてねえ

590 : 名無しの実況使い
バグ？

591 : 名無しの実況使い
は？

592 : 名無しの実況使い
マ？

593 : 名無しの実況使い

盾に触れたら消えたぞ…

594 : 名無しの実況使い

即死!?

595 : 名無しの実況使い

ラスボスかと思ったたら本当にラスボスだったでござる

596 : 名無しの実況使い

この大楯使いの女の子? 見た目に反してエゲツないにも程があるな

597 : 名無しの実況使い

可愛いは強い

598 : 名無しの実況使い

強すぎんだよオラァン!

599 : 名無しの実況使い

ん？

600 : 名無しの実況使い

待って今度は横からビーム連射

601 : 名無しの実況使い

画面見えねえ

602 : 名無しの実況使い

これ別のプレイヤーか

603 : 名無しの実況使い

監視塔に誰かいるな

604 : 名無しの実況使い

何だこの威力極振りでもこうはならんやろ

605：名無しの実況使い

なつとる：やろがい！

606：名無しの実況使い

見えた

607：名無しの実況使い

え弓

608：名無しの実況使い

弓からビームw

609：名無しの実況使い

矢じゃなくて剣やんけ

610 : 名無しの実況使い
それありなん

611 : 名無しの実況使い
弓使いなのか、剣使いなのか : もうこれわかんねえな

612 : 名無しの実況使い
そういやアイテムはともかく武器の数に制限なかったな :

613 : 名無しの実況使い
お、集団で行ったか

614 : 名無しの実況使い
まあ人がおる内に潰さんと手数足りんくなるしな

615 : 名無しの実況使い
はっや

616：名無しの実況使い

え、この弓使いAGI高すぎない？ 動きが忍者なんだけど

617：名無しの実況使い

一人だけシューティングゲームの自機みたいな動きしてんな

618：名無しの実況使い

来た

619：名無しの実況使い

短剣使い喰らいついた

620：名無しの実況使い

いけええええええええええ

621：名無しの実況使い

は？

622：名無しの実況使い

ドラゴンの方が短剣使いに食いついたぞ

623：名無しの実況使い

おいまさか

624：名無しの実況使い

女の子と喋ってんぞ

625：名無しの実況使い

まさかこの二人：

626：名無しの実況使い

ああああああああああ

627：名無しの実況使い

やっぱりコンビ組んでやがる!!!

628：名無しの実況使い

勝てるかこんなもん！

629：名無しの実況使い

仲良くおてて繋いでんじやねえよ！

630：名無しの実況使い

男さん痛そうで草

631：名無しの実況使い

裏山

632：名無しの実況使い

おいみんなコイツやっちまおうぜ

633 : 名無しの実況使い

夜道には気をつけるんだな：

634 : 名無しの実況使い

申し訳ないがリアル危害はNG

635 : 名無しの実況使い

近づくとドラゴン、離れるとビーム

636 : 名無しの実況使い

なんだイチローか

637 : 名無しの実況使い

うわぁ

638 : 名無しの実況使い

あばばば

639：名無しの実況使い

ドラゴンから出た毒が溢れて一階が毒沼やん

640：名無しの実況使い

こんなんですんだら無念すぎるわ

641：名無しの実況使い

つか弓つてこんなに強いん？ 初耳なんじゃが

642：名無しの実況使い

知らん気にも止めてなかったわ

643：名無しの実況使い

さつき弓スレ見てたけど全員「剣!？」で満場一致してて草

644：名無しの実況使い
チートの可能性が微レ存

645：名無しの実況使い
流石にイベ前に弾くやろ

646：名無しの実況使い
意味不明な攻撃力すぎる

647：名無しの実況使い
毒ドラゴンも充分意味不明なんだよなあ

648：名無しの実況使い
即死盾も啞え入れろおゝ

649：名無しの実況使い
戦い方が派手すぎて人がジャンジャン集まって来るな

650 : 名無しの実況使い
祭りじゃあ！

651 : 名無しの実況使い
血祭り定期

652 : 名無しの実況使い
お

653 : 名無しの実況使い
残り時間のお知らせか

654 : 名無しの実況使い
ランキング気になる

655 : 名無しの実況使い

【速報】一位ペイン

656 : 名無しの実況使い

つつよ。やっぱ廃人様には勝てんわ

657 : 名無しの実況使い

ん？ 弓使いなんか落とした？

658 : 名無しの実況使い

ペイン、ドレッド

659 : 名無しの実況使い

メイプル？

660 : 名無しの実況使い

メイプルってまさかあの女の子か

661 : 名無しの実況使い

範囲攻撃ヤバいからな、この子やろ

662 : 名無しの実況使い

男の顔www

663 : 名無しの実況使い

めっちゃ真顔でメイプル見てるw

664 : 名無しの実況使い

そら(キラーマシーンが横に居たら)そうよ

665 : 名無しの実況使い

あ

666 : 名無しの実況使い

あ

667：名無しの実況使い

逃げたw

668：名無しの実況使い

追え！

669：名無しの実況使い

男逃げた瞬間にドラゴンw

670：名無しの実況使い

肅清かな？

671：名無しの実況使い

ぶりぶり怒る女の子可愛い

672：名無しの実況使い

騙して悪いが…

673：名無しの実況使い

とぼっちりで10人くらい死んだな

674：名無しの実況使い

なんだこのカップル!?

時は少し遡り、ランキング発表直前。

メイプルに『ある取引』を持ち掛けて共闘態勢を取ったアーチャーは、彼女を人寄せの囿にしつつ、八面六臂の活躍を見せていた。

(尚、成立までに6回麻痺ループで行動開始が遅れた)

その原因の一つになっているのが、以前獲得したスキル「仕切り直し」。

発動条件に、敵へ背後を向けなければならぬ縛りがある為、地底湖で繰り広げたような撤退劇にしか使えないと思いついていた。

しかし今回のバトルロイヤルという環境下では、全員が敵であるという判定が功を成

し、四方八方から向けられるヘイトは途切れる事なく彼に向けられ、AGI+50という破格の恩恵を与え続けている。

更に【守護者】のスキルにおいてもそれは同様で、常時戦闘状態ともいえる現在、一定時間さえ経過してしまえば最大値である全ステータス+30のまま戦う事が出来た。

これらの作用により、基礎ステータスの合計値だけなら参加者内で一二を争うレベルにまで高められているアーチャー。

彼はこの時点で、相方であるメイプルに次ぐ理不尽な高性能を發揮しているのだが、彼女という最も参考にしてはいけない実例に惑わされて、ゲームバランスがおかしくなっている事に『今は』気が付いていない。

しかし、何より恐ろしいのは…。

「くそっ！　まずはあの弓使いを狙え！」

「あの意味不明娘より、こっちのコバンザメ野郎だ！　飽和攻撃で動きを止めろ！」

メイプルが召喚する巨大なヒドラを目印にワラワラと集まるプレイヤー達だったが、一部の者は見ただけで分かる規格外さに怖気をなして、周囲を飛び回るアーチャーを優先的に狙う。

魔法使い達が一齐に杖を構え、数少ない弓使い達も狙いを定める。

アーチャーは崩れた王城の屋根から屋根へと飛び移りながら移動を繰り返していた

が、やがて近くに聳え立つ監視塔目掛けて大ジャンプをした。

「今だー！」

態勢を変えられない空中こそ最大の隙。

風、炎、水、雷、土、光、闇の魔法に加えて殺到する矢の嵐は、並のプレイヤーであれば確実に仕留められる火力だ。

「……遅いぞ、諸君」

しかし、空中の不安定な状態にも関わらず、既に攻撃を予期して矢を番えているアーチャーの方が一手早かった。

放たれたのは鋼鉄剣を素材にした剣弾。

発射と同時に白条の光線：ビームと化したそれは、向かってくる魔法と矢を、激流に拐われる枝葉のように容易く呑み込んで、そのまま術者諸共、消し去ってしまう。

呆気にとられるプレイヤー達だったが、次の瞬間には追い撃ちの剣弾が次々と放たれて、リアクションを起こす前に脱落していく。

「何だあの弓使い!!? MP消費もクールタイムもどうなってる!!」

「即死で必中とか、こっちも大概じゃねえか!!」

即死級の破壊力を持ったこの剣弾こそ、アーチャーの真骨頂。

その攻撃はあくまでも『通常攻撃』である為、スキルのようなMP消費も再使用時間

制限も無い。

まさしく矢継ぎ早に放たれるそれは、残弾ある限り決して終わらないのだ。

そして今回、用意したのは剣弾の種類は2つ。

放てばビームとなり、地底湖の一件のようにオブジェクト破壊の効果がある『鋼鉄剣』。

そして着弾時：正確にはダメージ発生時に爆発を起こす『初心者 of 長剣』。

それぞれを都合999本ずつ。

ストレージに仕舞い込んで、ここぞとばかりに乱用し続けている。

特に、高速戦闘での射撃戦は元々得意としていたFPSシューティングゲームと酷似しており、以前の感覚を思い出してきた彼のエイム力は抜群に冴え渡り、ツールアシスト無しの才能のみで、一発必中を誇っていた。

加えて、隙を縫っては順調に『仕込み』を施していくアーチャーは、出だしこそ遅いものの最期の追い込みはうまくいきそうだと安堵し、鋼鉄剣を余裕綽々で装填したのも束の間、不意に鳴り響いたランキング上位者の通達に驚いて取りこぼしてしまう。

第3位 メイプル

消極的な防戦しかしていない彼女が、3位というトップ帯に食い込んでいる事実には、今更ながら異常な状態だと気が付いて冷や汗を流す。

プレイヤー達が押し寄せる波の合間を見てメイプルの隣に降り立つと、心ここに在らずの状態で恐る恐る質問してみた。

「もしかして……我々はやり過ぎているのではないか？」

「えーそうかなあ？ アーチャーさんがいつもやってるFPSでもみんなすぐ死んじやうよ？」

「いや私は別人だし、ヘッドショットを決めれば……つてそうか！ 即死の時点でおかしいではないか!？」

やっと正気に戻ったアーチャーは、如何に自分達が理不尽な行為を繰り返していたかを自覚した。

特に自分に関してはバグと思わしき剣弾の挙動を惜しみなく使用しており、これ以上目立てば、運営に不具合報告や通報をされてしまうのではないかという疑念が背中を過ぎる。

「?」

メイプルの、事態を理解していない疑問顔を他所にして強張った顔で訝しむアーチャー。

悩んだ時の癖で、瞼を閉じて天を仰ぎ見るほど首を反らした瞬間

ゴチンツ

ハアハア…

「!? 何か当たっ……誰もいない？」

振り返っても誰もいない。

後頭部に何かしらが衝突したような感覚と気配を覚えたのだが、周囲に人影の類はまったく無い。

「どうしたの？」

「いや……気のせいだろう。少々違和感を感じただけさ」

「ふーん」

改めて体調を確認してみれば、そう

「やや汗ばんだせいとか、やけに首筋が濡れている気はするがな……」

「……………」

ともあれ冷静になる事ができたので、せめてこれからは自重しようと心に誓うアーチャー。鉄の矢をストレージから取り出そうと中空に手を差し出して、がしりと掴まれる。

「メイプル？」

「……今すぐログアウトして」

「何を突然……ここでリタイヤしたらランキングに「ログアウトするの!!」

至近距離で浴びせかけられた突然のシャウトに目眩を起こしそうになる。

「くっ……それはアレかね。ランキング上位に残りたいから私を蹴落とすつもりで……」

心当たりを口に出してみるが、メイプルは無言で見つめるだけで言葉が発しない。理由は定かではないが、かなりご立腹らしく口をムツと噤んだまま動かない。

突然の心変わりには訳が分からないアーチャーだったが、徐々に近づいて来るプレイヤー達の足音に危機感を覚えて無理やりにも手を離す。

「あっ……」

「君もリタイヤしたくないだろう！ それにスキルならいざ知らず、STRの君では私を止められんよ」

「む……!!」

共闘はここまでか、と判断して飛び退く。

鉄壁のメイプルならば不意打ちされようが、畳み掛けられようが無傷だが、防御力に關しては頭装備しか無いのも手伝って割と紙装甲のアーチャーは、被弾を嫌って大きめに距離を取る。

不機嫌さを微塵も隠す気が無い彼女はすぐさまヒドラを召喚して追い縋るが、付き合いの長い兄貴分には追撃など予想通りとばかりに、軽々と避けて離れていった。

やがて王城跡の遙か遠く、プレイヤーの気配すらしない遠距離まで走り抜けたアーチャーは、ほぼ原生林といって差し支えない深い緑のエリアまで辿り着くと、修羅場を切り抜けた後のように大きく一息つく。

「やれやれ、久しぶりに癩癩を起こしたな。…明日の休みは偶然を装って期間限定品でも買って……ぐっ!？」

今後のリカバーを考えながら、出っっぱなしにしていた弓を仕舞い込む直前。まるで耳元に息を吹き掛けられるような違和感に身震いして、動きを止める。

流石に2回目とあって、念入りに後方を確認するが人影一つ出てこない。

だが長年、日常生活でも謎の視線を浴び続ける事があるアーチャーは自分の勘を信じて、遭遇戦に備えた双剣に持ち替える。

そして、それを見つめていた人物は感嘆したように声を漏らす。

「あーらら。マジで気が付いてる？俺、気配消すの得意だったんだけど」

「…なに、ちよつとしたキツカケがあつてね」

「制限時間あと僅か、つて所で出会うなんて不幸だね、お互い」

アーチャーと同じような外套で、顔どころか手元まで隠した男は、ゆらりと木陰から姿を現して飄々とした態度で話しかける。

嫌そうな顔こそしているが、戦闘態勢はまるで解いていない。

「それはこちらの台詞だな。どうやら見逃してもくれないようだ」

「アツハツハツ、対戦ゲーで仲良くおてて繋いで遊びましよなんて興奮めだろ？ それとさつきまでの戦い、【遠目】で見てたけどさ。あんた短剣じゃなくて弓使いだ。楽に狩れるなら狩っておこうってね」

男：ドレッドはこのまま時間経過を待てばランキング入りは確定だとして、森の奥で最期の休息、つまりはサボリをしていた。

しかし、残りあと僅かというタイミングで自分のテリトリーに迷い込んだのは、毒竜の少女と共に暴れていたあのビームを撃つ弓使いだ。

目撃した瞬間、ドレッドの生まれつきの恐怖センサーが反応し、こいつを相手にしたらヤバいと静観を決め込むつもりだったが、相手は何を思ったのか突然、震えたかと思えば無防備に立ち止まったのだ。

つまりは狙いどき。センサーが一時停止し、強者への不意打ちが可能という餌をチラつかされて、我慢出来ずについ近づいてしまう。

しかし、結果は相手側の誘い込み。

どうやったかは不明だが、次の瞬間には迷う事なくこちらを見据えて武器を取り替えた。

その意図は不明だが、弓使いと近接で戦って負けるような腕はしていないと、改めて構えを取る。

「ふむ…レンジャー型の短剣使い…いや『アサシン』か」

「もしかしたら僧侶かも知れないぜ？」

「ふっ…ならば私も弓兵ではなく、剣が得意かもしれんな」

アーチャーもまた不敵に笑い、双剣を構えて迎え撃つ。

「さて、残り時間は少ないが『隠し球』を打ち上げるまでは粘らせてもらおう」

ライバルとヤンデレの独占欲（1）

余裕を持った口調で相対しているが、内心で焦っているのはアーチャーだった。

人気の無いエリアまで離れた為、先程まで身体を駆け抜けていた力強い感覚、【守護者】と【仕切り直し】のスキルによるバフ効果の恩恵が消えていたからだ。

倦怠感とまではいかないが、鈍くなった手足でどこまで戦えるのか。確かめるようにスツと左の黒い短剣を前に構えて出方を見る。

「そんな呑気でいいのかい？」

男は軽く言い放つと同時に、踏み込みすら感じさせない無音無足の足捌きで刺突を繰り出す。

辛くも構えていた短剣で捌くのに成功するが、男はそのまま身体を押し込んで受けた腕ごとアーチャーをかち上げると、逆側の手に持っていた短剣ですれ違いざまに斬りつけた。

「ぐっ……！」

傷は浅い、浅いが危機は去っていない。斬った勢いで身体を回転させて再び斬撃で迫る。アーチャーは咄嗟に浮いた腕を引き戻して、両手を交差させるように双剣で守りを

固めた。

「パワースラッシュ」

男の声と共にスキルが発動。青い軌跡を描いて斬り付ける。しかし、ギャリンツという金切り音を立て短剣の動きが止まり、男の顔が渋くなる。

互いの刃同士が点と点で重なったただけにも関わらずスキル攻撃が、ただの双剣で挟み込まれて動かせない。

身体を捻った回転斬りの為、体幹がズレて反撃に一拍の隙を晒す男。

アーチャーはそこを突き、双剣に渾身の力を込めて斬り飛ばす！

「ぐうっ！」

男の身体がフワリと浮き、そのまま真つ直ぐ後方の樹木に叩きつけられると、予想以上のダメージに驚いて思わず口を吐く。

アーチャーは小走りで駆け寄り、左右から三段スライスの要領で水平斬り。

それをしやがみ込んで避けたと思えば縮んだ足をバネにして、横つ飛びの反動で隣の木へ。空中で反転して幹に足を付けると斜め上へ跳ね続け、木々を足場にどンドン上空へと距離を取ると、太い枝の一部で足を止めて地面から睨むアーチャーに声を掛けた。

「やだねえ。明らかにセンサーは反応してないってのにこの強さだ。速さが落ちた代わりに力が強くなるスキルでもあるのかい？」

「さて。手の内を明かすようなお友達なら話したかも知れんがな」

「クツ…ハツハツハツ！ いいね面白いよお前さん。…俺の名前はドレッド。残り1分弱つてところだが、踊ろう…ぜ！」

「チツ…！」

上空からの落下攻撃を見舞うドレッド。名前を明かすのはそれ相応の相手だと認めた故に。

対するアーチャーはバフは無くとも元々がSTRⅡ筋力に偏重したキャラクタービルドである為、攻撃力そのものはかなり高く力押しならまず負けない。

しかし普段は弓をメインに扱い、直前まで金策に走り回った為、短剣に関する攻撃系スキルが一切取得出来ていないのが仇となった。

ただ斬り結ぶだけなら持ち前の技量で何とか誤魔化せるが、瞬間的に物理法則を超える動きが可能なスキルに、対処出来る可能性は半々程度。天性のプレイヤースキルが凄まじい理沙ならともかく、彼はそこまで人外なセンスを持ち合わせていないと苦汁を飲む。

そして残り1分程度ならドレッドの攻勢から耐えて見せるが、アーチャー側はそれだけで終わらせてはいけない。

あくまでこのイベントに参加したのはランキング10位までに食い込んで報酬を得

る事。

メイプルにバレないよう万全を取るなら参加すべきでは無かったが、彼のゲームー氣質はそれを許さなかった。

そしてアカウント停止を恐れて劍弾の使用を自重しようとしたが、最後は一花くらいは咲かせたい。

故にここで何とかドレットを突き放し、仕上げを行う必要がある。

体重も加味された落下攻撃は重く、片手では受け切れない。

外套によって手元まで隠された相手の服装は攻撃の瞬間まで動きを察知させない暗殺者の所行。

手数を減らしたくないが、それはあちらも同様だろう。わずかに拮抗した瞬間にスキルが飛ぶ。

「ダブルスラッシュ！」

続け様の連撃。加えて通常の斬り付けもオマケしたコンボでガード越しとはいえ、再びダメージを負うアーチャー。

距離が離れたかと思えば、ドレットはSTRで負ける相手と真正面から向かい合おうとはせず、ヒット& amp ;アウェイの動きでピンボールのように木々を足場に斬り込んで来る。

そのプレイヤースキルの巧みさは決してアーチャーにも劣るものではなく、むしろゲーム側のシステムアシスト無しで、そんな動きが可能なのかと、実はコッソリと覗き見している運営兼開発者の1人が感嘆のため息を吐くほどだ。

そう、アーチャーの危惧通り運営から『設定ミスによる剣弾の使用』について目を付けられ、監視とまではいかないが動向をモニターされていたのは事実といえる。

特に上役からの指示とはいえ、弓の仕様をたつた1週間で追加した担当開発者は仲間内からも同情とバツシングを受けて涙目で推移を見守っている。

普段から『合法ロリ』だの『小学生かな?』と揶揄されるほど実年齢に比べて見た目が幼い彼女だが、その腕前が一流なのは間違いない。

とはいえ1週間というバカみたいな納期は確実に負担としてのし掛かり、あろう事か無条件で強力なスキルが使用出来るというミスを犯してしまった。

本来ならばこの剣弾。『ユニークスキル』として登録される正規の攻撃方法であり、大量のMPを消費して放つ一撃必殺のスキル技なのだ。

しかし、設定ミスにより取得条件のクエスト達成のフラグが抜け落ち、発生条件であるSTRの値さえ超えていれば、スキル獲得の項目や表示はされずとも、内部的に無条件で使用可能になっていた。

そして仮実装でテストしていた通常攻撃に付与されるといふ仕様を放置しままリリースされてしまったのだ。

無論、それだけなら何人かの物好きなプレイヤーが発見してもおかしく無いが、剣を矢のスロットにワザワザ装備するという発想はアーチャーしか思い当たらなかつたらしく、今日というイベントまで明かされる事が無かつた。

実はこの開発者とアーチャーの頭にあるのは『かつて流行ったゲームのキャラクター』から連想した故のスキル追加と行動であり、クエスト名も『無限の剣製』と、もしリアル側で出会えば同好の士として気が合ったであろう背景がある。

そしてドレッドとアーチャーの戦いは、一方的に削られるまま攻勢は変わる事なく、時間だけが経過し終着が訪れようとしていた。

「そらそら、このままだと削り切っちゃまうぞ」

飛び交う動きになってから防御一辺倒になったアーチャーを訝しみつつも、攻撃の手を緩めないドレッドであつたが、残り10秒のカウントダウンが告げられる直前、彼の口元が歪められた。

「……充分見せてもらった。ではカーテンコールといこう！」

アーチャーは気合一閃。目が醒めるような斬り払いで弾き飛ばし、大地を蹴った。

「マジかよおい……！」

その機動は、その木を蹴って飛ぶ挙動は、ついさつきまでドレッドが見せたプレイヤースキルの一端だ。

猿のように飛び跳ねて、ドンドン高度を上げていくアーチャーに驚愕し、反射的に追いついてくるドレッドだったが、同時に落ちてくる『ソレ』に対処を追われて諦めざるを得ない。

「こいつは……鋼鉄剣?! くっそストレンジからバラまいてんのか!」

追撃を避ける為、講じた策は手持ちで余った武器を投げるわけでも装備するでもなく、ただ落とすという、これまたシステムの穴を突くような裏技だった。

重力に引かれて落ちる剣自体に攻撃力は無いが、質量そのものはゲーム内で計算されている為、無視は出来ない。

そして何より、こうして飛び回る動きを可能にしているのはアーチャーの『擬似模倣』と自称するセンスの一端だ。

流石に某友人とまではいかないが、見様見真似までなら可能と、ギリギリまで見の態勢で観察して、実行に移した。

その結果、彼の跳躍は森の木々を容易く踏破し、登り詰めていく。

その途中で運営から残り5秒の読み上げが始まり、アーチャーは足腰を曲げてスプリ

ングのようにしなせられた枝の一本から、最大での跳躍を準備。——STRという値は腕だけでなく、脚の筋力にも影響している。

ブワリと、人間ではあり得ない速度と高度を叩き出すと、一気に空へと躍り出て限界高度近くまで宙を舞う。

特設フィールド全てを見渡せる高さから、アーチャーは視認すら難しい距離まで離れた王城跡を認めると弓に武器を換装し、鉄の矢を番える。

(一発勝負…外せばとんだ笑い者だが…)

この時、開発者は見た。

跳躍による上昇速度がやがて緩やかになり、重力に引かれて落ちる速度が互いに釣り合う、一瞬の時。

王城跡目掛けて、彼から放たれた一矢を。

残り時間3秒以下。

その刹那の時を剣弾でも無い、ただの矢が獲物を狙う猛禽類のような鋭さで天を駆ける。

風切り音は鷲の如く。狙い澄ますは鷹のように。

超々遠距離からの精密狙撃は寸分違わず目標地点に到達する。

その狙いは王城跡にラストチャンスを見て押し寄せるプレイヤーでもなく、ラストボ

スの如く君臨し、八つ当たりを振り撒くメイプルでもなく、それよりもずっと小さな、アーチャー捨てられたように放置されている『初心者長剣』。

先も説明したように剣弾による効果で、鋼鉄剣は放たれば光条となつて貫通効果を発揮し、そして初心者長剣はダメージ計算時に『爆発を起こす』。

最下級の武器が落ちていてもプレイヤー達は見向きもせず放置していたソレは、アーチャーの手によつて矢のスロットに装備した後、剣弾と認識されてから等間隔で設置されていたのだ。

今までは、何かの拍子に起爆でもすれば御の字としていたアーチャーだったが、ここに至つては自らが仕上げるしか無いと矢を放つた。

爆発する長剣。そしてその範囲内にあつた長剣が誘爆。更に爆発、誘爆。1秒以下で連鎖していく発破現象は周囲のプレイヤー全てを巻き込んで大爆発へと昇華される。

その数、実に999回。

「あ、あわあああああ!?!」

唯一、メイプルだけが一番の爆心地だったのにも関わらず無傷で驚くだけという結果に終わったが、ついに訪れたカウントアップ、イベント終了の合図の瞬間には王城跡で

動く者は彼女しかない結果となった。

本来ならこのままポイントが集計され、ランキング上位3名へのインタビューが予定されていたが、最後に発生した多くのプレイヤーから見れば謎の大爆発に、運営へ大量のお問い合わせが殺到し、一時サーバーが落ちかけたとの噂が出るぐらい荒れてしまう。

そして結論から言えば、

メイプルは理不尽な強さを発揮しながらも既存のスキルを組み合わせたただけだとして3位に入賞。インタビューではウブな噛み噛み口調を見せて一定層のファンを獲得した。

一方、アーチャーといえば剣弾は運営のミスで未実装スキルが使用可能になったとアナウンスされ、最悪の想定だったアカウントBANは免れた。

しかし、それでもやりすぎた反省を促すように、また本人からも周囲の荒れ具合が凄まじいと辞退したのも合わせ、最後の爆破で大量のポイントをゲットしたにも関わらず、ランキングから除外される事になった。

ただ、暫定ポイントでは幻の2位とネットでは称されて、最後に戦ったドレッドと肩を並べる有名人として広く知られるようになる。

先の話だが、これによりアーチャーとドレッドは奇縁のような関係で結ばれ、それぞ

れ『弓兵（アーチャー）』『神速』または『暗殺者（アサシン）』の二つ名で呼ばれるトッププレイヤーの1人として畏怖されていく。

そしてそのプレイヤー達を例に取り、七騎のクラス分けビルド。

セイバー、アーチャー、ランサー、アサシン、ライダー、キャスター、バーサーカーが一部で人気を博すのだが、それまた別のお話。

何はともあれ、第1回公式イベントは無事に終了し、続く大型アップデートで新たなフィールド第二層の解放と、今回の反省を活かしたバランス調整が行われると運営から発表され、多くのプレイヤーは期待に胸を膨らませる結果となった。

「あのプレイヤー…褐色肌で弓使いよね…まさか…えつと名前が、アーチャー!? 嘘アレを知ってるの!?! ……ううん、絶対そう、そうでなきや剣を矢にするとか思い浮かばないもん!」

「デフォルトのスキンデータは…ああほらやつぱりアーチャーだわ間違いない！うわあ嬉しいなあ今の時代でも知ってる人いるんだあ…。だよねだよね格好いいもんね」

「うーん上からは処罰はしないけど弱体化させろって命令、どうしようかな？ 同好の士を失うのは悲しいし、そうだ！ ちよつとここをこうして…」

「うーんうん！ これであレも使えるようになったよアーチャー君！ ふふふ。これで楽しんで貰えるかなあ…貰えるよねえ」

「でもいいなあ…私もログインして遊びたい…マハトマとか、異界の門とか繋ぐ子もいいし、解体しちやつてもいいよねえ…。あーでもこの見た目が反映されるなら、あのキャラ一択だから、ちよつと恥ずかしいかもでち…なんちやつて！」

「よーし！ 上司には怒られたけど元氣貰ったし頑張るぞー！」

「うーんふふふ、ふふふふふふふふ」

「ああやつぱり良いですねこの人。好都合な環境が整ってますよ。依怙鼻肩をするなら徹底的に。這い蹲つてお願いしますと言えるくらい施してあげましょう」

ライバルとヤンデレの独占欲（2）

期待に胸を膨らませていたのはリアル側の彼女も同様だった。

ああどれだけ今日という日を待ち望んでいたか！ 私、白峰 理沙は意気揚々と暗がり
の道を歩いていく。

制服が夏服に変わって動きやすい季節になったのは良いけど、日が長くなるとコッソ
リ動きにくくなるのが弱点なのよね。

今だって本当はもっと早くから動き始めたかったけど、ママに勉強してるってアリバ
イも作らなきゃだったし、ここに来るまで結構苦労してしまった。

でも、今から起こる一大イベントの前では全てが薄く霞むわ。

だって、楓もアイツもゲーム側のイベントで『一定時間は確実に無防備』になる千載
一遇のチャンスなのだから！ つまり終了まで誰にも邪魔されず、好き勝手出来る夢の
ようなひと時。

普段からこういった機会が無いとは言わないけれど毎回、楓が謎の直感を發揮して邪

魔されるのよね…。こういう時、幼馴染って関係は本当厄介。勝手に家内に入って怒られたり、警察に通報されたりしないもんね。

でも今なら、アイツとメイプルが同じゲームをプレイしている時こそ、その心配は一切無い。

むしろママからゲーム禁止を言い渡されてラッキーまであるわ。

一緒に遊ぶなら後からでも良いしね！

やがて毎週張り込ん：よく見かけるアイツの一軒家が見えてくると、後はもう少し。合鍵は既に手に入れているし、将来の家族は全員ゲーマーでこの時間帯は各々の部屋に籠って出てこないのは確認済みだ。

一応念のため、玄関の扉をゆっくりと解錠して中を伺う。

伽藍堂の廊下には人氣が無く、1階の部屋から大音量の電子音が鳴り響いている事から、お義父様、お義母様揃ってゲームに夢中になっているのを物語っている。

私は後ろ手に鍵をかけ直して、抜き足差し足忍足で奥へと進む。

ああ、ここからでもアイツの匂いが漂って思わず立ち止まってしまふ。

目的の為なら真つ先に部屋に向かわないといけないのに、足が勝手にお風呂場へと向かっていく。駄目だけど：駄目じゃない。だってこんなに匂いをさせてる方が悪いの、むしろ被害者だわ：本当に困じゆるり…。

万が一に備えて照明を点けず、洗濯物カゴへ一直線に向かった私は、ガサゴソと中を漁る事なく一発で引き抜いたそれを見て、海賊王の秘宝を想起した。それはまさしく彼の。

『脱ぎたてのパンツ』

「ふう……ふう…… スーハー、スーハー……ぐうう……！」

落ち着け、落ち着くのよ理沙。目的を取り違えたら駄目。ここでトリップして時間を消費するわけにはいかないの！

握り締めたパンツから香る魔性のフェロモンから逃れるために、二の腕を思いっきり抓って理性を保とうとする。

危ない危ない……。私は冷静に心を落ち着けて懐から取り出したアイツが持っているパンツと同じ品を交換して、ゲットした方をジップロックへ丁寧に仕舞い込む。

残念ながら下着は一枚しか無いので、ここでの収穫はもう諦めよう。もう一声分、靴下くらい欲しかったところだけど高望みはいけないわね。

盗聴器だけセットしておこつと。

最後にパツクに閉じ込めた匂いを肺一杯に吸い込んでから、アイツの部屋へと進路を向けた。

無論、その部屋にも鍵が掛かっていたが合鍵を用意するというのは、ここも当然あるという事。玄関以上にゆっくり慎重に扉を開けて様子を伺う。

そこに広がるのは、普段から盗撮しているから見慣れているが、実際に目にするのは久しぶりなアイツの部屋。

楓がピンク、私が青、ここは赤色が多い特徴が出た内装はシンプルかつ機能的に物が配置されて、普段使いを意識したらしさが現れている。

その中央。周囲にぶつからないよう配慮した位置取りでゲーミングチェアに腰掛けるアイツが言葉を漏らしながらゲームをプレイしている。

来るのが遅れた為、既にイベントが始まっているらしく聞こえるのは力んだり、相手を煽ったりするような一言二言ばかりだが、夢中になつている分、更に気づかれにくいはず。

私はゆっくり：ゆっくりと背後に忍び寄り、スツと見下ろす。

ついにここまで来た……ゴクリと無意識に喉が鳴り、両手がワキワキと蠢いてつい乱暴に触ってしまいそうになる。

今、自室というこの閉鎖空間にいるのは私とコイツだけ。2人つきり。

やや蒸し暑い初夏という事もあって服装は薄手の黒いカットソーシャツを素肌に身につけただけの軽装で、毎年この季節になると着ている定番の姿。

もつとだらしのない服の方が楽だと思うけど、昔からキツチリした服が好きなのよね。

そう思いながら、確認するようにシャツに片手で触れる。

V R M M Oでは現実の感覚をデジタル信号に変換する都合上、リアル側での反応が著しく低下する仕様がある。特に顕著なのは五感の内、触覚、聴覚、視覚の三つで没入感を高める為に半ば催眠状態のように感じてしまう。

つまりそれは残る味覚、嗅覚さえ刺激しなければ、ちつとやそつとの事では動じないという事。

「だから触るわよ…?」

シャツから素肌へ。指を這わせて内側へと潜り込ませると、暖かな体温を地肌から感じる事が出来る。ああ…凄い。こんなにくっつき触ったのはいつ以来だったっけ…。

分かっているも興奮が止められない私は、鎖骨に両手を置く。

感じる体温はより直感的に私側へ伝わり、手先の感覚から心臓の鼓動と肺の動きをリアルタイムで感じ取る。

コイツの命を今、私だけが知っている。

その事実が心の内側にある感情を突き動かし、常識という只の枷を取り外そうとする。

駄目だ駄目だと分かってても、どうしてもやってみたい…。

私は期待感から震えながら、そっと首筋に唇を近づけて小さく口を開ける。

ああ…このまま…このまま無抵抗のコイツの…。

頸動脈を噛み千切ったら、

どんな顔をしてくれるだろうか？

ゾクゾクと駆け上る『支配欲』のうねりに身を焦がすような高ぶりが追隨して震えが止まらない。

助けてと哀願するのかな？

訳もわからず見つめるだけ？

怒って拳でも振るう？

ああ…。

どれにしても、どうしても彼は命尽きるまで私だけを想って逝くのだと、そう考えと愛の告白か、それ以上の愛情表現だと確信している。

死という永遠の離別は悲しいけれど、彼の存在にまさしく永劫、私が刻まれると考えるだけで息が荒くなってしまふ。

でも、年相応に恋心を持つ私だっているのも事実。グツと力を入れたい気持ちを抑えて、妥協でその首を舐め回す。

「んっ……ちゅっ……んあ……」

皮膚のすぐ下に大事な血管があるのを確認しながら、べつたりと舌の粘膜を擦り付ける。

一瞬、ビクついたように仰け反って頭がかち合ったが気にせず続ける。というより辞められない。

「はあはあ……好き……大好きなの……んむっ」

いつもなら決して口に出来ない思いの丈を、聞こえていないのを良い事に連呼しながら、汗ばんで来た彼の汗を舐め取り嚙下していく。

私がかこまで彼に夢中になったのは、忘れもしないあの時から。

それ以来、私はずっと恋して、彼を愛する日々を過ごしている。

小学生最後の夏。

夏休みの宿題が終わらないと泣きつく楓に付き添って私とコイツを合わせた3人で夜遅くまで図画工作や日記を捏造していた時、不意に楓が日記の思い出作りにリアリティが無いとか言い出して急遽、肝試しっぽい事をする羽目になったのよね。

昔から幽霊とかお化けの類が、生理的に寄せ付けない私は断固拒否の姿勢だったんだけど、当時はそこら辺にいる男子程度しか見てなかったコイツと楓が2人きりになると、悪い事が起こるかもつていう謎の恐怖心から、止せばいいのに付いていつちゃった。肝試しの場所は近所の林。街中でぽっかり空いた未開発の雑木林は今にして思えば、学校のグラウンド程度の大きさしか無い小さな小さな土地。

でも、その規模ですら夜の暗さで先が見えない林が放つ得体の知らなさは、漫画やアニメで見たお化けが出てくる恐ろしい雰囲気そっくりで、楓は能天気突撃して行ったのとは反対に、私は入る前から足を震わせて立ち竦むのが精一杯。

だからアイツは、最後尾で私を見守っていたんだと思う。その内、引き返して来た楓に引つ張られてズイズイ進まれると、怖くて振り切りたくても親友の腕を離すのもつと別の意味で怖くて、目的地であるゴミの不法投棄場所に辿り着くまで私はぎゅつと目を瞑つて為すがまま。

明るく「お宝だー！」なんて洗濯機の丸い覗き窓を掲げてはしゃぐ楓を見て、ああ：これでやっと帰れると気を抜いた瞬間、当時の私にとって何よりも災難で、今の私に

とつて最大の転機が訪れた。

「ひっ…… あ、ああああああああ!!!」

森なんて呼べない、ざつくばらんな木々の枝葉の影から、道路を走る車のヘッドライトが隙間を縫って私を照らしたのだ。

それを恐れていた幽霊か人魂と勘違いした私は絶叫を上げて座り込んでしまう。

楓は心配して何度も声を掛けてくれたけど、感情を制御できない私は嗚咽混じりの涙声を上げ続けて自分の殻に閉じ籠ってしまった。あの子もそれを不安に感じて、とうとう泣く寸前まで追い詰めてしまう。

守りたいと思った親友に迷惑を掛けて、お化けが怖くて動けない私は申し訳なさど恐怖が入り混じって何も考えられ無くなってただ、震える事しか出来なくて。

それを、そっと掬い上げてくれたのが『彼』だった。

ほとんど変わらない背丈なのに、器用に楓を抱き締めるとママがしてくるようになンポンと背中を叩いて落ち着かせていく。

その間にもアイツは、「大丈夫、大丈夫。悪い奴はやっつけたから」と私に励ましの言葉を投げ掛け続ける。

やがて隣に腰を下ろすと、「お化けはいないから、休憩しよう」なんて提案して来た。……これも私の中にあつた置いて行かれるかもという恐怖心を感じ取って、ここを動か

いという意思表示だったのかもしれない。

楓も落ち着いて来たのか、しやくり声を止めて大人しくなった頃。

ここから出ようと宣言されるも、私は産まれて初めて腰が抜けたせいで、その原因がお化けの仕業だと勘違いして、オーバーフローした恐怖心から気絶してしまう。

次に目覚めた時、最初に感じたのはドクン、ドクンと力強く鼓動を鳴らす心臓の温かみだった。

放心状態で目を開ければすぐ隣にはいつもみたいにもみたくに朗らかに笑う楓の顔。そしてその下にはアイツが腰を90度近くまで曲げて、荷台みたいに私達を背負う姿があった。

女とはいえ、同い年の子供が2人を纏めて背に乗せるなど普通は耐えられる筈がない。だけどアイツは弱気なんて一つも見せずに、苦しそうな声を出しても、まったく私を責めるなんてせずに笑っていた。

「正義の味方だから」そんな言葉を繰り返し何度も口にして、お化けなんてもういない、だから安心と。林を出て悲鳴を聞きつけた大人がやってくる最後まで勇気付けてくれた。

満足に力も入れられない私は当然背負われるまま、何も出来ない上、叫びすぎて声も出ない。だけど何もしないのは申し訳なくて、感謝の気持ちを伝えるようにぎゅつと抱きついた時、気がついた。

ああ…ここに生きてる人がいるんだ。

お化けなんて吹き飛ばしてくれる。私を守ってくれる、私だけの正義の味方は本当にいるんだと、実感した。

今ここで生きているという感覚が、空虚な恐れを弾き飛ばして心に暖かな余裕を生む。

けどそのせいで、この時をキツカケに。

死と生を短時間に繰り返す味わった私の中で、決定的に価値観がズレてしまったのかもしれない。

死んでいるのは怖い。怖いけれどヒーローが助けてくれる。

助けてくれるなら。死んでしまえば私の元に来てくれる。

私の元に来て欲しい。だから、

死ぬほど想いを捧げなきや。伝わらない。

「もつと私だけを見て…？　好きなの、大好き愛してる…。ずっとずっと前から未来永劫愛してるの。楓と一緒に居てもいい、最後には私を選んでくれるって信じてるから

…。好きな事全部してあげるから…。どんな酷い事されても受け入れるから…。ねえお願い…。私ね、私はヒーローの貴方をー

自分でも分かるくらいネットリした口調で囁きながらも、心の底から愛しさを口にして私の中の熱がジンジンと高まっていく。

いつバレてもおかしくない距離まで近づいて、

陶醉した気持ちで耳に呟いた。

「殺したいくらい、愛してる」

数分後、イベント終了時間前になった私はバレないよう早めに彼の家を出て、ホクホク顔で帰路に着いた。

その直後に楓から怒涛のメールと着信履歴が鳴り響いたが、家に着く10分程度ならお風呂だったとアリバイを誤魔化せる。

ママには突然の外出に驚かれるかもしれないけど、ゲームはしてないし気分転換とでも言っておけば怪しまれもしない。

戦利品も手に入れた事だし、今日は何て充実した時間を満喫出来たのだろう。

口の中には彼の汗と私の唾液が、混ざり合って循環している。

これをあと1時間は楽しんでから、夕ご飯と一緒に飲み込んでしまおう。

そして、そろそろゲーム禁止令も解けるはず。まだどんなプレイヤーで遊んでるか分からないけど、今度からはリアルでもゲームでも一緒にいられる。

そんな当たり前が訪れるのを楽しみで、仕方ない。

楓さえ抑えれば、私の勝ち揺るぎないのだから。

——その後、白峯 理沙はサリーという名でゲームにログインし、メイプル、ミイ、そしてまだ見ぬヤンデレ達と、彼というカッツ出来ないケーキに群がるのだった。

炎帝ノ国と第2回、第3回イベント 固有装備とヤンデレのマツチポンプ（1）

アーチャーは飽くまで冗談のつもりだった。

「金がない」

「分かった。じゃあ3兆くらい持つてくるね」

「待て待て待て！ 君は国でも起こすつもりか!？」

己の素直な心情を、よりによってミイへ吐露してしまった事を心の底から後悔した。

第1回公式イベントから数日後。

この日に限って街の大通りは今まで類を見ないほど人の往来に見舞われ、特に同じような赤い格好をしたプレイヤー達がまるで此処は一方通行だと言わんばかりに道を塞いでいる。

アーチャーは彼らを不審に思いながらも避けて歩いていくと、その先には久方振りに

見たミイがユニークシリーズであろう赤いマントに煌びやかな装飾が施された防具を身に付けて佇んでいた。

少し頬を赤らめ、汚れやほつれが無いか隅々までチェックするように振り返ったり、裾の丈を気にしたりとまるでデート相手を待つ少女のように忙しない。

今日は誰かと待ち合わせでもしているのかと訝しむ間も無く、彼女はこちらに気が付くと、瞬間移動じみた歩法から至近距離で急接近。挨拶もそこそこに捲し立てるような話題を飛ばす。

「今日偶然会うなんて良い日だね」

「この前のイベントは残念だけど格好良かった！」

「私も強くなつて、今ならコンビで良い戦いが出来るよ」

「今度一緒に景色の良いエリアに行こう」

「ところでメイプルという初心者の女の子を助けてたよね？」

「どうして私以外とコンビを組んだの？」

「もしかしてリアルでメイプルと親しいの？」

「ねえ何で黙るの？」

「ねえ質問に答えてよ、やましい事なんてないよね？」

「ねえ…ねえ…！」

良くないヒートアップを現実世界での経験から検知したアーチャーは、無理やり話を切るべく、頭を冷やせる良い場所は無いかと視線を巡らせる。

すると目と鼻の先に小洒落た喫茶店が待ち受けているのを発見。何たる幸運とばかりに安堵する。

しかもどうやら期間限定中らしくお二人様で入店すると割引きされるらしく、財布事情が厳しいアーチャー的にも惹かれるお店だ。

「ミイ、悪いが急に甘味が食べたくなつてね。恥ずかしい話だが、その店で付き合ってくれないか？」

「っ、付き合…… はっ、はい！ 喜んで!!」

一瞬、ガツと拳を握り込んだ仕草を見せるミイだったが、彼は気付かないまま店内へと進んでいく。

死角となる後方では大量のプレイヤーが一斉に敬礼を決め、すぐさま解散する異常事態に、道行く何人かは何事かと驚いていた。

喫茶店内は木製中心の温かみのある机や床で設えており、装飾の少ない内装とシンプルなインテリアだけでデザインされた落ち着いた着く雰囲気を感じさせる。

入るタイミングが良かったのだろうか？ アーチャーとミイ以外に客の姿は無く、店のNPCだけが応対のモーションと音声を投げかける。

まあこの方がミイが気兼ねなく喋れるから好都合かと、席についてケーキと飲み物を注文する。

そしてゲーム特有の調理時間ゼロで出されたケーキは仮想世界で作られたとは思えないクオリティを誇り、特に普段から家庭料理や趣味の凝った調理を嗜むアーチャーは、一時の危機感を忘れて感嘆の思いで口に運んでは、しきりに味を確かめている。

合間に飲む香り高い紅茶も鼻腔をくすぐるような爽やかさが見事に再現されて、これでカロリーゼロとは、まるで麻薬のような常習性が出そうだと不謹慎ながらも評価した。

こんな甘くて、素敵で、みんな大好きなケーキ。

もしも、数限られていたらきつと争いが起こる。

そしてこの店に連れて来た時点で途轍もなく上機嫌だった彼女も、注文した季節のフルーツタルトを小さく小分けして食べると、更に瞳を輝かせて尻尾があればブンブンと振り回すような機嫌の良さを見せてくれる。

そのはしやく姿に誘った甲斐があつたと心を落ち着かせたアーチャーは今度、趣味で習得している【料理・V】のスキルでご馳走しようと提案したり、どうせなら食器も拘

りたいなど朗らかな雰囲気の話が弾んでいく中、軽くなった口を滑らせて冗談を放つてしまう。

ミイは、冒頭の金銭の困り事を真正面から受け止めてしまったのだ。

「…？ お金が必要なら幾らでも用意するよ？ 国…が欲しいなら頑張る！」

「いやいや、ただの冗談だよ…。あー、要は装備を整えたいので資金かドロップアイテムを狙うかで相談しているのだ。君の装備姿を見たら羨ましくなってるね」

「…分かった。じゃあ装備外すからアイテム受け渡しの…」

「OK、まずは落ち着きたまえミイ」

まるでヒモに騙されてお金を払う盲目愛の女性ではないかと彼女を危惧する。

目頭を抑えたアーチャーは、落ち着いて話を戻そうと一口紅茶を啜る。

鼻に抜けるセイロンの香りが、温かな喉越しと共に口内を満たして一息をつく、今後の不安について話し始めた。

「運営から弓の弱体化が告知された影響で、今までのような攻撃特化のままというのは些か不味いと思ってるね。良いアドバイスでも貰えれば…程度の話題だよ」

「むう……」

せつかく役に立てるのに…。幼い呟きは空へ消え、持ちかけられた相談について悩むミイ。

しかし途中でハッと、脳内に電流が走ったような表情になってから、顔を顰めたり迷いを断ち切るように首を振ったりと情緒不安定な動きを見せる。

「もしかしてこれはチャンス…？　ここであの女より有能だと証明出来れば…」

「…あまり難しい問題であれば他を当たって」

「駄目だそいつは焼き払う」

「なぜ!？」

苦悩する姿から一変して、突然湧いて出た殺意に、驚愕を隠せないアーチャー。

その言葉がトリガーになったのか、様々な雑談を挟みながらもミイから最終的に提示されたのは狩り場は『北の森』だった。

「ふむ…未踏破のダンジョンと、その場所でドレッドの発見例が多い、か」

「ダンジョンは侵入条件が不明な洋館らしくて情報が殆ど無いの。それとドレッドさんに関して、えっと…狩り場のレベル帯が合わないから短剣使いに必要なスキルを取りに行つてたんじゃないかな？」

「なるほど…何か注意事項はあるかね？」

「！　あの、あのね…モンスターが特殊系だから安定した狩り場にするなら、その無理はしない方が良くないかなーって…」

チラツ…チラツと細目でアーチャーに慣れないウインクを送って言外に「私なら手伝

うよ！」とアピールするミイ。

それを知ってか知らずか、アドバイスを貰えた彼は、特に触れる事なく感謝を伝えた。「ありがとうミイ。お陰で今後も有意義に過ごせそうだ。代わりと言ってはなんだが今度、何でも……とはいれないが、埋め合わせをさせてくれ」

露骨にガツカリする彼女に苦笑し、2人分の料金を支払って退店する。

「あ」

「わ」

そこで出逢ったのは二対の人影。

アーチャーの双剣と同じく白と黒に別れた双子らしき少女達が、アーチャーを見て驚きの声を上げてしまう。

そのシンプルすぎる装備から初心者のようなだが、どうしたのだろうか？

2人は顔を見合わせ、あたふたと交互にジェスチャーと身振り手振りだけで会話するような奇妙な踊りを繰り返して、面白くなって眺めていると、観察されている事によく気が付いた黒髪の方が、顔を真っ赤にして走り去り、もう片方も「すみません！」と後に続く。

「何だったのだろうか……？」

「……なんだろうね。ところで女性の年齢層と体型の好みについて詳しく」

「おおっと、これは失念していた。今日は早めに切り上げて夕食の準備をしなければ。済まないが森まで行ってログアウトする！」

「アーチャーさん！」

「【仕切り直し】！」

非戦闘エリアの街中なのでスキルは発動していないが、まさしくそんな気分だと北に向かつて全力疾走のスプリントをかますアーチャー。

途中で例の赤服達が、やたらと道の邪魔だったので悪いと思いつつも、前回ドレッドから学んだ跳躍方法で屋根から屋根へと飛び移って街を出た。

そして、

「くっ、すみませんミイ様。我々が至らないばかりに……」

謎の赤装束達はミイの周囲に集まると一斉にこうべを垂れて謝罪する。

「……構わん。諸君らの奮闘、この目にしかと焼き付けている。……あの人材は確実に我らグループにとって利となる存在だ。次から本格的に勧誘を開始する！」

2人きりの時とは打って変わった凛々しいその姿は、内心の臆病で恥ずかしがり屋で、アーチャーによって引き出された甘えん坊な一面をまったく感じさせない見事な二面性だった。

その表向きのミイというカリスマの塊に惹かれて集まった信者：今はまだ単なるグループ構成員達は、今回の目的が単なる戦力増強だと信じて号令に従った。

後日。

北の森には死霊系モンスターが数多く生息？ しており、攻撃が通りにくい物理攻撃しか持っていないアーチャーにとって鬼門に近い場所だった。

しかし、彼女のススメとあれば何か考えがあるはずだと粘り続けて双剣を振るい大型アップデート前日まで日付が経過した時、不意にメツセージが流れた。

【スキル：単独行動 を獲得しました】

効果：

一定時間周囲に味方判定がない場合、最大MP・DEX・STRが20%上昇。この効果は一度発動すればゲーム内で3時間継続する。

獲得条件：

単独かつ苦手属性のモンスターと交戦し続け、更に一定数を討伐するまでダメージを

受けない。

【スキル：悪戦苦闘 を獲得しました】

効果：

自身に作用するバフ効果時間を2倍に延長する。

獲得条件：

与ダメージ1%未満の攻撃をモンスターに当て続ける。更に一定数を討伐するまでダメージを受けない。

「なるほど…確かにこれは有用だな」

思わず唸るアーチャーはモンスターからのヘイトを切つてから、歪んだ樹木に背を預けると内容を確認した。

この間にも武器種毎にダメージが微増する【短剣の心得】がIからVへ成長。

加えてモンスターのドロップ品を元に【矢作成・Ⅲ】で、中間素材であろう霊樹の矢を大量にストックするなど思い返せば、苦勞に見合う結果が得られている。

残念ながらダンジョンらしき洋館は、隅々まで森を調べたつもりだが、発見出来なかった。北の森と称するだけあってエリアが非常に広大でほぼ走り詰めの毎日だった

だけに、そこだけが心残りだ。

「そういえばミイの言っていた特殊系モンスターにも出会わなかったな……。偶に火柱が上がったり、燃え尽きた森林地帯を見かけたから炎系だとは思うのだが」

破壊痕から推察するにかなり強力な炎属性の攻撃を使うのが分かる。基本的にこのゲームは死に戻りを前提にしたゲームバランスなので彼にとつては警戒して正解と言える。

さて、ここらで切り上げるかと溜まったアイテムや稼いだアイテムで店売り品による装備で当面を凌ぐ事にしたアーチャーは帰路に着く。

攻撃さえしなければ襲ってこないモンスターをスルーしながら歩を進め、こういう時に帰還アイテムでも買っておけばと後悔した所で、足を止めた。

「……………」

「……………?……………!」

人の声らしき物音。それが聞こえたかと思えば急にアーチャーの背筋に悪寒が走った。

この前のような物理的不快感は感じないが、猛烈に嫌な予感がすると警戒を露わに身構える。

「……………!……………」

「めー……」

間違はなく声の主はこちらに向かっているらしい。どんどん声と足音が大きく、そして同時に悪寒も大きくなっていく。

「【超加速】！」

その少女の声を聞く前に。

直感を信じて木々に飛び上がったアーチャーは、そのまま杖をバネにして距離を離れていく。

その表情は固く強張っており、あのままでは長年の経験から碌な事にならないと信じているが故の行動だった。

彼は彼なりに自己防衛本能はキチンと働いているのだ。ただ刷り込まれた価値観の違いと偶にメイプル並みの頓珍漢をやらかすぐらいでどこにでもいる一般人だ。

少なくとも彼は自分をそう評価する。

だが、彼の生来のスキルは何時だって発動してしまう。

「きやつ!？」

「つ……すまないー！」

逃げるのに夢中になりすぎて、モンスターからも襲われない事から、高を括って警戒を怠ったのが原因で着地しようと地面に降り立つ瞬間、道行くプレイヤーと激突してしまう。

何故か、ポヨンとした感触で接触ダメージは発生しなかったが相手は衝撃で尻餅を突いてしまったようだ。

アーチャーは謝罪の言葉と共に手を差し伸べた。

「あつ、お気になさらずとも…ワタクシの不注意もありますから」

「いやいやそんな事は無い。こちらの不心得で驚かせた事、謝罪する。言い訳するつもりではないが、少々急いでいてね。注意が足りなかった」

「まあそうなんですか…。確かによく見れば深刻そうなお顔。もし宜しければ、ご相談に乗りますよ?」

「ん? いや出会ったばかりの相手にそのような…」

「ふふつ、所謂ロールプレイ、といったら台無しですが、ワタクシ『聖女』と呼ばれるくらいには人のお世話をするのが好きな性格なんです」

純白の僧侶服と、何よりスタイル抜群の美女は茶目つ気のある笑顔でアーチャーと相對した。

普通なら警戒して然るべき会話だが、彼は不思議と…いや必然的に話を聞く事にし

た。

アーチャーは巨乳好きである。

「なんか今、すごい腹が立ったけど気のせい？」

すんでのところでニアミスした相手。白峰 理沙ことサリーもまた、直感を信じるまま突然駆け出したのだが、その場所には誰もおらず、先程まで自分を悩ませていた死霊系モンスターも居なかつたので、置いて来た連れのメイプルが追い付いて来るまでその場で待つ事にした。

「ひっ、酷いよサリー……！ 私、足が遅いんだから置いてくの無しー」

「あはは……ごめんね。ちよつと気になる気配がしたから追いかけてやった。まあ外れだったんだけど」

「えく…何がそんなに気になったの？ 目当てのスキルは取れたんだよね」

今しがたサリーが使用した「超加速」こそドレッドが求めていたというスキルなのが、アーチャーは取得出来なかった。

というのも、このクエストを開始するには

とある古屋の下にある隠し階段を見つけなければいけないのだが、初めて通り掛かった時には炎渦巻く危険地帯と化していたので以降もその場所をスルーしていたのだ。

どこの誰かとは言わないが、そこに必ず来ると網を張って待機していたにも関わらず、裏目に出ている悲しい少女がいるらしい。

「うん、スキルはこれでOK。後はちよつとしたお楽しみにメイプルを連れて行きたいんだけど…」

「え…何々、気になるー！」

「ふふふ。それは着いてのお楽しみみて事。それよりさメイプル」

「なあに？」

「ー…本当にアイツのプレイヤーキャラを知らないんだよね？」

「…そうだよー」

互いに笑顔は失わず、仲の良い親友同士の会話と違って差し支えない態度。

けれども、もしここに他人がいれば体感温度があからさまに下がったと感ずるだろ

う。

「探しても見つからなかった？ メイプルなら本能で分かりそうなものだけど」

「あははー、そんな事無いってばー いくら私でも 見ただけでお兄ちゃんだ、なんて分かりっこないよ」

「まあ…元の容姿から大きく変える事はしないだろうけど、顔を隠されたら流石に無理かな…？」

「そうそう、これから2人で見つけようねー」

「……………なあんか、さつきから余裕そうな態度じゃない？」

「ソナナコトナイヨー」

「まあ…いつか。よし！ それじゃあとっておきの場所にレッツゴー！」

「わあい！」

気持ちを入れ替えて先頭を進むサリー。

その後ろでは速度の関係から歩みの遅いメイプルがニコニコと笑っている。

笑顔を決やさず、思い出し笑いを続ける。

固有装備とヤンデレのマッチポンプ（2）

「洋館のダンジョンでしたら先程までレベリングで滞在していましたよ。ご案内しましょうか？」

偶然の衝突から知り合った女性、ミザリーから思いもよらぬ情報提供に驚きを隠せないアーチャー。

その顔がおかしいのか、微笑みながらも西の方向へ向けて指を指した。

「…その方面も随分と探し回ったのだからね」

「残念ながらあの洋館は固定マップに存在する場所ではなく、特定条件を満たして始めて出現するタイプなんです。一つは死霊系モンスターを一定数討伐する事。もう一つはINTのステータスが低いプレイヤーが近くにいる場合ですね」

「…ああなるほど。それでは見つからないはずだ」

あの日以来、北の森に籠って狩りが続けていたアーチャーだったが、その効率を決して良いものとはいえず、討伐した数そのものは大して多くない。ましてINTに関して完全に0である。

そういったギミックもあるのかと目から鱗の気分していると、ミザリーは先を急かすよ

うに先導する。

「参りましようか。これから用事がありますので、攻略には同行出来ませんが、せめて現地でダンジョン出現の条件を満たしてさしあげますわ」

「そこまでしてもらおう訳には…」

「いえいえ、これはただのお節介とでも思って頂ければ。それにわたくし、幻の2位『弓兵』さんのファンですもの」

「…まあたしかにそういう意味の名前だが…」

突然の呼び名に疑問符を浮かべるアーチャーだったが、ミザリー側は意外とばかりに少し驚いたようで、思わず聞き返してしまう。

「あら、ご存知ないのですか？ 今ネットであるのメイプルと同格だと話題になっている貴方の二つ名ですのに」

「私が…?」

第1回公式イベント終了以降。

メイプルには、そのとんでもなさから『要塞』『ラスボス』『無敵要塞ザイガス』など複数の二つ名候補が乱立し、未だ決め兼ねている状況だが、アーチャーに関しては、そのシンプルな名前と不遇扱いされていた弓使いから生まれた唯一の上位者として『弓兵』の名が広く知られるようになった。

特に公式から宣伝配信された動画内において、後半部分はほぼメイプルとアーチャーの独壇場であり、『New World Online』には2人揃ったヤバイプレイヤーがいるとネット界限で有名になっている。

「私が…メイプルと同格扱い…だと…」

「あ、そつちが気になります?」

人の噂に戸は立てられないというが、普段から手の掛かる妹と認識している彼女と同じ括りにされるなど夢にも思わなかったと嘆くアーチャーの姿に、クスクスと笑みを浮かべるミザリー。

しかし頃合いを図ると、まるでこつちの方が本題とばかりに弾んだ声で質問を投げかける。

「と、こ、ろ、で。ランキング4位は誰か、当然ご存知ですよね」

「ん? いやランキング表は見ていないな…その口ぶりだと私の知り合いかね」

「…ええそうですよ。最強の炎使いにして、広範囲攻撃で並居る相手を焼き払い続けた『炎帝』のミイ。お知り合いですよね」

「なに…。彼女からは一言も聞いていなかったが、そこまで優秀な成績を残していたのか」

ミイの内心では、ランキング除外処置を受けたアーチャーに遠慮した上での未報告

だったのだが、彼の中では単純に褒めてあげたい気持ちで一杯なので、完全に気持ちがいずれ違っていたりする。

「それで、なんですが…。彼女についてどう思います？」

「どう、とは？」

「実はわたくしサービス開始直後辺りからお2人をよくお見かけしていたので、てつきりコンビか、とても仲の良い間柄と思っていたのですが…」

そう言われると…。記憶を振り返るアーチャー。

確かに、第1回イベントが起こる大分前、最初期の頃から、ほぼ付かず離れずで長い時間を共有したプレイヤーはミイであり、このゲームで最も関わり合いが深い相手といえれば間違いなく彼女になるだろう。

「そうだな。確かに（このゲームの中では）一番親しい間柄だな」

「まあ！ それはつまり特別な感情を抱いていると解釈しても？」

「（他人と比べれば）そうなるな」

「なるほどなるほど…。ではもし、あの子…ではなく彼女がパーティないしグループに誘う事態になったら了承しますか？」

「…やけに具体的な疑問だが、まあ断る理由は無いな。私個人としては幾らでも力になりたいと思ってるよ」

「！　そうですよね。貴方もそう思いますよね」

「ミザリー嬢？」

やけにウキウキとした様子に不信感を覚えるアーチャーだが、ダンジョンへの道案内を買って出てくれた相手の機嫌をわざわざ損ねるのも気が引けるな、と遠慮してしま

う。
そんな彼女に手を引かれるような速度で歩を進めていくと、程なくして森の一角に辿り着き、木々が避けるように空けた広場が見えた。

すると、間も無くして来訪者を歓迎するように空間そのものが滲み出し、蜃気楼で揺らめく虚像のように、何もなかった場所に真つ黒な洋館が現れる。

「……ここがダンジョン『アトラス院』です」

「アトラス……院？」

その名前に、記憶の中で引つ掛かりを覚えるアーチャーだったが、ミザリーからアイテムを手渡されて思考を中断する。

「これは『濃炎の指輪』といいまして、STRが上昇するアクセサリです。わたくしには不要ですので是非、餞別代わりに受け取って下さい」

「いやいや、ここまでだけで十分有難いところに、そのような品までは」

「いえいえ、ほんの気持ちですから、ね。さあ！」

急に強引になったミザリーから半ば強引に押し付けられたアイテムを受け取ると、今度は急に足早になって別れを切り出してきた。

「それでは名残惜しいですが、ダンジョン攻略頑張ってくださいね。———それではまた、お会いしましょう」

「？ あ、ああ今度正式に礼をするよ」

最後の一言だけが、妙に尾を引くアーチャーは、エフエクトに包まれて消える彼女を見送り、首を傾げながらもようやく見つけた洋館の前に気持ちを切り替える。

「さて、時間はだいたい掛かったがようやく攻略開始だ。気合いでも入れるかね」
貰った指輪を早速、装備し愛用の双剣を構える。

扉を明け放つ前から漏れ出る怖気を感じながらも、冒険への期待の入り混じった感情でダンジョンに挑む。

それが、彼女によるマッチポンプと知らずに。

フレンド会話にて。

「ミイ、先程アーチャーさんにお会いしましたよ」

「本当か!!」

「ええ計画通り、あの指輪を渡しておきました。そちらでも確認出来るのでは?」

「少し待ってくれ…。これをこうして…わあ!」

「ミイ?」

「ゴホンツ! すまない、少し咳き込んだようだな。何はともあれご苦労だった。これで作戦は成功と言えるだろう」

「良かったわ。出会ったのはアトラス院の近くだったからビックリしちゃった。ついだったから予定通り入り口まで案内しておきましたよ」

「そこまでやってくれたか! 感謝する。…そして、ようやく捕捉できた…!」

実はミイと繋がっていたミザリーが渡した指輪はただのアクセサリーでは無い。STRが上昇する効果は間違いないが、もう一つ。特殊な機能が備わっていた。

それは同アイテムを装備すると、プレイヤーのステータスや現在のHPMP、現在地までもがリアルタイムで把握出来る情報伝達の効果である。

これは将来のアップデートで大規模戦闘が行われた場合、状況把握をしやすいよう先行実装された機能なのだが、ミイはその試験運用だと理由を付けて自分と有力な団員に

あらかじめ複数配布しており、もしアーチャーと出会う事があれば『将来の団員の証』として手渡すよう指示を飛ばしていた。

因みに本来の予定では、喫茶店での会話中にさりげなく渡すつもりだったが、緊張と謎の双子の騒動で逃亡されてしまい、失敗してしまったからこそその次善策だったりする。

だが、捨てる神あれば拾う神あり。

結果的にミザリーのお陰で、ミイの手元にはアーチャーの詳細なステータスや現在地であるアトラス院を示す座標がリアルタイムで更新され続ける結果となった。

「ああ…やつと、やつと、いつでも貴方の事が分かるんだ」

ウツトリと誰にも聞こえないよう呟くと、万感の思いでここまでの軌跡を思い出す。

指輪による所在の把握とは別に、そもそもこの北の森を勧めたのには訳がある。

双剣による近接戦と、弓を用いた中遠距離戦といった間合いを選ばない戦いを得意とする彼だが、魔法属性に関する習熟はほぼ皆無という唯一の弱点をミイは知っていた。

故に生息する多くのモンスターが、高い物理耐性を持つ死霊系で溢れる北の森に誘導。そこへ魔法攻撃が得意である彼女が偶然を装い、合流。

役立つ所をアピールして自分に対する評価を上げようという作戦を立てていたのだ。

元々の性格が大人しく引つ込み思案な所がある彼女は、真正面から誘って断られると

いう可能性を考えただけで、目眩を覚えるレベルである為、この計画の迂遠さはその臆病さの現れとも言える。

しかしその偶然を装う、というのがかなりの難題で全く彼と遭遇出来ないという事態に見舞われてしまう。

ミイを慕う赤装束の信者：のようなプレイヤーと、縁あつて彼らと同様に指示に従つてくれるミザリーを含めて探索を依頼していたが、一向に成果は上がらない。

無論、これには理由はある。

ミイとしては、早々に狩り場を死霊系がないエリアに移すと考えて、別の場所に網を張っていた。

しかし蓋を開けてみれば物理攻撃をほぼ無効にする相手に手数でゴリ押すという、頭メイプルな戦いを延々と繰り返しているなど誰が思おうか。

更にミイがエサとして撒いた「超加速」のスキルクエスト発生場所へ巡回しても、そこへ辿り着きやすいよう雑魚狩りで「炎帝」を使用したのが不味かった。

威力が強すぎてフィールドを長時間火の海にしてしまい、アーチャーには危険地帯と認識されて足を踏み入れる事を躊躇させてしまったのだ。

だが、そういった予想外の展開はここまでだとミイは安心する。

アーチャーには申し訳ないが、アトラス院に叩き込めば彼は必ずや魔法攻撃の重要性

に気が付いてくれるはずなのだ。

だって、あのボスは絶対に倒せないのだから。

「貴方に必要なのは防御じゃなくて、魔法だもん……。あんなぶりっ子した相手なんかを負けたりしないんだから！」

第1回イベントでの動画は広く拡散され、ゲームをプレイしているものならば必ず一度は目にするレベルで知れ渡っている。

そんな中でミイの目を引いたのは遠距離狙撃でも、ドレッドとの戦いでもなく、メイプルと共闘しているシーン：でもなく。

その合間、合間に気心が知れた相手のように振る舞う仕草が、ハッキリと目に焼き付いてしまう。

動画では前半部分がカットされている為、メイプルとアーチャーの間に一方的な永続麻痺ループがあつたのを彼女は知らない。

故に馴れ馴れしくあの人へ話しかけるメイプルだけが彼女の中でクローズアップされ、自分とあの女を徹底的に比較した。

防御特化のメイプルと魔法特化のミイ。

どちらが彼に相応しいか。その答えが自ずと出ればきつと私だけを見てくれるはず。その感情が彼女を突き動かす原動力となつて燃え盛っている。

「アーチャー……さん……」

呼び捨てにするのはまだ恥ずかしい。

けれどこれから、そういった親しい仲間になれば良いのだと未来への展望を頭に描く。

2人で名を呼び合い、2人で食事をして、マイルームが解放されたら2人静かに暮らす。

お腹が空けば口元まで運んであげる。眠くなればベッドで寝かしつけてあげます。お金が欲しければ幾らでも用意して、欲しい物があればどんな手を使っても手に入れるから。

ずっとずっと、私の前に居て欲しい。視界から離れないで欲しい。目の届かない所へ行つては絶対に駄目。

アーチャーのステータスが表示されるウィンドウを愛おしげに撫でながらミイの頬は紅潮していく。

「私が見つけた、本当の私を見てくれる人。優しい貴方を決して拘束なんてしないけど、見守つてお世話するのは問題ないよね」

誰よりも貴方に尽くすから、貴方は私しか目に映らない。

そのためには、もつともつと近く居なければ。

もつともつともつと、彼の事を知らなければ。

はやく あなたの住所が知りたいな

住所、氏名、生年月日、電話番号、メールアドレス、SNSアカウント、血液型、平均血圧、体脂肪率、BMI指数、家族構成、親族関係、交友範囲、ご両親の年収――。

――ああそうだ。引越しも考えないといけない。

彼が望むならアパートぐらいになってしまふけれど、2人の愛の巣を用意しておかないと、メイプルという害虫が集るかも知れないから。

煮え立つ嫉妬の炎と、淡い恋心と称する情炎の滾りが揺らめく中で彼女はどこまでも夢見心地だった。

一方その頃、絶対に倒せないと断言されたボスと相対したアーチャーは。

「カット…カット、カット、カットカットカットカットオオオオ!!!」
「チイツ、相変わらずワンパターンな事だ」

なんと善戦していた。

このボス。正式には物理耐性99%、魔法耐性50%と鬼のような防御率に加え、最大HP自体も途方もなく高いという運営の悪意が滲み出たモンスターである。

物理は殆ど無効。唯一打点の高い魔法はMPを消費してしまう為、倒し切る前にプレイヤー側のMPが息切れしてしまう。

つまりプレイングだけではまともに攻略出来ない悪夢のような仕様だった。

しかも、一定回数の魔法ダメージを負うと眷属として真つ黒なモンスターを生み出すので、そちらの処理で更にMPを消費させられたりと、正に踏んだり蹴ったり。

これでは例え勝つても報酬が割に合わない、攻略が後回しにされてきた経緯を持つのが、ここアトラス院だ。

普通なら物理攻撃特化のアーチャーは早々に諦めるか、撤退してもおかしくない。むしろそうなるようにミイはけしかけたのだ。

だがしかし本人も忘れていたが、ここ最近では死霊系モンスターを相手にしすぎて——「3時間戦ってHPバーの4分の1程度か……アツプデート前のメンテナンスまで後10時間……いけるな！」

——完全に時間感覚が麻痺していた。

幸い攻撃パターンは単調であり、2時間が経過した辺りで『擬似模倣』を利用した行動予測が完了し、それ以降のダメージは一切負っていない。

ならば後は詰めるだけと、彼はひたすら一撃が0・01%未満のダメージしかあたえられない剣を振るい続けた。

それでも問題はあつた。

武器には耐久度が設定されており、それを越えれば破損してロストしてしまう為、並みのプレイヤーではやはりクリアすら覚束無いだろう。

しかしアーチャーの手持ちにはイベント時にドレッドへ投下した鋼鉄剣が回収されており、その後は剣弾そのものを自重して使つてこなかつた分、タップリと保管されている。

そして、弓矢に関しても残弾は大量に残つている上、『矢作成・Ⅲ』のスキルで手持ち

素材から補充も可能と、継戦能力が恐ろしく高められているのが幸いした。

双剣が折れたならば矢を番え、矢が尽きたならば長剣を振るい、アーチャーは半日近い時間を戦い抜く。

その結果。

【スキル：長剣の心得・IV を取得しました】

【スキル：弓の心得・VII を取得しました】

【スキル：短剣の心得・VI を獲得しました】

【スキル：体術・IV を獲得しました】

【スキル：体捌き を取得しました】

【スキル：切り払い を取得しました】

【スキル：真祖殺し を取得しました】

【スキル：強化 を取得しました】

【スキル：投影 を取得しました】

【スキル：鉄心 を取得しました】

【スキル：器用貧乏 を取得しました】

【スキル：守護者・正義の味方・鉄心を統合します】

【スキル：アラヤ を取得しました】

「ぜえ…ぜえ…勝った、のか？」

もはや前後不覚になるほど疲労困憊となったアーチャーは、フラフラになりながらもサーバーダウンまでの残り時間を確認し、最後のドロップ品を回収すべく体に鞭を打つ。

進む先には、エフェクトになって消え去ったボスの亡骸を弔うような棺桶が鎮座し、独りで蓋が開いてアーチャーを待ち受けている。

「これは…」

【ユニークシリーズ】

単独かつ、ボスを初回戦闘で撃破しダンジョンを攻略した者に贈られる唯一無二の装備。

各ダンジョンに一しか存在しない。

取得した者はこの装備を譲渡出来ない。

【赤原礼装】

DEX+10 最大MP +100

【空欄】

【偽・螺旋剣（カラドボルグ）】

STR +30

【破壊成長】

【侵略者】

【虚・千山斬り拓く翠の地平（イガリマ）】

STR +10

【破壊不可】

【巨山化】

【赤のペンダント】

AGI +10

【空欄】

基本的にユニークシリーズとは、ダンジョン毎の特性に加え、攻略者の戦闘スタイルに応じて武器種や防具の方向性が決定される。

アーチャーが唸ったのは、このボス戦で長剣、短剣、弓を忙しく使っていたせいで、まるで性能が一致しない所にあった。

一を極める事が出来ず、多くを修める事しか出来ない。そんな彼が目標としたヒーローと同じ縁を思わず感じ取る。

このまま戦利品をじっくり確認したい所…というか版權とか大丈夫なのかと考えながら、もはや陽が昇って久しく、登校時間まで間が無い。

もし定時のバスに乗り遅れなどすれば、友人はいつまでもバス停で待ち続ける…いやたぶん家に直接押し掛けてくるので急いで家を出なければならぬ。

普段なら家族に朝食を用意するのが日課だが、一日くらいは買い置き菓子パンを並べるだけで良いだろうと判断する。

手早く獲得だけ済ませるとアーチャーは急いでログアウトするのだった。

第2イベとヤンデレのハイエース

第1層の地形を、緑深い森林に侵食された古都と形容するならば、今回の大型アップデートで追加された『第2層』は、石と平野によつて構築された次の文明が切り開かれた時代。というべき世界感をしている。

緑が少ない代わりに広大な空き地や砂漠、荒野、雪山といった特殊な地形までもが点在。建築物の多くは第1層の木製から石造りで拵えられた直線的な造形が多く用いられ、言外に文明の発展を感じさせた。

この階層の特徴はそれだけではなく、街やその周辺には中世ファンタジーの世界からそのまま移設してきたような空き家が多い事から、マイホーム、もしくは自宅機能。更にはギルド機能が追加されるのではと噂され、プレイヤー達の期待感を大いに高めている。

そんな中、立方体型の建物が乱立する中央街の広場で一騒動が起こりつつあった。

1人は漆黒の重鎧に身を包んだ可愛らしい大楯使いの少女。

もう1人は周囲に取り巻きを従える凛々しき紅髪の炎使い。

彼女達は周囲の目を憚らず、声を張り上げている。

「そんなのおかしいよ！ お兄ちゃん…じゃなかったアーチャーさんは貴方の物じゃないんだから、どこに居てもいいじゃない」

「確かに彼の自由意志は尊重されるべきだ。しかし無用な輩が足を引っ張るより、私の『炎帝ノ国』に属した方が必ずや理となる」

「……………」

「遊びながらの方が絶対楽しいもん。そういう効率プレイ？ の押し付けは良くないと思うな」

「仲良しこよしで遊びたいなら個人でやりたまえ。彼はトッププレイヤーとして恥じない行動を取るべきなのだ」

「ほらまた決めつけるー！」

「違う！ 客観的事実だ！」

「……………」

「何かアンタってば女難の相とか出てない？ 大丈夫？」

「…フレデリカ。もし私を連れて逃げてくれと頼んだら」

「冗談。その場で【多重炎弾】かまして私だけでも生き延びるわ」

「なるほどクレバーな答えをありがとう。そして地獄に落ちろパートナー」

彼や彼女達が集まった理由。

それは第2回公式イベント『メダル探索』である。

解放されたばかりの新フィールド第二層『全域』を舞台に、あちらこちらに設置された銀のメダルを集めて10枚に達すれば『メダルスキル』をゲット出来るというシンプルな内容で開催されようとしている。

ただし、メダルを集める方法はただ探索を繰り返すだけでなく、プレイヤーVSプレイヤー。つまりPvPによる争奪戦が推奨されており、特に第1回イベント上位の10人は、10枚分の価値がある金のメダルがあらかじめ進呈されており、戦いを激化させようという運営の魂胆が見え透いている。

そして今回、イベントの開催期間は現実で2時間だが、ゲーム内で7日間まで引き延ばされる時間加速を実施。

つまりログインしたプレイヤー達は、ただ長時間ゲームプレイをするだけでなく、計画的な休憩や睡眠など体調管理の面も求められる持久戦の一面を持ち合わせていた。

「まったく…同じランキング入りを逃した者同士、コンビでも組んで他の連中を見返してやろうと思ったのに、何で所有物争いを見せられなきやいけないのよ」

「悪いが私は何も知らされていないぞ…。ログインしたら既にああなっていたのだ」

街の広場で互いの主張を捲したてるメイプルとミィ。

その様子を物陰から伺う2人は地底湖の一件からフレンド登録を済ませていたものの、あまり絡みが無いまま時間が経過し、そのまま自然消滅するような関係だったのだが、第1イベントの結果から仲間意識が芽生えたフレデリカ側から、今回のイベントに對して前々から共闘を持ちかけられていたのだ。

アーチャーとしては当初、目の前で言い争う2人のどちらかがコンタクトしてくる物だと思っていたの對し、こうして現地を（一方的に）合わせるまで何も連絡を受けておらず、少し不穩に感じつつも予定通りフレデリカと組む予定にしている。

…実のところ、両者共に『アーチャーが自分の所へ来るのは当たり前』なので改まって約束を取り付けなくても良いという気持ちで働いたのが真相である。

だが、少し遅れてログインしたアーチャーにとって、接点がない筈の2人が自分について言い争っているのか全くの不明であり、更に遅れてきたフレデリカにとっても厄介事が起こっているようにしか見えない。

「ていうか、報酬目指すならあの炎帝のグループに入ったら良いんじゃない？ 別に私はソロでも頑張れるし」

「いや、女性からの先約を無下に断るなどしないさ。それに弓の仕様についてかなり修正を貰ってね、検証が終わるまであの集団に合流するのは時期尚早だと思っている」

「ああ〜そういうアンタが大暴れして弱体化したんだっけ」

「…ニヤニヤ笑うのはよしたまえ」

今回アップデートにおいて、猛威を奮った一部のスキルについては修正や対抗策の追加が実施され、特にメイプルとアーチャーは大幅に性能が低下している。

特に頼りにしていた剣を矢として装填する【剣弾（ソードバレット）】は正式にスキルとして実装される事を機に、攻撃力は乗算から加算式に変更され、一気に威力が低下。

更にどんな武器であろうと一定量のMPを消費するタイプに区分けされた事で高速連射すら封じられてしまった。

加えて【仕切り直し】に付随する『敵反応をトリガーとする』スキル類も一律、効果範囲が5分の一程度まで縮小されて、以前のようにフィールドを飛び回るのが不可能になっていく。

他にもここまですらないと他プレイヤーからの突き上げが激しいと運営が判断し実行した修正の数を列挙すれば暇が無い。

普通は気落ちして仕方のない処置だが、アーチャーの表情に曇りはなく、むしろそういった逆境に燃えるタイプなのでモチベーションは些かも失われてはいなかった。

そしてヒートアップする謎のアーチャー議論は運営のイベント開始を告げるカウントダウンが始まっても衰える気配はなく、アーチャー、フレデリカの両名は無言で頷きあつて街を後にする事にした。

そんな2人の姿を目撃したとあるプレイヤーは、前々から噂されていたアーチャーの女衒し説をネット掲示板に書き込むのであった。

はつきり言つて、アーチャーの奴と組んだのは間違いだった。

確かに私が有能と判断した通り、メダル集めに関しては予想を超えて役に立つてくれた。

最初や数日は死亡によるリタイアを危惧して危険なダンジョンには立ち寄らず、フィールド上に点在する簡単な物から集める手筈だったが、やたら目が良いアーチャーは一見何もない岸壁を通りかかっても。

「…中腹辺りで何か光ったな」

湖を迂回して歩いていると。

「魚影に違和感を感じる」

更には

「あのモンスター。一匹だけ行動パターンが違うようだ」

どうやら違和感を感じる事に関しては一流らしく、私としては珍しく手放して褒めたんだけど本人は遠い目をして「――慣れたのさ」と話題を逸らされてしまい、ちよつと拍子抜けだった。

けど、メダル集めのペースはかなり順調で3日目の夜には目安である銀のメダル10枚を集めてしまった。

ここまでなら、私はコイツと組んで良かったと素直に言える。

だが、夜の睡眠を前にキャンプ地として選んだ岩場の影に隠れている現在。

安堵していた気持ちは、高まる警戒と反比例して薄らいでいく。

刻々と経過する時間の度に苛立ちが溜まり、無意識に握った両手のアイテムに力が籠る。

当の本人は、まるで慣れた物だと余裕の顔を浮かべているのが更に気に入らない。

一言で言うならコイツは女の敵。女性の尊厳を著しく損なわせる才能の持ち主。決して許せぬ男だ。

その最大の理由は…。

「今日の夕食は、じっくり煮込んだ牛タンのビーフシチューだ。付け合わせに白パンとライスのどちらを付けるかね？」

「両方！」

「うむ、健啖なのは良い事だ」

完全に餌付けされてしまった。

スプーンを握り締めた私の前に差し出されたのは、白い深皿にブラウンの光沢が美しいシチューがふんだんに盛り付けられ、大きめにカットされたタンが顔を出すご馳走の姿だった。

「ふわあ…良い香り」

「冷めない内に召し上がれ。少し濃いめに作ってあるから、レモン水で適時、口の中をリセットするといい」

まるでゲームのアイテムとは思えない逸品に感動しながら、スプーンを差し込むと、

ふるふると柔らかく煮えた牛タンが食べて欲しそうに私を見ている。

それを少しだけ息を吹きかけてから、口に入れると一瞬で広がるのは牛の持つ重厚な香りと、形が無くなるまで煮込まれた香味野菜がもたらす幾重にも重なった自然な甘み。

しかも歯で簡単に噛み切れる柔らかさのタンからは、また別の旨味を醸し出し、舌の上で溶け出すとほどよい食感と共にアクセントを加えてくれる。

飲み込むのすら惜しいそれを存分に味わいつつ、今度は添えられた白パンに手を出して二つに割る。

ふつくら焼き上げられたきめ細かな生地から漂う素朴で柔らかかな感触を手で感じながら、深皿に少しだけ浸して大きめに口を開けて頬張った。

「……っ！」

濃厚な味から一変。

ふかふかのパンと一緒に味わうビーフシチューは、どっしりとした食べ応えをもたらして、口の中を味で満たす満足感を与えてくれる。

「コクの秘密はバルサミコ酢だ。香り高い分、味も相応に強いのだが、牛骨から骨髓を追加してプラスの方向でバランスを取っている」

今度はお米を……。うん、ただの白米だけどバターライスみたいに手が加わってない

分、こつちもドンドンの口の中に入っちゃう。

「酢の酸味は嫌われる傾向にあるが、煮込み料理にすれば香り成分が飛んで濃厚な味を演出できる。今回は君に合わせて長めに仕上げているのでお気に召すと思ってるよ」

聞いてもいないのに、ウンチクを語るアーチャー。

素直に耳を傾けるのも癪だし、2人しかいないので私は無言で平らげ続けた。

アイツも席について、ウンウンと頷きながら無言で夕食を囲む。

そこに目立った会話は無いけれど、夜の帳が落ちて久しい物静かな環境がそうさせるのか、妙な安心感というか落ち着いた雰囲気では進み、結局2回のおかわりとデザートで出された固めのイタリアンプリンで締めて、女の天敵であるダイエツトとかどうでも良くなる美味しい食事が幕を閉じる。

「今日も満足して貰えたようだな」

「…ふん、調子に乗らないでよね。まだエスニックとドイツ料理を食べるまで料理上手とは認めないんだから」

「ふっ、これは手厳しいな。では次からも精進するでしょう」

空いた食器をストレージに仕舞い、打てば響くような軽い言葉を交わして食後の紅茶を楽しむ。

暗い夜空の下、アーチャーたったの希望で焚き火を照明にした暖かい光に包まれて

ゆつくりとした時間が流れていく。

時折爆ぜる枯木の音をBGMに、ついつい瞼が重くなるような心地良さに意識が持っていないかれそうになる。

「ふあ……」

「寝るならキチンとシーツを掛けたまえよ。淑女の寝相など人に見せるものではない」

「うっさい……。でも、ちよつとだけ仮眠するわ」

「ああ、おやすみフレデリカ。：明日の朝食はサーモンのパニーニか、エッグベネディクトのどちらにするか考えておいてくれ」

「……どつちも食べる」

手元にたぐり寄せたシーツから、頭上半分だけ出して答えた私は食い意地が張っているのを自覚すると、恥ずかしくなってそのまま床に着く。

アイツの反応をシーツの隙間からチラ見すると、ムカつく事に微塵も嘲笑う様子もなく子供を見守る母親みたいな微笑ましい表情を浮かべて、音を立てないよう明日の準備をしているようだった。

眠りに落ちるまでの数分間、私はコイツの事を考える。

口を開けば素の性格なのか、ロールプレイなのか皮肉めいた口調と余裕ぶつた態度が目につくけど、それ以外の口に出さない仕草は世話好きというか、お母さんというか執

事のように尽くしてくれる性格をしていた。

まだ本格的な戦闘を行なっていないが、そちらの心配もない。

本人は弱体化著しいとか言ってたけど、とんでもない。試射として放った剣弾の威力は『確実に上がっていた』。

それにユニークシリーズを装備している事から、またおかしなスキルを身につけて、大惨事をやらかすのではないかと私は危惧している。

実際、料理のスキルを高める為、フィールドに200個の鍋を用意。モンスターの攻撃を避けながら調理し切ったらしい。

…もはや何かしらの儀式と疑われても仕方ない様子が頭に浮かぶ。

そろそろ意識を保つのが億劫になり始めた時、不意に思う。

この3日間で大分気心が知れてしまった相手であるアーチャー。

ゲームの中まで、男だの女だの気にしない質なので、普通の友達みたいな感覚で向き合えるのは正直ホツとする。

恋愛とか、色恋に興味が無い訳じゃないけど、そういうのはまだちよつと早いと思うし…。

うん。素直に認めるとゲームのフレンドというより、友達としても大歓迎の相手だ。出会いは最悪だったけど、まあ許してあげよう。

それに、まあまあ優良物件なので多少男女の関係を意識してあげても良いかな？
私はちよつとだけ頬が緩むのを感じて、暖かなシートと焚き火の音を子守唄に、そのまま眠りへと着いた。

そして翌日。

目の前に広がっていたのは、散らばる銀のメダル10枚と。
視界一面が煤けた大地と燃え尽きた草木。

そして、アーチャーの姿だけが居なくなっていた。

第??イベと??ン??レのターニ????ポ??ント

薄暗い、陽の光すら差し込まない地下空洞。

空気の流れる音が獣の遠吠えの如く反響し、鼓膜を揺さぶる衝撃となつて横倒れる男を眠りから覚ます。

「ツ……」は……」

「……起きたようだな、アーチャー」

「ミイ……?」

「わたくしもいますよ。それと団員達も」

「ミザリー嬢まで……何がどうなっている……?」

突然の邂逅に混乱するアーチャー。

胡乱な頭の中を掘り返しても、3日目の夜にフレデリカが就寝したのを確認し、後片付けを済ませて寝た記憶までしか無い。

そこからどう状況が変化すれば薄暗い空間に放り出された挙句、彼女らに囲まれる事になつてしまうのだろうか。

そして何より、なぜミイに膝枕されているのか。

「……………ふふっ」

「ミイ。そろそろ立ち上がりたいのだが…」

「却下する。君は強く頭を打ったようだからな。事情を話すまで暫くは安静にしているんだ……………ふへへ」

内股座りのミイは、アーチャーを膝に乗せて大変ご満悦の表情だ。

ただし人目があるせいか、表情を悟らせまいと真下に俯いてじつと覗き込む。

先程の固い命令口調に反して表情筋は緩み切り、普段はキリリと吊り上がった瞳も、ふにやふにやの骨抜きになった子猫みたいに蕩け切っていた。

アーチャーはじつと見つめられる事に居た堪れなく、視線だけを横に逸らして周囲を確認する。

そこには相変わらず微笑むミザリーの姿と、統一された服装の集団5名がこちらをジツと見つめている。

小声で「は？ミイ様になにさせてるわけ？」「俺マジぶん殴りそう」「ミザリーさんギザカワユス」と聞こえるのは気のせいだと思いたい。

そんな針の筈に晒されながら、ミイから打ち明けられた事の顛末は以下の通りだ。

1. 3日目夜未明。ミイ達のグループ集団『炎帝ノ国』は夜間を推して移動中、謎の怪奇現象…恐らくはフィールドトラップと呼ばれる地形変動で地下に引きずり込ま

れる。

2. その時、たまたま近くにいたアーチャーも巻き込まれてしまった。

3. 周囲には巨大なナメクジの形をした破壊不能オブジェクトが徘徊しており、下手に動けない。

4. 巻き込んでしまったアーチャーだが戦力として頼りにしたい為、目覚めるのを待っていた。

との事だった。

それと、ミザリーに関しては今回のイベントで始めてグループに加入したと念押しされた。

「運が悪いとしか良いようがない……。だがそれでも君に被害を加えるような真似をしてしまい、本当に申し訳無い」

「いや…：トラップが原因ならば不可抗力というものだ。致し方ないだろう。ところで金髪の少女…：フレデリカというプレイヤーを見ていないかね？」

「……いや、まったく見てないな」

「そうなのか？ いや寝る前は側に居たからてつきり一緒に「それがどうしたというのだ？ 何か問題でも？ 君はまず自分の心配をするべきでは？」

アーチャーの言葉を被せるように捲し立て、有無を言わさないミイ。

頭上から覗き込むその瞳は団員達の持つ松明に揺らされてハッキリとは実像を結ばない。

しかし、その瞬きすらしない見開いた表情に、常日頃から心当たりがあるアーチャーは長年の経験から産出された最も効果的な対処。とりあえず後回しを発動して危機を回避する事にした。

「きつと大丈夫だよアーチャー。……手切れ金も渡したし、もう現れないから」

「ミイ?」

「何でもない。さてもう暫くこのままで……」

とうとう我慢が出来なくなったのか、膝枕だけでは満足出来ずに手を翳して触れようとする。

そこで待ったを掛けたのは仮に団員Aとする男プレイヤーだった。

「……ミイ様。僭越ながら少々この男を特別扱いしすぎと進言致します。理由はお聞きしておりますが、まずは腹心たる我らをお導き下さい」

「……………」

「ミイ様?」

「……いや、気にするな。貴公の言を聞き入れよう。総員、再度周囲を偵察した後、空気の流れる方向へ向かい脱出を開始せよ!」

「ハッー！」

お手本のような直角姿勢で敬礼を決める団員Aは、指示通り同じ格好をした4名に声を掛けて四方へと散っていった。

その隙に素早く膝枕から脱出するアーチャーは、情けない姿を見せた自分をリセットするように咳払いをしてから改めて向き合う。

「話を聞くに、ここから抜け出す方法の算段はついているという事かな？」

「はい。ただこれまでの調査で、この広間を中心に全方向から均等に風が流れ込んでいますので、恐らく地形は円錐型のフラスコ形状。上を目指せば辿り着けると判断しています」

気落ちした様子のミイを他所にミザリーから説明を受けて、上を仰いだ。

「とすれば、出口は一箇所か。…ふむ、ここの運営ならば確実にボスモンスターかそれに準ずるギミックがありそうだな」

「ミイもそれを危惧して戦力候補のアーチャーさんを待っていたんですよ」

「ふえ？」

「なるほど…暫く見ない内に成長したようだ」

「？ ミイは始めからこのカリスマで私達を導いてくれましたよ？」

「？ カリ…スマ…？」

「おほんっ！ 雑談はそこまでだ」

彼女に対する決定的な認識の違いが頭を出しそうになったが、寸でところで話題を打ち切られ、物理的にも距離を離されるアーチャーとミザリー。

そしてミイは視線を左右に配ると確認した。

「ところで……団員Aはどこに向かった」

「その横穴に入っていきましたけど……どうかしました？」

「……彼は少々焦っていたように感じる。灸を据え……悩みでもあれば1人になったこのタイミングで、直に聞こうと思う」

「流石はミイですわ」

1人突き進む後ろ姿には、確かに妙な迫力がある。

アーチャーの脳裏に似た雰囲気を持つ友人の悪癖が再生されるが、ミイの場合はカリスマというのだろうか、乱暴な言い方をすれば敵意が漲っているようにも感じる。

何だかんだで友人の悪癖によるスキンシップには親愛の情を感じるので怒るに怒れない事が多々あるのだが、こちらは思わず武器を構えてしまいそうになる物騒さだ。

というか、無意識に取り出してミザリーから首を傾げられた。

「その短剣……北の森の時とは違うのですね」

「ああ……アトラス院でボスを倒した時に、耐久値を割ってロストしてね。代替品を自分

で拵えたのさ」

「え、倒し……えっ?」

唾然とするミザリーを尻目に、アーチャーは思い返す。

あの激戦以降、双剣の作り直しと並行して一気に「料理」スキルを上げる為、鍋200個をイズの元へ頼みに行ったところ

「わ……私の作品をロストしておきながら、鍋? 鍛冶職人に鍋を200? ……ちよつと表出なさあああいい!!」

その有無を言わさぬPVPの後に、思わず勝利してしまったアーチャーは更なる反感を買い、無事出禁を食らって自作するしか無くなったのだ。

幸い、修正された弓関連のお陰で生産スキルにも作用するDEXを上げる必要があったので、鍋と短剣が完成する頃には「鍛冶・V」「生産の心得・V」を副次的に獲得出来てしまった。

『干将』短剣

STR+15

【投擲】

『莫耶』短剣

STR+15

【投擲】

アーチャーの元ネタが愛用している白と黒の夫婦剣とほぼ同じ見た目である為、性能は別にしてかなりのお気に入りだったたりする。

それをいつでも抜き放てるよう腰の後ろに刺して団員と呼ばれるグループ構成員を待つ。

そして暫くした後、戻ってきたのは4人とミイの姿だけだった。

「ん？ 団員Aはどうしたのかね？」

「……残念な事に、私が追いついた時にはモンスターにやられていた」

「そんな…せつかくミイが言葉を掛けてあげようとしていたのに」

ミザリーの嘆きが続いて周囲からも「何て運の無い奴だ」「所詮そこまでの男よ」「俺もミザリーさんに心配されてえなあ」と反応が返ってくる。

少々不穩に思うアーチャーだったが、ここでの部外者は自分なので黙って推移を見守る事にした。

「彼の尊い犠牲は忘れない。せめて我らはこのダンジョンを踏破し、その死が無駄では無かったと証明するのだ！」

おお！ と意気高く『炎帝ノ国』一同は最短脱出路と思わしき通路を突き進んで行く。

道中。閉所での戦闘は逃げ場がない為、苦戦を予想していたアーチャーに反して彼女らとの進行：…というよりパーティ編成に隙が無かった。

大楯持ち3人が正面、左前、右前をカバーし合い。中央のミイが合間を縫ってスキル攻撃。一撃で倒せない相手にはミザリーが回復を掛けつつ前線を維持し、魔法使いの1人が援護と周囲警戒に回っている。

いざとなればミザリーも攻撃に回れる為、背面の奇襲さえ注意していれば鉄壁の陣形といえた。

とはいえダンジョンそのものが巨大である事と、攻撃方法がMPに依存している点。

そして何より、時折現れる破壊不能ナメクジの巡回経路を避ける為、回復を兼ねた小休止は必要不可欠である。

そんな中、アーチャーと言えば。

「戦闘で私の出番はなさそうだな。…だが出来る事はあるぞ」

せめてもの奉仕として、お手製の焼き菓子やら飲み物を提供して和に溶け込もうとする。

味に関してはフレデリカからもお墨付きを貰っているので多少の自信を持っていたが、予想外だったのは女性陣の反応だった。

「これは……凄いですね」

「サケサクサクサクサクサクサクサク……ごくん」

一口囙る度に感嘆の声を漏らすミザリーと、演技も忘れて目を爛々とさせながら、ハムスターのようにひたすら咀嚼を繰り返すミイ。

まさかの好感度爆上がりにより男性で構成された団員達から嫉妬の炎が燃え盛り、遂には我慢が効かない者が現れた。

「……はっ！ クール気取りのワンマン弓使いが調子に乗るなよ」

「ほう？」

ミイに聞こえないよう、真横まで近寄って話しかけて来たのは団員Bだった。

「いいか弓兵。少なくとも俺はお前を認めちやいないぜ。前回のイベントじゃ暴れたみたいだが、修正食らって雑魚落ちなのは知ってた。ミイ様の役に立ちたけりや一からキャラ作り直せや」

敵意を剥き出しで言い寄る団員Bは大楯使いであり、単純な臂力（STR）ならばアーチャーを上回っていると勘違いし、胸倉を掴んで圧力を掛ける。

ぎりぎりプレイヤー攻撃に判定されない嫌がらせ行為に関心しつつ、アーチャーは冷静にその手へ指を掛けて

「……貴様はそこで何をしている？」

「ミイ様!？」

幽鬼のように背後に佇んでいる彼女に捕捉されてしまった。

「いえ、あの……これはですね……。軽い男同士の触れ合いと言いますか……」

「……」

「も、申し訳ありません！」

彼の目からすれば、普段は憧れの存在として煌びやかに映る偶像から一変、鬼子母神かくやという般若の形相で睨まれては完全に萎縮してしまっている。

その様子を冷徹な目で見下ろすミイは右手を掲げ、己の心に従うままスキルを使おうとしてアーチャーにその腕を掴まれた。

「……離せ。組織の長である以上、粛清の権限が私にはある」

「熱くなりすぎだ。彼のいう通り、軽いスキンシップに過ぎないさ」

「しかし……」

「ミイ」

「……分かった」

短く名前だけを呼び、じっと見つめられると自然と頬が赤くなるのを自覚した彼女はそれ以上何も言わず、ミザリーの所へ戻った。

やれやれ、と溜息を吐いて安心するアーチャーだったが、両者の関係が特別である事を目の前で見せつけられた団員Bの怒気は、口にこそ出さないが確実に膨れ上がっている。

く。

だが、本当に恐ろしいのは彼が崇め慕う彼女にこそあった。

休憩も終わり、再び出口を目指して進行する一行。

前衛正面を任されている団員Bは当然ながら消耗が激しく、今までは一定間隔で同じポジションのCとDと位置を入れ替えながら負担を分担していたのだが、ここに来てミイの指示が変わった。

「全力防衛だ。団員Bは私の指示があるまでポジションの変更を禁止する。…これもスキル発現の可能性を考慮してだ。分かるな？」

有無を言わさぬ冷たい炎の表情に思わず気圧された承したが、彼の顔色は喜色に染まった。

憧れのミイに声を掛けられキツイ命令を下されたが、逆に考えれば自分に期待されているからこそその試練だと解釈できるからだ。

大楯を両手で持ち。受けて、捌いて、いなす。

精神的後押しもあって予想以上に健闘する団員Bは本当にスキルを獲得出来たと喜び、嫌な予感を感じていた他の一行も胸を撫で下ろす。

やがて彼のリアル側の体力も底を尽き疲労困憊になる頃、明らかに道中の雑魚モンスターとは一線を画す、筋肉が歪に膨らした真っ白なホームンクルスター型モンスターが待ち構え

ていた。

もう、そろそろいいだろう。

自分は充分頑張った。HPこそミザリーの回復魔法で満タンだが、精神的な疲れは簡単に癒せない。

だが今までの頑張りなら、充分褒めて貰えると期待した団員Bは、荒い息のまま振り返り、目撃する。

感情が一切揺れ動かない。炎帝ミイの顔。

「全力防衛だ。…私は指示があるまで交代禁止だと宣言したぞ。……行け」

「ひっ……！」

「あの、ミイ？ 流石にこれ以上は……」

「ミザリー嬢に同意だ。ゲーム内ステータスは万全でもあの相手は無理だ。何なら私が……」

「では団員B。君が判断したまえ。私の指示を断るか、従うかを」

まさしく無言の圧力。

素のミイを知っていると思っていたアーチャーは、その怖気に心当たりを思い出し、

まさかと警戒する。

その間に団員Bは意を決して、まだやれると立ち塞がるホムンクルスへ立ち向かった。

流石に見捨てては置けないと、援護射撃を実行するアーチャー達だったが、やはり見た目通りタフなモンスターだったせいで戦闘時間が長引き、団員Bはミスを乱発。鉄壁を誇っていた前衛が崩れかけた瞬間。

「炎帝」

ミイの片手から噴き出す紅蓮の炎が、対象を焼き尽くさんと燃え上がり、ホムンクルスと団員Bを一纏めに火葬する。

「な、何故ですか……ミイ様アアアア！」

信じられないとばかりに絶叫し、死亡を表すデジタルエフェクトと化して消え去る団員B。そしてホムンクルス。

啞然とする一行を他所に、ミイは掃き掃除でも終えたかのような爽やかな声色で先を促した。

「……さて、次は団員Cだな？ 君にも健闘を期待している」

その後は、ひたすら同じ事の繰り返しだった。

Cは「炎槍」で焼き貫かれ、Dは「噴火」で蒸し焼きにされた。

Eに至っては魔法使いであり、前衛など不可能だと主張した瞬間。「爆炎」によるノックバックでモンスター群れに叩き込まれてしまう。

あまりの横暴さに普段はミイに付き従うミザリーも流石に口を挟んだが、暖簾に腕押しとばかりに取り合つて貰えず、アーチャーに援護を求めたが彼は諦観の表情を晒すばかりで言葉を発しない。

いや正確には小声で「まさか…3人目…？」と連呼し、脳の処理が間に合っていないかった。

果たしてここまで計算していたかは知る由もないが、5人の犠牲者を払った所で、ちようど出口と目された上層に辿り着く一行。

残ったのはミイ、ミザリー、アーチャーの3人。

広がるのは予想に反して大きい空間を誇る大空洞。

上を仰ぎ見れば、玉座のように聳える断崖の上に空から降り注ぐ陽の光が差し込んでいる。

その直下。

その姿。

放心し掛けていたアーチャーの目に映ったのは、

正気を取り戻すのに充分な衝撃を齎す既視感。

「……………馬鹿な、ありえん」

天に座すは無限にして、万能の願望器。

黄金よりも気高く、宝石すら霞む煌びやかな杯。

不可能を可能とする。夢物語の顕現。

その名は、

『聖杯』

そして、その中に入れた大量の銀メダルを弄ぶ一人少女に、アーチャーは見覚えがあった。

「あら？　ものは試しなんて言うけれど、月の裏側から化石みたいな回線を繋いだ甲斐があったわ」

「カカポみたいに遅くて、カルフォルニアコンドルみたいに醜い電腦世界だけど、私がか分かるわよね？」

「ふふっ…怯えてるの？　恐怖しているの？　それとも泣き叫んで私に踏まれたいド変態なのかしら？」

「……ねえ、答えなさいよ。無銘」

漆黒のコートを翻し、刃のトウシューズで降り立つ究極の造形美。

闇深い夜桜の色をした彼女は不機嫌な顔をしながら、

それでも笑ってアーチャーだけを見つめていた。

番外迷宮とヤンデレの「来ちやつた…」

全身に走る怖気を振り払って、アーチャーは即座に戦闘態勢を取った。

出逢ったばかりの相手から向けられる執着の心。

身に覚えがありすぎる焦燥感。

そして何より、普段の数倍規模で強く感じる危機感が、人生の中で最大級の警鐘を鳴らす。

このままでは絶対に不味い。その直感を信じて彼は叫ぶ。

「2人とも、通路に避難している!」

「え…どうしたんですかアーチャーさん?」

「喋るモンスター…いやNPCか? ……痴女?」

いきなり聖杯の少女に向かって走り出し、用件だけを端的に伝えられたせいで困惑を隠せないミザリーもミイ。

特に少女のファツション。下半身がほぼ全裸という奇抜すぎるデザインを見て、率直な感想をポロリと述べてしまう。

その悪意なく呟いた一言が、彼女の逆鱗を逆撫でる。

「……この私をよりにもよってNPC？ 原始人以下のお猿の分際で、舐めた口聞かない。…あと痴女とか言うな！」

二言だった。

「避けるミイ！」

少女は聖杯を断崖の頂上に向かって蹴り上げると、そのまま刃のトウシューズを垂直に構え、ギロチンの如く振り下ろした。

「……【踵の名は魔剣ジゼル】」

空振りから放たれる衝撃波の刃。

岩盤を切り裂きながら地走るそれは、ミイの体を両断せんと殺到し

「【炎帝】」

逆巻く炎に呑み込まれて、霧散する。

チリチリと舞う残火に照らされて姿はよく見えないが、どうやら大事には至っていないと安堵するアーチャー。

「……なにこれ、意味分かんない。ちよつとこれどういう事！ 私のスペック、ガタ落ちじゃない！」

己の攻撃を簡単に相殺されたのがよっぽど予想外なのか、少女は苛立ちを露わにして喚く。何処かに無線でも入れるように虚空を見つめて袖余りの片手を耳に当てる。

しかし、相手が居ないのか、もしくは居留守を使われたのか。

答えが返ってこない事を知ると、更なるフラストレーションを我慢出来ずに、足元の小石を蹴り飛ばす。

「ならば、好都合！」

その隙を逃すアーチャーではない。

「ッ！」

華奢な見た目をした相手にも関わらず、一切の遠慮も考慮しない渾身の力で双剣を叩きつける。

それを鞭のようにしならせた蹴りの横薙ぎで迎撃する少女。

そのまま何度も互いに得物を交差させ、一触即発の刃を合わせていく。

甲高い金属音と激しい火花。殺風景な大空洞に目も眩むような明滅が木霊し、剣戟の閃華で彩られる。

「このまま押し切らせてもらおう！」

「舐めんじやないわよ！」

焦って力みすぎたアーチャーの隙を突くように片脚の刃で双剣を受け止めた瞬間、軸足を使ってジャンプ。

空中で身を翻すと、首筋を狙って両脚をハサミのように挟み込む。

急所を的確に狙った軌跡に、走馬灯めいたスローモーションの世界が訪れ、意識だけが先行して危機を知らせる。

圧縮された時間の中で身体は鉛のように重いが、何とか一小節の単語を口走った。

「【斬り払い】！」

ここがゲームの世界だからこそ。スキルによつてオートで反応した五体は、致死の一閃を的確に弾き飛ばす。

バランスを崩した少女は、その斬り払いの反動を利用して後方へと距離を取る。

フワリと重さを感じない優雅な着地を決めて、彼女が信条とするバレエのプリマのよう美しく脚を揃えた。

そして値踏みする顔つきでじつくりとアーチャーを観察した。

「……ふうん。やっぱり見た目も強さもズレているのに、確かにそっくり」

ツラツラと、今までの邂逅で見せたアーチャーを評価する。

「……私の一撃を余裕で受けた、鋼の腕。」

「……自身の身より仲間を守る、鉄の精神。」

「……私を射抜く、鷹の表情。」

「そして何より。貴方の理想は、『正義の味方』なのでしょう?」

「！」

「……いいわ、とつても素敵！ マスクデータを見ても同位体か良く分からないけれど…… まあそこは問題じゃないわ」

花咲く笑顔を恍惚に染めて、少女は自己紹介と共に宣言する。

「改めて名乗りましょう。」

…私は『快樂』のアルターエゴ・メルトリリス。

詳細は面倒だから省くけど、はつきり言うわ。

…好きよ。一目惚れ。私の物になりなさい」

「…断る、と言ったら」

「あら、構わないわよ？ その時は私の蜜でお人形さんにして、たっぷりじっくり蹂躪して調教するだけですもの」

アーチャーの頬を、リアル側でもゲーム側でも嫌な汗が零れ落ちる。

少女：メルトリリスと名乗った相手への心当たりが的中し、困惑しているのだ。

端的に言えば、彼女という存在を彼は前々から知っているし、弱点や性格も含めた詳細を把握している。

なにせ相手は『別ゲームに登場するボスキャラ』だ。

アルターエゴ・メルトリリス

華奢で可憐で、触れれば手折れそうな見た目に反して、高圧的な性格と尊大な態度を崩さず、どうしようもないほど強い加虐体質を持った反比例でアンバランスな少女。

剣を丸ごとヒールにしたようなトゥーシューズを愛用し、一切の手を使わずして戦闘を繰り返す足技のバレエ。

唯一、手足の感覚が鈍く精密作業に向かない弱点があるが、ここでは役に立たない情報だろう。

しかしそれより重要なのは、なぜそんな彼女がここにいるのか。

運営が版權を取らずに実装した？

オマーージュとして勝手にデザインした？

今までの装備名やモンスターの一部の特徴からして、いわゆる型月ファンの開発者の暴走というのが一番あり得る話だが、それだけでは足りない違和感の強さにアーチャーは苛まれている。

単なるAIとは思えない流暢な受け答え、感情に富んだ声色。プレイヤーというには余りにもかけ離れた精神性。

そしてまるで以前から関わり合いがあるような親近感…。

「……いや。私は『俺』だ。運営の悪趣味に付き合っていていられるか！」
あくまで自分はロールプレイを楽しんでいるだけ。

無理やり納得し結論着けたアーチャーは、今度は弓を構えようと双剣をストレージに仕舞い込む。

そこを、その隙をメルトリリスは狙い澄ましていた。

「私、知ってるのよ。このゲームの中じゃ『スキル』が無ければ満足に武器の持ち替えも出来ないのでしょうか？ そんなに無防備でいられたら思わず突き刺してしまうわ」

瞬間移動めいた速さから放たれる音速の膝蹴り。

それは先端に仕込まれた鋭利な棘を凶器として、アーチャーの腹部へと真っ直ぐ迫る。

何とか回避を試みようとするが、「斬り払い」のクールタイムは完了しておらず、完全に虚を突かれた形で身体も追いつかない。

「臓腑を灼くセイレーン」

「爆炎！」

あわや直撃かという直前。

割り込むように飛び込んできた火球に邪魔されて、メルトリリスは技を中断。

「あらあらあら、リップみたいな子供の癩癩だと思っただけど随分と拗らせているようね。……過剰な愛情表現は淑女として慎みなさいな」

「君がそれを言うのか!?!」

メルトリリスの忠告に思わず突っ込むアーチャー。

その合いの手の如き軽妙さが、今度はミイの逆鱗に触れる。

思い出すのは第1回イベントで見せたメイプルという『他人』と仲良くしていたアーチャーの姿。

彼は悪くない。彼は素晴らしい人物で潔白なのだ。だから、そんな彼の価値も知らずに、無遠慮に近寄る卑しいアイツらが、全部悪い。全部憎い。

だから、私が、『悪い女』から守らないといけない!!

「炎槍」！「炎槍」！「炎帝」！

収束された焔のランスが、メルトリリスを貫かんとその身を掠める。

二連続の後に、今度は地面を迸る炎の範囲攻撃で眼前を火の海に変えて追撃。

そのどれもが避けられるが、頬を撫でる熱波に不快感を露わにするメルトリリス。

ファンでも無いオーディエンスの歓声なんて要らないのだけれど。聞かせるつもりが無い愚痴を零し、ミイを何処までも見下す。

「本当、暑苦しい。もっとクールになりなさいな」

「うるさい黙れ黙れ黙れ！ 【炎槍】！」

「ふう…。 ー。ー。ー 【クライムバレエ】」

並のプレイヤーならば一撃で焼き尽くすスキル。

それが回避も防御も行わないメルトリリスを『すり抜けた』。

その瞬間を目撃したアーチャーとミザリーは思わず叫ぶ。

「あれは…」

「そんな…。 確実に当たった筈です！ どうして!?!」

「……恐らく、当たり判定を消したのだろう」

「ツ!? それって……」

「ああ……間違いなく違法行為（チート）だな」

アーチャーは今度こそ確信した。

あの「クライムバレエ」は受けたダメージを防御力で0にするのでも無く、まして寸前で回避した訳でも無い。

ゲームのシステム側から働き掛けて、どんな攻撃に対しても自分だけを『除外』するチートスキル。

原作の能力そのままが再現されているのなら、『New World Online』という世界において彼女は文字通り『無敵の存在』として君臨してしまう。

(やはり彼女は記憶通りの性能。勝ち目など始めから……いや、本当にそうか?)

絶望の淵において、小さな引つ掛かりがアーチャーを引き留める。

(「……ならば、なぜ一度目の【炎槍】を避けた? ……それに彼女は今、わざわざ『スキル名を口にしていた』。)

諦め切れない気持ちから、仮定に次ぐ仮定を引き出し、確度を精査し、糸くずのように細い結論を出す。

原作と今プレイしているゲーム。もしもその両方が影響し合っているのなら。

(完全には能力を発揮出来ていない。更に言えばこちらのゲーム仕様に捕らわれて「スキル」として設定されているなら、確実に『あの隙』があるはず)

ミイとメルトリリスが互いに鎬を削る一幕にも満たない時間の中で、アーチャーは高速で思考を巡らせ、戦術を組み上げていく。

相手の戦力を計算し、こちらの手札、威力、特性。『周囲の環境』。利用出来る物は全て活用しろ。アレの規格外に真正面から付き合う必要は無い。勝利条件を満たすのに何が必要になる。

考えろ。考えろ……!

「アーチャーさん…」

心配するミザリー。

その様子に申し訳無さを感じながら、視線の先に見える大空洞への通路を見遣り、今までの道中を振り返って気が付く。

あの時、己はここをどのように説明されていたのか。

そうだ。このダンジョンならば、メルトリリスを打倒し得るピースが揃っている。

「……ミザリー嬢。すまないが頼みを聞いてくれるだろうか」

「え？」

パズルのように組み上がった戦術を実行する為、とある仕込みを依頼するアーチャー。これによりミザリーの戦闘介入は諦めざるを得ないが、この役目は彼女にしか頼まない。

「…本当にそれだけで良いんですか？ そのお話なら火力で押し通す戦法も」

「可能性に賭けるよりも、確実にアレを倒しておきたいのだ。……3分以内に頼む」

「…分かりました。ミイをお願いしますね」

「任されよう」

未練を無理やり背負い込んで貰い、ミザリーは来た道を引き返して行く。

その様子を見届けてから、ここからが本番だと気合を入れ直し、彼女に声を飛ばす。

「ミイ！ これからメルトリリスを仕留める。私の指示に従ってくれるか！」
「当然だ！ しかしMPポーションが残り少ないぞ」

激しい戦闘の合間にMPを回復しつつ、攻勢を緩めなかつたお陰で手持ちがかなり減っていると告げるミイ。口調から判断するに、調子は戻って来ているがメルトリリスの無敵化を突破出来ず、攻めあぐねているようだ。

もし団員達が存命なら、アイテムを掻き集めてもつと余裕を持たたかもしれないと一瞬思うアーチャーだが、頭に浮かべただけで排除する。

「構わん。それと彼女の攻撃に絶対に触れるな。オールドレイン：レベルを吸い取られるぞー！」

「それはトンデモない…なっ！ 【炎帝】！」

「ふうん、そっちもネタバレしてるのね。手頃なエサでもあれば、花を摘んでレベリングしておいたのに」

ただでさえチートを相手にしているのに、レベルドレインで基礎ステータスですら上回れたら完全に打つ手が無い。

トッププレイヤーであるミイならば、被弾のリスクは最低限まで抑えられて戦える。

ここから3分間。戦術を完成させる為、全身全霊を持った持久戦が始まる。

「先ずは30秒。【爆炎】で抑え付けてくれ」

「任された!」

「ちっ…煩わしいわね…!」

始めに確認しておこう。

このゲームの大前提として、弓使いは不遇であり更に更に弱体化している。

直近の修正により、例外の火力ソースであった【剣弾】の威力は十分の一未満に低下。通常の矢ではDEX依存の攻撃力しか発揮出来ないのも、STR型のアーチャーでは火力不足が否めない。

引き撃ちで時間を稼ぐのは愚策。

このままでは蹂躪される一方だろう。

だが、それでも彼は『剣を取り出し、番える』。

気の遠くなるような激戦の果て、アトラス院で得たスキルとユニークシリーズ。

その両方を駆使して放つ、絶剣の一矢が存在する故に。

「……………トレース・オン【投影】、開始」

一拍の後。

開いた掌に現れるのは螺旋を象った剣。

断ち切る刃よりも叩き折る剛剣として生まれた、アルスター伝承に名高い英雄フェルグスの愛剣。

「……………トレース・フラクタル【投影】、重装。【強化】【強化】【強化】【強化】……………全工程完了」

スキル名を宣言する毎に、剣は細く鋭く整形されていく。

もはや持ち手は存在せず、切っ先だけに転じて貫く事に特化した『剣矢』。

「我が骨子は捻れ狂う……」

圧縮された破壊力を示すように。もしくはその詠唱に従うように。

五段階強化された矢を覆う赤黒いオーラは奔流となつて暴れ狂い、暗い洞窟を不気味に明滅させて再び矢の元へ収束。

全力で弦を引き絞り、放つは破壊の螺旋。

——これ即ち。

「カラドボルグ・II
偽・螺旋剣！」

「!!」

メルトリリスを襲う暴虐の矢。

大型のモンスターであろうと容易く呑み込む攻撃範囲の一撃は、確実に彼女を捉えた。

余波で大空洞が鳴動し、パラパラと石粒が天井から落下する。

その威力に思わずミイが喜色を浮かべるが、砂埃から現れるシルエットに目を見開いた。

「…相変わらず、油断ならない相手ね。無銘」

それでも今まで通り、無傷で現れるメルトリリス。

その姿には微塵の損傷も見当たらず。落ちる砂粒を鬱陶しげに払う以外、異常は無い。

「……………」

その様子を観察するアーチャーは、今しがた放った一撃を思い返す。

【投影】

効果：

所持した事のある武具やアイテムの耐久度を10分の1にして、

3分間、複製品を生成する。

使用時に任意の詠唱が必要。

習得条件：

武器の耐久度を3000回以上にした。

【強化】

効果：

武具の効果を一定時間2倍に上昇。

ただし、使用後の性能が永続的に2分の1。

使用MPは対象の耐久度が低いほど低減される。

習得条件：

1回のボス戦で攻撃回数が10000回を超える。

そして【強化】のスキルは乗算による重ね掛けが可能。

五段階強化ならば、その威力は $2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \parallel 32$ 倍となる。

ただしここまで強化するとMP消費も跳ね上がり、マトモなキャラクタービルドでは使用すら覚束ない。

しかし【投影】によって発生するデメリット、耐久度が10分の1になる仕様が、逆にMP消費を低減する結果となり。

今のアーチャーでも最大5回まで耐えられるようになった。

この連携スキル一連を『重装^{フラクタル}』と名付け、剣弾から『剣矢』へと昇華させた威力は間違いなく、並のボスモンスター程度ならば絶死に値する。

それは無論、当たればの話であるが…。

「さて、いつの間にか駄肉が1人いないようだけれど、貴方もこのまま主演を置いて逃げ

てしまうのかしら?」

「いいや、ここで演目は中断だ。月の裏までお帰り願おう」

「あら、つれない。恥ずかしいなら個人的なカーテンコールも受け付けてるわよ?」

「貴様ア!!」

「落ち着きたまえミイ。……私が指示を出すまでこのまま【爆炎】で時間を稼いでくれ」

怒りのあまり、とうとうスキルも使わず炎を燻らせるようになったミイに若干引きながら、アーチャーは自前のMPポーションを消費して次弾に備える。

「――――」^{トレース・フラクタル}【投影】、重装。【強化】【強化】【強化】「させる訳ないでしょう!」

装填作業中の隙を突いて、ミイの攻撃から抜け出したメルトリリスはカラドボルグを蹴り砕く。

この連携スキルの弱点である『耐久度が低すぎて、矢以外使い道が無い』点を間髪入れず、突かれてしまう。

「随分脆いのね。そしてもう一発逆転の準備時間なんて与えないわよ!」

「チイツ!」

「無駄よ無駄無駄! 私に【クライムバレエ】による無敵化がある限り、貴方達に勝ち目なんて無いの!」

そこからはファイルムの焼き回しのように、繰り返した戦闘が続くのみだった。

ミイが爆炎を撃ち込み、何とか切り替えた双剣で前衛を担うアーチャー。それを軽々と避けては時折、無効化するメルトリリス。

彼の顔には苦虫を嘔み潰したような苦渋が見て取れて、先程の威勢のいい台詞は何処へやら、と大変機嫌を良くする。

この状況。勝ちの決まった退屈な時間にも思えたが、徐々に獲物を追い詰めていく静かな高揚感が、彼女の内なる加虐体質を刺激して無意識に膠着状態を継続していく。

特に何より長引かせている理由は。

「もつと頑張りなさいな。気を抜くと彼をそのまま持ち去ってしまうわよ」

「さつきから、やらせないと言っているー!」

「尊大な口ぶりのなのに、中身はまるで雛鳥ね。お家に帰って似た者同士、マトリョーシカと遊んだらどうかしら? それともイースターエッグ?」

「子供扱いするなあ!」

「ウフフフ、あらやだ化けの皮がもう剥がれてるわよ。ほらほら頑張つて? 役者を目

指すなら舞台を降りるまでが仕事じゃない」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すううう!!」

1人はオモチャ扱いされているが、改めて2人の相性は最悪だった。

戦う手段は。

灼熱を扱う炎使いのミイと、水を司り溶け混ざるメルトリリス。
愛する相手を。

自由にする代わりに他の全てを排除するミイと、自分と彼だけでいいと閉じ籠るメルトリリス。

零れ落ちような恋心。

内に秘めて解放の時を待つ二面性のミイと、激流を垂れ流す裏表なしのメルトリリス。

どこまでも反対で、対岸の鏡のような歪で逆しまな立ち位置。

自然とそれを自覚している2人はある意味で波長が合っており、舌戦めいた会話を、戦いの合間にも何度も挟む。

そして遂に、アーチャーが待ち望んだ報せが耳を打った。

「アーチャーさん！ 準備できましたわ！」

息を切らせたミザリーが再び横穴から顔を出し、大空洞に戻って滑り込む。

「…貴方、諦めて無かったの？」

「当然だろう。…逆に尋ねるが君の言う『正義の味方』とやらは、命乞いでもして逃げるのかね？」

「口が減らない男。人形にしたら、まずは口を縫い合わせましょうか」

「それは御免被る。ミイ、指示があるまで爆炎を待機だ！」

「分かった！」

「そういう密談は秘めて然るべきではないかしら」

呆れるメルトリリスを他所に、双剣を携えてアーチャーは切り掛かる。と、見せかけて。

「――【投擲】！」

「！」

普通に避けられる攻撃ならば、メルトリリスは虎の子である無効化スキルを温存して使用しない。

そこを狙ってアーチャーが飛ばすのは、陰陽を象る夫婦剣。

内包された【投擲】のスキルによって、威力が高まったそれはアーチャーの技量もあって、左右から挟み込むような軌跡で彼女を襲う。

その特殊な身体の構造上、メルトリリスは手足の感覚が鈍く、特に手を使った戦闘行為が出来ない。

故に今まで脚だけを頼りに技を駆使していたが、絶妙なタイミングで迫る双剣の対処は限られる。

避けるか、迎撃するか。…スキルの使用は以ての外。

ここでメルトリリスが選んだのはアーサー迎撃。

ここまで散々邪魔されたノックバック効果がある【爆炎】を警戒し、双剣をピルエツトの回転で二つ纏めて蹴り払う。

「そう。警戒せざるを得ないな、メルトリリス」

「！」

目の前に現れたのは、長剣を振り被るアーチャー。

ちやうど背面を向ける角度の彼女は、残った遠心力を殺さず更に回転。接触の瞬間、甲高い鋼鉄の悲鳴が上がる。

「ここに来て、また力押し。それでは余りにも芸が無いのではなくて？」

アーチャーが振るったのは【投影】無しのクラドボルグ。

干将・莫耶を投げ捨てた隙に装備した、彼にとつて唯一手持ち武器として使える武器だ。

だが、幾らユニークシリーズとはいえ、この武器だけでは状況を打破し得る性能を持ち合わせてはいない。

現に僅かでも拮抗が破られたならば、彼女は返す刃で首を跳ねる気満々で身構えている。

だからこそ、

「今だー！」

【爆炎】！」

メルトリリスをその場に固定して、無理やり【爆炎】を当てる。

向かう先は罠がある横穴の方向。

それが分かっても、この状態ならばきつと回避出来ないはず。

ミザリーは息も絶え絶えながら、自分達の勝利を確信し、

【クライムバレエ】

全ては無情。当然のように無敵化ですり抜けて、

ーだからこそ、アーチャーは長剣を手放した。

「は？」

突然の行為に、間拔けな声を晒すメルトリリス。

突き出されるのは、無手の右。

密着する距離で、彼女の胸に押し当てるように掌を開く。

「先程、落ちる砂を払ったな？ それはつまり「クライムバレエ」の効果時間が一瞬しか

無いという事

「…それで？ この状態からどう

するつもり。

そう告げるはずが、突然の衝撃で意識が刈り取られる。

「……フリーズ・アウト停止解凍。この質量、避けられまい！

「虚・イ千山斬り拓く翠の地平!!」

「ガッ…!!」

掌から怒涛の勢いで出現するのは極大サイズの大剣。アトラス院で手に入れたもう一振りのユニークシリーズ。

刀身の幅だけでも10mを優に超える果てなき刃渡りはメルトリリスに突き刺さり、その細い身体を横穴に向かって吹き飛ばす。

この武器は見た目に反して『張りぼて』であり、攻撃力は初心者の方剣にすら劣る。ノックバックの効果も無いが、それでも巨山の如き圧倒的な質量は健在であり、彼女を通路に向かって押し遣るほどに巨大である。

「舐め…るんじゃ、ないわよおおおお!!」

【王子を誘う魔のオデー

「この武器の特性は『破壊不可』でね。それは【投影】した後も変わらない」
「くっ、こんな子供騙し【宝具】さえ使え…：うっ、きやあああああ!!」

メルトリリスが向かう先は通路の奥。そこに何が待ち受けているのかという恐怖を、今更ながら自覚した彼女は必死に抵抗するが無意味だった。

「…さらばだ、メルトリリス。また会う機会があれば、愛らしい君とは剣ではなく言葉
を交えたいものだ」

「！」

この【投影】は『重装』より前、1度目のスキル発動時に、既に布石として用意しておいた一撃。

いつでも取り出せるよう、アイテムストレージに保存しておいた本当の切り札だ。

そして、即興で組み上げた戦術が導く先にある物とは――。

『破壊不可能オブジェクトのナメクジ』

「ひっ!？」

生理的嫌悪を催すのもそうだが、このナメクジはメイプルのような頭のおかしいプレイヤーに破壊されないよう運営が用意した『触れる物を無条件に消し去る』特殊な効果を持ったシステム側の存在である。

「いや、ちよつと…待ちなさいよ! 嘘でしょ、ねえ!」

それは即ち、メルトリリスと同格の存在であり、「クライムバレエ」のようなチートでも使用して相殺しなければ、防ぐ手段が無いという事でもある。

「こんな終わり方、あり得ないってば! 本当、無理無理無理い! 軟体生物とか絶つっ対に無理なのよおおお!!」

スキルのクールタイムで無抵抗になるしかない彼女は、避けられない衝突による己の

敗北より、精神的トラウマに直面していた。

「いやあああああああああああ
!?!?!?!」

遠くで聞こえるメルトリリスの絶叫と、ぶちゆりという不快な擬音を合図に勝利を確信し、地面にへたり込むアーチャー。

それは最後まで戦い続けたミィヤ、ナメクジを誘導して疲労困憊のミザリーも同様だった。

全員が指し示したかのように座り込み、誰も声を掛ける余裕すら無い。荒々しい息を吐いて天を仰ぐ。

その視線の先には出口である穴から、いつの間にか月の光が差し込み、長い時間の経過を教えてくれた。

「何とか…勝ったな」

そう呟いて、いつもの癖で瞼を閉じる。

思い返せばおかしな話で、やたら再現度の高いメルトリリスだったが、コアなファン
の開発者による冗談で実装した賑やかなのモンスターだったに違いない。

普通に考えて、あんなトンデモ話のキャラクターが実在するはずないのだ。

ロールプレイにハマり過ぎて、良くない傾向かも知れないな。

最後に余計なキザ台詞を吐いてしまったし、自己嫌悪が凄い。

：暫くはリハビリがてら、ゲームから離れてみるのも選択肢だろう。

そう思つて瞼を開け、同じように座り込む2人に声を掛けようと姿勢を変える。

そして目の前に現れたのは。

聖杯と銀のメダル20枚。加えて：

【スキル：女難の相・EX を獲得しました】

効果：

率直に言つて女の敵では？

獲得条件：

正式に実装しておきました??

【メルトリリスの卵 を獲得しました】

効果：

温めなくても孵化する。

獲得条件：

あ、このアイテムは呪われているので捨てられませーん☒

アーチャーは金色の粒子になって消えそうになった。

掲示板民とヤンデレの交友関係調査

17：@名無しの雑談使い

ギルド実装来たな

18：@名無しの雑談使い

どこに所属する？ 私も同行しよう

19：@名無しの雑談使い

ペ院！

20：@名無しの雑談使い

お前は集われる側なんだよなあ：

21：@名無しの雑談使い

強いところ入りたいけど審査とかあるのかな？

22 : @名無しの雑談使い

俺は無言OKしか入れんわ

23 : @名無しの雑談使い

V R M M Oでそれは草

24 : @名無しの雑談使い

完全に不審者やんけ

25 : @名無しの雑談使い

らいんうおーずオススメよ。課金要求してくるけど

26 : @名無しの雑談使い

期間限定が強そう

27 : @名無しの雑談使い

ペイン率いる『集う聖剣』は廃人の集まり。炎帝ノ国は信者の集まりだから怖い

28 : @名無しの雑談使い

流石トツプは頭おかしいな

29 : @名無しの雑談使い

一番おかしいのはメイプルちゃんだけどな

30 : @名無しの雑談使い

それな

31 : @名無しの雑談使い

わかりみ

32 : @名無しの雑談使い

この前なんて緑の物体に乗って空飛んで毒の雨を降らせてたからな

33 : @名無しの雑談使い

待って脳の処理が追いつかない

34 : @名無しの雑談使い

たつた一回のイベントで要塞から浮遊要塞にクラスチェンジ！

35 : @名無しの雑談使い

メイプルちゃんはトランスフォーマーだった…？

36 : @名無しの雑談使い

モンスターかと思って狙撃したけど届かんかったわ

37 : @名無しの雑談使い

当たったところで…

38 : @名無しの雑談使い

(メイプルだから) 効かねえ！

39 : @名無しの雑談使い

理不尽の塊だけど可愛いから許す

40 : @名無しの雑談使い

私も許そう

41 : @名無しの雑談使い

だが運営が許すかな！

42 : @名無しの雑談使い

マトモに修正も出来ない運営サイドに問題がある

43 : @名無しの雑談使い

修正といえば第2回イベントの4日目辺りからバグ多い

44 : @名無しの雑談使い

モンスターへの攻撃が物理的な意味で痛いわ、アブソーバ機能生きてる？

45 : @名無しの雑談使い

流石にそこは弄れんやろ

46 : @名無しの雑談使い

はいじゃあこの世界はゲームであつても現実にしていきまーす

47 : @名無しの雑談使い

マッチポンプ団長は帰れ

48 : @名無しの雑談使い

次のアプデの容量ヤバいから期待して震えてろ

49 : @名無しの雑談使い

その意気込みは認めるが、どんだけやり直すんだ

50 : @名無しの雑談使い

容量が丸々NWO一個分だからな。もう一個裏側に世界でも作るんか？

51 : @名無しの雑談使い

まあ期待つて事で、ちよつと相談があるんだけど

52 : @名無しの雑談使い

お？

53 : @名無しの雑談使い

ほう

54 : @名無しの雑談使い

スレ立てもせずにいい度胸だな。なんでも答えてやるよ

55 : @名無しの雑談使い

ツンデレかな？

56 : @名無しの雑談使い

優しい

57 : @名無しの雑談使い

ありがと。で相談んだけどアーチャーってプレイヤーの消息を知りたいんだけど

58 : @名無しの雑談使い

闇討ちスレは別板ですよ

59 : @名無しの雑談使い

違うわ！ てかさんなのあるんだ

60 : @名無しの雑談使い

まあメイプルとコンビ組んでリア充アピしたしな

61 : @名無しの雑談使い

貴公の首は柱に吊るされるのがお似合いだ！

62：@名無しの雑談使い

ふつうにフレンドだから連絡取りたいだけだっつてば

63：@名無しの雑談使い

チャットすればいいじゃん

64：@名無しの雑談使い

いや不具合で繋がらないし、なんで目撃情報求む！

65：@名無しの雑談使い

そんなのあつたつけ？

66：@名無しの雑談使い

あー俺も一回なつたな。第2回イベの時

67 : @名無しの雑談使い
そうそう

68 : @名無しの雑談使い
ほん、なら知ってる奴答えてあげんしやい

69 : @名無しの雑談使い
老害おばあちゃんからの無茶振り

70 : @名無しの雑談使い
だいぶ前に100以上の鍋の周りで踊り狂ってた記憶しかない

71 : @名無しの雑談使い
草

72 : @名無しの雑談使い
メイプルちゃん(男)

73 : @名無しの雑談使い
萌えの一欠片もねえな :

74 : @名無しの雑談使い
イベントでザマアと思つたシーンならある

75 : @名無しの雑談使い
興味ありますねえ !

76 : @名無しの雑談使い
些細な情報から見つかる真実もある。話したまえ

77 : @名無しの雑談使い
ウツキウキやん

78 : @名無しの雑談使い

6日目の夜

悪夢に追いかけられる弓兵
女の子お持ち帰り

79 : @名無しの雑談使い
待つて

80 : @名無しの雑談使い
3行目k w s k

81 : @名無しの雑談使い
ザマアとはいったい…うごごご

82 : @名無しの雑談使い
また女が増えたのか…

83 : @名無しの雑談使い

は？

84：@名無しの雑談使い

物凄い速さで『6日目の悪夢』が弓兵狙ってて、全部避けるアイツもやばいなと思っ
た見てたら紫髪の女の子をお姫様だっこしてた。んで俺も「は？」と思ったら急にその
女の子から顔面蹴り喰らった拍子に悪夢のバックスタブが刺さって死んだ

85：@名無しの雑談使い

wwww

86：@名無しの雑談使い

大草原ですわこれは

87：@名無しの雑談使い

リタイアしたんかいw

88：@名無しの雑談使い

これはたしかにザマア

89 : @名無しの雑談使い

女の敵は殲滅する！

90 : @名無しの雑談使い

これにはヴェイガン絶対殺すお爺ちゃんも大満足

91 : @名無しの雑談使い

メイプルちゃんの時と同じやんけ

92 : @名無しの雑談使い

こいついつも女で苦労してんな

93 : @名無しの雑談使い

無冠の帝王

94 : @名無しの雑談使い

ええ :

95 : @名無しの雑談使い

じゃあそのトラウマでプレイしてない可能性あるな

96 : @名無しの雑談使い

やっぱ女って野蛮だわ

97 : @名無しの雑談使い

今北

弓兵なら昨日見たぞ

98 : @名無しの雑談使い

お

99 : @名無しの雑談使い

これは有能

100 : @名無しの雑談使い

第一層で双子の子供引っ掛けてた

101 : @名無しの雑談使い

ええ…

102 : @名無しの雑談使い

は？

103 : @名無しの雑談使い

好意的に見れば初心者にアドバイスしてただけなんだけど、犯罪臭がすごかった

104 : @名無しの雑談使い

つまり第一層でなんかしてんのか

105：@名無しの雑談使い

ああいや第三回イベントの素材集めするとか言ってたから今はたぶんそっち

106：@名無しの雑談使い

素材：羊毛集めか。あれだるいんだよな

107：@名無しの雑談使い

毛刈りスキル取るのもなあ

108：@名無しの雑談使い

大規模ギルド入れれば楽できるイベント

109：@名無しの雑談使い

ただし漬物てめえは駄目だ

110：@名無しの雑談使い

まじかー、心配して損したんだけど。あー何かムカつくわ相談ありがとう落ちるね

111 : @名無しの雑談使い

質問ネキブチ切れで笑う

112 : @名無しの雑談使い

ネキ…? 女?

113 : @名無しの雑談使い

いや普通にそうやろ

114 : @名無しの雑談使い

ホモじゃねえのかよ騙された!

115 : @名無しの雑談使い

弓兵の女関係どうなってるんだ

116 : @名無しの雑談使い

野生のドンファン

117：@名無しの雑談使い

ネットだから許されるガバガバな女性問題

118：@名無しの雑談使い

リアルだったら刺し殺されてもおかしくない

119：@名無しの雑談使い

奴さんもう死んだよ

120：@名無しの雑談使い

現実に言い寄られたらどうなるんだろな教えてエロい人！

121：@名無しの雑談使い

普通に振られて終わり

122 : @名無しの雑談使い

夢も希望もねえ

123 : @名無しの雑談使い

じゃあ普通じゃなかったら？

124 : @お忍び中の△ランサー

そんなの檻に閉じ込めて尋問なり拷問なりして自分だけを見つめるまで離さないわ

125 : @名無しの雑談使い

ヒエツ…

126 : @お忍び中の△ランサー

言い寄られるのは不可抗力かもだけど、断らないのはギルティ。ナッシングよ。

少なくとも身体に教え込まないと発情したコウノトリみたいに再発するかもしれないわいし。

127 : @名無しの雑談使い
待って待って

128 : @お忍び中の△ランサー
打撲より切り傷が良いわね。跡が消えやすいから何度も刺さるわ

129 : @名無しの雑談使い
怖い怖い怖い!!

130 : @名無しの雑談使い
なんでヤンデレが紛れ込んでるんですかね…

131 : @名無しの雑談使い
文字から漂うガチ臭がヤバい

132 : @お忍び中の△ランサー
別に、これくらい普通よ

133 : @名無しの雑談使い

うっそだろお前!?

134 : @名無しの雑談使い

自分の事を一般人だと思い込んでいるヤンデレ

135 : @名無しの雑談使い

あの。もしかして実行とか…されたんですか？

136 : @名無しの雑談使い

(震え声)

137 : @名無しの雑談使い

ねえ

138 : @名無しの雑談使い

おい

139 : @名無しの雑談使い
答えてくれええええ!!

140 : @名無しの雑談使い
フフフ : 怖い

141 : @名無しの雑談使い
この流れだと弓兵の女関係がヤンデレになるんですがそれは

142 : @名無しの雑談使い
まさかそんな

143 : @名無しの雑談使い
そんなヲノベみたいないな関係にはならんやろw

144 : @名無しの雑談使い

もし弓兵のリアル側にヤンデレが居たら、鼻から餡子入りパスタライス食べて、逆立ちした上「びつくりするほどカーニバル」って叫びながらミザリーさんに告白するわ

「うわあ…そんなに疲れてどうしたのよ」

「お兄ちゃんも体育で怪我したの？」

学校の昼休み。

学友達からは幼馴染ズと噂される3人が、当然のように机を囲んで昼食を取っている。

広げられたランチヨンマットの上には、彼お手製の、ほんのり温かなき卵スープや、ワカメや大根菜を混ぜたご飯、メインにタラのビール揚げ、蓮根やニンジンをやや甘めに煮付けた副菜もランチジャーで保温されたおかげで出来立ての香りをまだ残していた。

普通ならここで彼から料理や食材に関して、ウンチク話を始めるのが定番のはず。

しかし、今日の彼は食事の用意だけ終えると、片手を額に当てて俯きながら箸を動かすだけで食も進んでいない。

「何かあったの？ 相談に乗れる事なら話してみてよ」

理沙は本当に心配そうに眉をひそめて、顔色を確認する為に少し近づく。

「どこか痛いのが？ 痛いのは嫌だもんね」

楓は共感の声を上げて、痛む箇所を探すように少し近づく。

ジリジリ…ジリジリ…と、何かと理由を付けて交互に移動を繰り返した結果。あつという間に両サイドから詰め寄せられ、板挟みになった彼は観念したように大きく溜息を吐いてから悩みを語り出した。

余談だが、この様子を見慣れてしまったクラスメイト達からは。

「いつ見てもアレで逃げ出さない胆力がヤバイ」

「ライクよりラブよりエンヴィーな感情」

「リアルでミザリーさんに会ってえなあ…」

と、概ね放置されている。

たまに不純異性交遊では？ と通報される事もあるが、数日経つとその人物が転校してしまうので学校側から注意された事は無い。

そして彼が語り始めた内容に、2人は一言一句聞き漏らさないよう耳を傾ける。そこで判明したのは。

最近、放置すると他プレイヤーに迷惑が掛かるレベルの問題児に付き纏われている。

しかも行動を起こす毎に嫌味や注文が入るのでやり難い。

けれど、言う事はマトモな一面もあるのでそのまま無碍にするのは気が引ける。

無視すると態度が一変して悲しそうな顔を浮かべるのは卑怯。

そしてその問題児は子供みたいな性格だから怒るに怒れない。と概ね原因の一端が青年側にもあるとジト目になる理沙だが、一旦は置いておく。

「ふむふむ……。つまりゲーム名は伏せるけど粘着行為をされて困っていると言う事ね」

「サリー……じゃなかった理沙、粘着って？」

「あー、いわゆる付き纏い行為っていうか。相手の同意も無く、四六時中一緒に行動して迷惑を掛ける嫌がらせよ」

「なにそれ酷い！ プライバシーの侵害って奴だね！」

「ええ本当。不必要に近づくななんて破廉恥よね」

「本当だよ。お兄ちゃんにもプライベートがあるのに」

青年が真顔で「お前ら何を言っているんだ」とばかりに黙るが、ここで突っ込んだらBADEND直行なので押し黙る。

「それで…そのゲーム自体は止めないのよね」
肯定の返事。

「だったら運営の人に通報とかするの？」

答えは曖昧だが、効果が無かったと答える。

「うーん、難題よね………あつ、そうだ！ 私に妙案があるんだけど」

本当に困っていた青年は、理沙の明るい口ぶりに希望を見出し向き合う。

「……その女。私が排除するから安心して」

震える声で、一度も相手が女性とは言っていない。と返すが理沙の中では相手が確定しているらしく、聞く耳も持たずに「やっぱりアイツが誑かしたんだ…あの時仕留めれば良かった」など不穏な小声を連呼している。

ゴクリと喉を鳴らす青年の横で、楓は真面目に方法を考えようと、うんうん唸って頭を揺らす。

あまりにも考える事に夢中になっていているせいか、椅子まで左右に振られてどんどんバ

ランスが崩れても気付かず、彼が注意するよりも早くガラリと倒れ込もうとする。

「うわわわっ！ にやぶう！」

が、そんな突拍子も無い行動に物心付いた時から慣れている青年は、抱き寄せるように楓を腕の中に収めて転倒の勢いを受け止める。

突然のハグに目を白黒させる楓だったが、直ぐに彼の腕の中だと知るとコアラのように巻き付いて離さない。

側から見れば恋人に甘える仲睦まじい光景だが、実のところ2人の距離感は近すぎて色恋に閃いてまったくの無頓着だったりする。

産まれた病院も同じなら、ベッドも隣。家も近所で同じ幼稚園に通っていたとなれば自然と2人は兄弟のように育つ。

彼が鬼ごっこをしようとするれば、後ろからチヨコチヨコと付いて回り。楓がおままごとの相手を求めれば、彼が人形やオモチャを持って遊びに来る。

痛みに弱い楓は毎年の予防接種やふとした怪我で泣いてしまう事が多く、その面倒を見るうちに彼が『兄』。楓が『妹』と根付いて、それが常識になった。

特に彼には、怠惰な性格でネット弁慶極まるほっちゃり系の妹がいたのも兄役の一因となっている。

小学校の頃はその関係を茶化される事も多かったが、後の親友となる理沙や、元々落

ち着いた性格もあつて関係は良好のまま続いた。

もしも男女のデートを提案されても、双方困惑するばかりで話が進まないだろう。

確かにニコニコと笑いながら過激な一面を見せたり、無意識に嘘を付いたりと暴走する場合もあるが、基本的に楓の彼への感情は『親愛』。それが一番大きな比率を占めているので恋敵のような存在が現れてもピンとこないのだ。

無論、恋慕の感情が無い訳ではない。ただそれらが無意識下に追いやられて表に出てこないだけで、人並みの欲求は持ち合わせている。

ただし、彼に対する感情の量は、常人が思い描く容量を遥かに上回るのでもし何かしらの理由で決壊した場合、潜在的な脅威度は最も高いのも追記しておこう。

大好きなお兄ちゃん。

隣にるのが当たり前の存在は、いつだって楓の味方をしてくれる。

彼女は子供の頃からの『常識』を未だ更新出来ずにいた。

「……で、何してんのアンタ達」

楓の反対側。

理沙が陣取っていた側の腕から伝わる、痛烈な刺激に青年は悲鳴を上げた。「なに……いちやついてるの？　ねえ、私を除け者にしてなんで楽しそうなの」

関節の筋に逆らうように、逆方向へ曲げようとする理沙。

その瞳に映るダークグレーの色彩は輝度0で、深淵の虚空を思わせた。

「あつれ〜理沙つてば、羨ましいのお？」

楓の軽いジョークも通じない理沙は、無言で腕を曲げていく。

青年は抜け出そうともがくが、反対側は呑気に煽る幼馴染にロックされて動けない。

そして楓は無意識下の嫉妬を発動して、彼を離そうとしない。

それを眺めるクラスメイト達は、その後を訪れるであろう惨事が小さくなるよう祈るのだった。

——そつちに腕は曲がりませんよ。

『おおい、どうなってんだこの次回仕様。アプデってレベルじゃないぞ』

『上からの指示だよ！ 現状の環境はそのままにワールドを拡張するつてさ！』

『無茶振りだなく。ただでさえメイプル対策で仕様の見直しやらチェック項目が増えてるのにな』

『最近なぜかバグが頻発してるし、バイト増やしてデバッグ要員増やしてもらつてよ』

『無理に決まつてんだろ。このゲーム俺らの拘りと悪意と頑張りで作った一品物だぞ？』

下手に触ったら芋づる式で不具合間違いなし』

『銀翼なんて完全に担当の趣味だもんなく。しかも直前にメイプル対策までしてたし』

『まあ、やられちゃったんですけどね』

『それは言わないでよ新人ちゃん！』

『趣味って言ったらアイツの大空洞に配置したボスもヤバかったな。あれに勝つ弓兵も充分警戒対象だけど…』

『あれか…。確かに気合入って本物かと思つたぜ！』

『だね。まるで生きてるみたいな大きなペンギンだったね』

『アイテムドロップ無しとはいえ、メダル20枚はやり過ぎだけだな』

『そういえばあれ、リヴァイアサンって言うらしいですよ。うふふ』

『アイツの趣味は分からんな…。さっさと体調を戻して欲しいところだが…新人ちゃん
は友達なんだよね。どう、彼女?』

『えーと、うん。…生きてはいるので大丈夫かとー♪』

『そつかく。まあ空いた穴はメチャ優秀な新人ちゃんか埋めてくれるからね。ゆっ
くり直すように言つといてね』

『はーい!』

『よし、お前ら。アプデ前に控えた第3回、第4回を円滑に終える為にも…今日から残業
だ!』

『ういゝす』

『りよ』

『またデスマーチかあ…これだけ苦労してもネットじゃ叩かれるんだろうなあ…』

『泣くな! 週末にはチーフが焼肉に連れてってくれるぞ!』

『まじか』

『おう。何か急に株関連がうまくいってな。金だけならある』

『おう、そういやコツチも副職の依頼が増えてラッキーだ』

『あれ、お前らも? 趣味のネット宝くじがコンスタントに当たって資金に余裕出てき

てるわ』

『…なんか真面目に働いたら負けな気がする』

『それもまた、人間さんの業だから仕方ないですねー』

『なるほど…って脱線し過ぎた！ やるぞ！』

『はあーい☒』

炎帝ノ国とヤンデレの傷害致死事件

【小聖杯】

効果：

ゲーム内の1日1回のみ使用可能。

使用時に5分間だけMPが∞。

一定回数使用後にスキル【反転化】を強制習得。

「厄ネタにすぎるな……これはストレージに封印しておこう……」

時は遡り、大空洞での戦闘終了後。

報酬の分配時に確認したところ、この黄金の輝きを放つ聖杯と、クリスタルの見た目をした卵をミイとミザリーは認識出来ず、嫌な予感がしつつもアーチャーが入手する他なかった。

代わりと言ってはなんだが、彼は銀のメダル20枚全てを炎帝ノ国に譲ってその場を後にしている。

…正確に話すなら、手持ちすら含めて全部渡そうとしてくるミイの気遣いというか

重さに引いて、逃げるように脱出したのが真実である。

そしてそれは心底正解だったと回想するアーチャー。

「……快樂のアルターエゴ・メルトリリス。心底イヤだけど貴方と契約してあげる。光栄に思いなさい？」

あの後、メダル集めを再開する暇もなく、早々に卵から孵った『自称ペット』様は見た目も性格も全く同じどころか、先程戦った本人そのものであり、口上を述べた後はナメクジに叩きつけられた事をそれはもうご立腹で問い詰めてきた。

あわや再度の激戦かと思いきや、彼女からアーチャーへの攻撃は全て無効化されているようで、どれだけ刺されても斬られてもHPに一切減少は見られない。どうやら本当にペットとしてゲームに認識されているらしいと一息をつく。

彼女曰く、今の自分は完全に本体から切り離されたスタンドアロンの状態で、能力低下が著しく「クライムバレー」を始めとしたチートスキルも使用不能だという。

：まさか本当に現実世界にアレが存在していると思えないアーチャーは、そういう設定なんだと思いつまむ事にした。

そして予想もなかったのは、全3回まで強制命令が可能となるスキル【令呪】が、いつのまにか習得済みになっており、左手の甲に文様が刻まれていた件だ。

無論、生粋の女王様気質である彼女に、まさしくサーヴァントになれという状況を素

直に受け入れているはずもなく、どちらが主従か明確に決めるまで動かないと主張され、時間ばかりが過ぎ去っていく。

しかし、ふとしたきっかけでペットの契約アイテムが『絆の架け橋』という指輪のアクセサリーだと判明すると、途端に上機嫌になってアーチャーに嵌めさせる。

無論、本来それはプレイヤー側の装備であり、間違つても左手の薬指にはめる物でも無いのだが、先程までの剣幕は何処へやら、月明かりに照らしては何度も確認してうつとりする姿に文句を告げる気もなくなつて苦笑してしまふ。

どうにもアーチャーには人が嬉しそうにしているとそこで満足して許してしまう悪癖があり、今回もそれが如実に現れる形となつた。

それを偶然：偶然？ 見咎めたのは通称『6日目の悪夢』として名を馳せる事になるサリー。

この時のアーチャーはフレデリカとの夕食時に変装アクセサリーを外して食事をして以来、怒涛の展開で再装備するのを忘れてしまい、素顔を晒していたのだ。

肌や髪の色を変えてはいるがバレない保証はどこにも無く、咄嗟に板についてきたロールプレイで他人のフリを決め込むが、メイプル並みの嗅覚が無いにも関わらず、彼女は最初から疑つて掛かり質問攻めに合わそうとしていた。

しかも彼女の肩に乗る狐のペットが「この女の敵め」みたいな強い視線を浴びせて圧

が強い。

焦るアーチャーと、問い詰めるサリー。

そこで面白くないのは当然、置いてけぼりにされた彼のペット様であるメルトリリスだ。

本質が人間嫌いかつ、またもや現れた恋敵と思わしき相手に彼女が容赦する筈もなく、長い袖の下に隠されている指輪をワザワザ見せびらかしながら煽りに煽った。

それに反応したブチ切れサリーはアーチャーが青年と同一人物だと確かめもせず、交戦状態に突入。

もう勘弁してくれと思いつつも、戦闘能力が未知数のメルトリリスを戦わせるのは危険と判断。彼女を抱えて逃げる事に。

毎度お世話になっているスキル「仕切り直し」の効果でスタートダッシュを決めるアーチャー。しかし脚のヒールを避ける為にお姫様だっこをしたのが運の尽きだった。

「なに、してるのよおおお！【超加速】!!」

鬼気迫る顔で追い縋るサリーに何処までも追跡され、息をつく暇もない。

更に腕の中にいるメルトリリスからは、状況も考えずにサリーとの関係を尋問されるという二重苦に晒されて3時間が経過。性も根も尽き果てて、遂に全てをゲロってしまふアーチャー。

「そうね、そうだわそうだったわ。どこまでいってもドン・ファンだったわ、ねー」

と、ダメージは入らないが棘付きの膝蹴りを顔面にお見舞いしバランスを崩した所へ、一切の動揺も見せず超反応したサリーは短剣二本による刺殺を躊躇なく実行した。

一気に減少するHPゲージ。耐久値が低い彼に抗う術は見当たらず、0になるまでの短い時間で何とか振り返る。その時、視界の端で見せたサリーの表情は。

衝動的とはいえ愛する者を自ら葬った過ちに悲観し、信じられないように両の手を震えさせる。

しかしそれでも、己の手で散ったという事実、『歡喜』を隠せず、蕩けそうに歪む頬を必死に抑えても三日月の笑みは消えない。

ゲームの中だからこそ知ってしまった禁断の味。

長く、長く熟成された芳醇な香りは、いとも容易く理性のコルクを抜き去って赤い美酒を彼女に届ける。

それは原初の娯楽にして、罪深き禁忌の感情。

———愉悦だった。

その吐息が届く前にデジタルエフェクトになって消え去るアーチャー。

つまり彼はサリーによるPK（プレイヤーキル）で文字通り死亡。

第2回イベントはリタイアという結果に終わった。

こうした多大な苦勞の割に第一回、第2回共にイベントの公式記録が0のアーチャーは肩を落とすばかり。

次こそはと意気込むものの、告知された第3回イベントは『ギルド対抗戦』。自ら団体を立ち上げるか、加入しなければ参加すら出来ない。

学校での相談も無駄に終わって、しかも手首を痛めた彼は気を取り直すと、第2層にある石の街で掲示板のギルドメンバー募集の張り紙を探していた。

「ねえ『アナタ』。鶏みたいな頭に何度も確認するけれど、私達のギルドホームはダンスホールか、劇場が備え付けてあるところ一択よ。そして何より大事なのは、他の団員なんていないの」

「…それは無理だと言っているだろう」

当然のように密着する近距離で肩を並べるメルトリリス。

「あら不甲斐ない。そこは自分に全部任せると男の器量を見せる所ではなくて？」

「生憎と不相応な見栄を張って後悔したくないのでね…」

ギルドホームと呼ばれる建物には維持費と呼ばれる資金の投入が不可欠。その金額は大きさに応じた相応の金額であり、先の希望を叶える場合、アーチャー一人ではとても賄い切れない。

メルトリリスの中では家Ⅱ愛の巣という図式が成り立っているらしく、なかなか意見を引かずに食い付いてくる。

傍目に見れば新居を選ぶ新婚夫婦にも見える光景。

そしてその様子をネットの掲示板に書き込む誰かのプレイヤー。今日も彼のヘイトは高まり、アンチスレが賑わう事だろう。

「なら、『アナタ』の為なら何でもする熱狂的ファンとかいないの？ …ああ待って、居ても困るからこの話は無しよ。どうせ女だろうし」

「勝手に期待して、勝手に失望しないでくれ…。それとさつきからアナタの発音がおかしくないかね？ まるで夫婦の…」

「…でもそうね。我ながら良い案かもしれないわ」

「なに？」

まさかの提案に驚く。

「この前の炎帝とか言う赤い女の所なら所属してもいいわよ。そこなら何とかギリギリ

り、ええ薄氷一枚分の僅差で我慢してあげる」

「どういう風の吹き回しだ？　確かに炎帝ノ国のギルドホームは劇場がモチーフらしいが……」

その情報はイベント以降、伝令として現れた団員Bから直接伝えられたものだった。

基本的にネット検索や掲示板を利用せず、VRMMOも今回が始めてのアーチャーは情報に疎く、最近までチャット機能にすら気づいていなかった。

故に教えられた時は履歴に残る『ミイ999+』に驚き、その内容のほとんどが「会いたい」「今どこ」「連絡して」「私のこと嫌い？」で占められる事態に2度めの驚きを隠せなかった裏話がある。

そしていざ活用しようとしても、最近のバグの影響でチャット機能が使用不能になっているらしく。それならばとミイは世間話程度の話題を持たせて走らせたらしい。

…つまり完全に雑用なのだが、大空洞であれだけの目にあってもミイに忠誠を誓う団員Bの目は純真なままで、アーチャーにはあまりにも眩しく映った。

「炎帝ノ国のギルドホームの名前はたしか……」

「アエストゥスドムスアウレア招き蕩う黄金劇場。…そこなら色々都合なのよ」

「？　まあ元々顔見せくらいはと思っていたからな。訪ねてみるか。…喧嘩はするなよ？」

一瞬見せたメルトリリスの真剣な表情に後髪を引かれるが、2人は並んで目的地を指すのだった。

「ああ遅かったじゃないか！ この席が君の居場所だよ、副団長として存分に寛いでくれ。――大丈夫、炎帝ノ国全ての力を持って、君を「悪い女」から守ってあげるからね」

尋ねるや否や、その名を表すが如く豪華絢爛な装飾に彩られた黄金劇場の奥へ連れて来られた2人。

支配人室を横した内装は派手な劇場とは裏腹に、メリハリのついたシックな色合いで落ち着いた雰囲気を漂わせている。

そこで待ち受けていたのは団長であるミイの他に、彼女のストッパー兼お目付役として在籍する事にしたミザリーと、アーチャーにとつて初見となる2人の男性だった。

ともすれば挨拶が先だろうと、そちらに向き合おうとした所で邪魔が入る。

「あら、悪い女なら私の目の前にもいるけれど。これつてもしかしてこのギルドを献上

するって遠回しのスポンサー発言なのかしら」

「おや？ クルクル回るしか能がない羽虫の音がうるさいな」

「は？」

「は？」

「—————」

「ねえミザリー。この赤い弓兵、僕以上に目が死んでるんだけど大丈夫？」

「えっと…それもそうなのだけど。アーチャーさん、あの子って大空洞のボスですよね？」

「あつはつはつ！ 噂の『弓兵』に元『ボス』かあ！…これまた濃いメンツが入ったな！」

予想通り、火花を散らすミイとメルトリリス。

ミザリーの疑問は当然なのだが、正確に答えられる訳でもなく適当に自分同様、元ネタゲームのロールプレイをしているとお茶を濁す。

言い争いは激化しているが、それでもメルトリリスは交渉に来た目的を忘れていないようで口論の間に、様々な要求や対価を持ち出している。

万が一の仲裁をミザリーに任せると、アーチャーは初対面の2人と話を進める事にした。

「…すまないが、このギルドに入るとは発言していないし、副団長という肩書きすら初耳

だぞ」

「あれ、そうなの？」

「ウチの炎帝様は毎日1回は必ず弓兵は幹部にするって言ってたからなー。てつきり同意して来たと思ってたが、まあ気にすんなよ！」

「気にするに決まってるだろう…。それと名前を教えて貰って良いかね？」

アーチャーの発言にミイとメルトリリスの雰囲気当てられて自己紹介すらしていなかったのを思い出した男性陣の中で、まずは小柄な方の少年が声を出した。

「ああごめんね。僕の名前はマルクス。設置魔法ぐらいしか取り柄が無い魔法使いだよ」

モノクロのフードとマスクで素顔を隠した彼は聞けば第1回イベントで10位以内に入った猛者らしく、謙遜しているが『トラッパー』という二つ名で知られる腕利きらしい。

「次は俺、『崩剣』のシンだ！ よろしくな副団長！」

悪戯好きな笑いを浮かべるのは見るからに快活なイメージを持つ青年。彼も10位内の実力者で専用武器とそれに対応したスキル持ちでかなりの手練れだと紹介された。

「副団長は御免被るが…私はアーチャー。ただの弓使いだ。お手柔らかに頼む」

久しぶりの男同士の会話もあって話が弾む3人。

ややダウンナーな所があるマルクスもアーチャーのフォローでうまく溶け込んでいる。

「へえ、鍛冶のスキルも取ってんだな」

「本職には劣るが、保全や修理程度ならば任せたまえ。中でも剣には拘りがあつてね勉強させてもらう」

「見た事も聞いた事も無いスキルも沢山あるね…。僕だったら習得条件が厳しくて取れる気がしないけど…」

「そう言われて第2回イベントも含めて今まで習得したレアらしきスキルを思い返すアーチャー。」

【真祖殺し】

効果：

ボスモンスターに対して与ダメージが5%UP。

習得条件：

特定の条件を持つボスモンスターを単独で撃破する。

【アラヤ】

効果：

戦闘状態に移行した場合、時間経過で全ステータスが少しずつ上昇。

(最大値+?)

パーティメンバーが多いほど上昇までの時間が短縮される。

習得条件：

正義の味方・守護者・鉄心を習得する。

【心眼・真】

効果：

斬り払い、受け流し等防御系スキルのクールタイムを短縮する。

習得条件：

スキル使用無しで攻撃を軽減した回数が規定値を超える。

【鷹の目】

効果：

一定時間、目標物へのマーキング及び命中率に+補正。

習得条件：

スキル無しで隠しアイテムを規定数、発見する。

「言うほど難しくねえんじゃねえの？ てか俺ちよつと【心眼・真】取ってくるわ！」

「え。ちよつとシン!?!」

「何というか…彼も濃いな」

「一応、言っておくけど僕は普通だからね…」

自らの情報がある程度隠して公開したアーチャーの言葉を聞くや否や、支配人室から飛び出していくシンとそれを見送る男2人。

マルクスはシンの様子から伝達事項を思い出したようで、最近の炎帝ノ国における方針を話し始めた。

ミイの指示はとにかく戦力増強に努める事。

その為に様々な方法で各方面にアプローチしているらしい。

例えば先程のように単独の性能強化を目的としたレベリングやスキルの習得をノルマ化。

武器や防具もお抱えの職人に頼むだけで無く、自由競争で品質を高める。

更にはまだ見ぬ優秀な人材を求めて野良のスカウトや、団員募集も幅広く行う。

「次は簡単な牛イベだろうに、随分と早急な話だな」

「牛イベ…？ ああ第3回イベントの事ね。うん、戦力の件はその次のイベントを見越してらしいよ」

「ふむ…。ならばまだ余裕はあるか…」

「何か予定でもあるの？」

「野暮用がな。…メルトリリスは終わったかね」

ワザと視界に入れないようにしていた先では、ギルド内の設備が破壊不可属性でなければ消し炭になっていたのであろう惨状が広がっていた。

書棚の本は全て灰になるまで焼き焦がされ、豪華な刺繍が入っていた絨毯はズタズタに切り刻まれて見る影もない。

そして肩で息をするミイに対して、余裕そうな笑みを浮かべるメルトリリス。

「ええ万事滞り無く。…では炎帝、強くなりたければ私の指示に従いなさい。代わりに無銘…アーチャーを副団長として貸してあげるから」

「ぐう…リターンが大きすぎて断れない…!」

「おっと？ 本人の了承なく人身売買は辞めたまえ」

「このヘタレ女に襲う勇氣は無いから気にしないの。…それと第4回イベントとやらが終了するまで私はここに詰めるから。毎日、薔薇の花束と恋の詩を用意して会いに来る事。いいわね？」

「……詳細を話す気は？」

「無いわね。なに？ 指輪を渡したらもう亭主関白気取りなのかしら」

溜息を吐くアーチャーとは対照的に、自分のギルドに加入が決定したミイはとても嬉しそうに笑みを浮かべている。もし正気なら、亭主関白何某でまた暴れていたので心安だ。

「君に薔薇を贈るなら一本にしておこう……。それと詩は勘弁したまえ、睦言ならば2人きりの時にでも囁こう」

「ふふっ、楽しみにしておくわ」

「……あー、アーチャーにアンチスレが立つ理由が分かった気がするよ僕」

「この人、ロールプレイって言い張ってますけど、たぶんリアル側でも相当な女誑しですわね」

「謂れなき誹謗中傷は聞こえんな。…ミイ、大変だろうが帰ってきたらフォローを約束するよ」

「ああ…本当に楽しみにしている」

そういつてアーチャーは黄金劇場を後にした。

一度、石の街へ戻りマップを開いて行き先を確認する。

空中に浮かぶ平面のパネルをタッチ。周辺地図から街外の一角にある森林地帯を拡

大してあらかじめピンを刺しておいた地点の名前を読み取り、呟く。

「ギルド『楓の木』…か。はてさて単なる毛刈り要員で済めばいいのだが…」

その先が魔窟だと分かっているにも、第1回イベントの『取引』がある以上、出向かなくてはならない定め。

せめてもと、新たに自作した変装アイテム、仮面を装備して向かうのだった。

天然二人とヤンデレの付き纏い行為

大きな切り株を思わせる『楓魔王城の木』のギルドホームは、緑豊かな森林の中に上手く調和する木造の建物だった。

窓や扉といった最低限の装飾だけを施し、木材の持つ温かみを存分に表現している見事なデザインだ。

実用性はともかく、別荘としてなら確実に抑えておきたいレベルだな…とギルドのドアを叩く前から感心した様子のアーチャー。

こことは真逆の、目が痛いほどに豪華極まる黄金劇場を後にしたばかりで、余計にそう感じてしまう。

しばらく外観だけでも見ていたい気分だが、目的を間違えてはいけないと気を取り直し、ドアを叩く。

チャット機能が全面的に使用不可能になった現在のNWOでは、現代社会でスマホや電話が使えなくなったような不便さが蔓延しており、約束や待ち合わせを取り付けるだけでも一苦勞である。

今回もメイプルとの『取引』がある為、こうして直接出向いているが本人がいない可

能性がある。

最悪、出直しの場合はどこかでレベル上げかスキル取得を目指すか考え始めたところで、ドタドタと激しい割りに遅い足音が聞こえたかと思えば、勢いよくドアが開け放たれた。

「お兄ちゃん！」

「アーチャーだ。…あ、いや違った今日の私は謎の人物サンタム…」

「お兄ちゃん、見て見て！　ここがね、ここが私のギルドホームなんだ！　すごい？

ねえすごい?」

「……語彙が死んでいるぞメイプル」

開口一番、『取引』内容の対価としてプレイヤーネーム呼びを依頼したはずだが、速攻で破られてどうしてくれようかと思うアーチャー。

とりあえず、軽すぎる頬をむにいと掴んでその口を閉じさせた。

「ふぁにすりゆの、おにいひゃん…」

「取引内容を破るなら、このまま帰るぞ私は」

「！　やらあ！」

頬を掴む手を逆に両手でしがみつくようにロックするメイプル。だが悲しいかなSTR0の彼女では力及ばず、良いように嬲られてしまう。

2人がイベント時に交わした取引。

その内容は単純で、メイプル側にはアーチャーの正体を誰にも話さない事。アーチャー側は彼女がその秘密を守られる限り定期的にお願いを聞くという子供の約束に近いものだった。

ちなみに。本当は1回のお願いで済ませるはずだったがメイプルは定期的、という言葉を引き出すまで麻痺の永続ループを繰り返してきたので渋々了承した結果となっている。

「じゃあ約束は守れるな？」

「ふあい！ がんばりましゅ」

「頑張るでは無くて、キチンと守る！ はい復唱」

「まもりまひゅ！」

「よし、良いだろう。お土産に特製のクッキーアソートを持ってきたから、ギルドのみさんと食べなさい。キッチンがあれば美味しい紅茶も用意しよう」

「わあいやったー！」

「ーシスコンって罵倒しようと思ったけど貴方メイプルちゃんのお母さんなの？」

メイプルとのささやかなスキンシップを交わす内に奥から出てきたのは旧知の仲である女鍛冶職人イズだった。

短剣ロストと鍋の件ですっかり疎遠になっていたが、既にギルド内に居た事からメンバーとして参加しているのが見て取れる。

「ご挨拶だなイズ嬢。年頃の少女の機嫌を取るならこれくらいするだろう」

「いや箱入りクツキー差し出すとか、完全に娘がお世話になってる人へ挨拶に行くシーンじゃない」

「……………たしかに」

「鍋の件もそうだけど貴方って相当天然よね」

失礼な、と反論する前にいつのまにか後ろに回ったメイプルにぐいぐい押されてギルドホームの中へと案内される。

室内は外観から想像した通り、木材を中心にした家具が中心に配置されて保養地の口グハウスを思わせる設えだ。

「雰囲気が良いな。家具もイズ嬢が?」

「私は武器関連ばっかね。そういうえば最近来なかったけど武器とかちゃんと整備してる? 一応、アンタの師匠ポジションなんだけど」

「色々と勝手に記憶が改竄されているが、概ねな。最近はスキル付きの双剣を作ったが破壊してしまつて反省しているよ」

「……………は? スキル付き?」

「ああ、ボスモンスターの素材で製作していたら偶然な。まあ【投影】というスキルで幾らでも複製品が作れるから問題：どうしたイズ嬢、そんな怖い顔をして」

「アンタやっぱあたしの敵だわ」

「何故!？」

本来の流れならば、プレイヤー側がスキル付きの武器を製作可能になるのはまだ先の話である。

無知なアーチャーは知るよしも無いが、普通であれば例えボスドロップ品でもこんな仕様はあり得ない。

干将・莫耶はまるで彼の為に、先行実装されたように手に入っていたのだ。

既に碎かれてしまったが、それでも【投影】に登録してある関係で幾らでも呼び出す事が可能。

後にこれを悪用してとんでもない事を思いつくのだが、その話は後述しよう。

その後もメイプルは上機嫌にあちこち説明しながらアーチャーの背中からハグも辞めずに密着した電車ごっこか、コバンザメのように張り付いて回る。

その様子にミーハーなどところがあるイズは「あらあらまあまあ」と関係を邪推して口を手を当ててニヤついているが、もう一人いたギルドメンバーはその様子に納得いかないようで、ある程度メイプルが落ち着いた所でアーチャーに話し掛けた。

「…はじめましてだな、アーチャー。俺の名前はクロム。大楯使いだ」

「むっ、これは失礼した。この子の相手で失念して挨拶が遅れたな」

「それは構わない。だけどアンタ、随分とうちの団長と仲が良いんだな。まるで恋人みたいだ」

はてなマークを浮かべるメイプルと対照的に、普段温厚な性格をしているクロムには珍しい低い音程と煽るような口ぶり。

イズは何事かと訝しむが、間髪入れずに言葉を続ける。

「そういえば似たような関係の女性を何人も引っ掛けているみたいだけど、誰が本命なんだ？ 教えてくれよ」

「……随分と喧嘩腰だな、クロムとやら」

「はっ、知り合いが毒牙に掛けられて冷静でいられるほど落ちぶれちゃいないんでね」

クロムは知る人ぞ知るメイプルちゃんを見守るスレの住人であり、第一情報提供者である。

それ故に第1回イベントで彼女と親しげにしていたアーチャーは要観察対象であり、その側から見れば爛れた女性関係を繰り広げている彼の動向を把握し、前々から敵視していた。

当の本人であるメイプルからは全く悪評は聞かないどころか、明らかに懐いた様子な

のだが、元が天然な性格をしているせいで騙されているのでは？ という疑念が常に付き纏い、遂にはアーチャーが新しい少女へ過激なファクションを強要しているとの報告を受け、直接問い質す必要があるとこの時を待っていたのだ。

髑髏をモチーフにした血塗れのユニークシリーズを全身に身を装備したクロムの圧迫感は強い。

特に頬当て部分は歯茎が剥き出しになった顎骨のデザインで、暗がりでは出会ったら間違いなく幽鬼か死霊騎士に間違えられそうな不気味さを湛えている。

だが、普段からそれより恐ろしいものに晒されているアーチャーに一切の動揺は無かった。

「誤解、といっても聞き届けて貰えない雰囲気だな。出て行けというなら従おう、あくまで私は部外者だからな」

「おいおい逃げるなんて情けない真似すんなよ。男なら一人の女性に決めてキチンと責任を取って話をしてんだよこっちは」

「ああ、そういう事か…。ならお門違いも甚だしいぞ未熟者、憶測だけで他者を愚弄するなど凡夫の行いだ。気をつけ給え」

ヤンデレに付き纏われる気持ちは貴様に分かるか、と卑下の感情をぶつけられたアーチャーが切実な気持ちで返す。

「こつちにやアンタの不純異性交遊の現場を取めたスクショを始めに証拠もたつぷりあるんだ。言い逃れしようとするんじゃないやねえ！」

「男女の機微に口を挟むのも無粋。付き合う段階で相手を一人に絞るのもナンセンス。第一、私は不純な関係など一度も持った事はない。：悪いが君が口を挟む事ではないな」

意識すると、

「へたに彼女らに絡むと不幸が訪れるぞ。一人に絞ったら他の子から刺されかねないんだぞ。俺はまだ童貞だ悪いか。：悪い事は言わないから関わり合いにはなるな」

アーチャーなりに気遣いのつもりだったのだが、言葉選びを間違えすぎてクロムの怒りを更に買ってしてしまう。

「良い度胸じゃないか。：表に出ろよ。ー俺は決してアンタを認めない」

「ちよつとクロム！ 冷静になって」

「止めるなイズ。これは男同士の戦【パラライズシャウト】うがっ!」

「あひんっ!」

「またか!」

クロムが注意すべきだったのは傲岸不敵に見えるアーチャーではなく、その後ろにくっついてきたメイプルである。

ギルド長権限でフレンドリーファイアをONにして、クロムはおるかイズとアーチャーも麻痺で床に沈めてしまう。

「もうクロムさんってば、お兄ちゃんを悪者にしたら駄目ですよ！ 喧嘩両成敗です」

「お、俺は君や彼女達の事を思ってたんだな……」

「あばばば……私、完全にとぼつちりなんだけ……ど」

「……あ、やっと麻痺耐性（小）が取れたな。ハハハ……」

「じゃあちよつとお兄ちゃんと探索してきまーす！」

痺れて倒れ伏す2人に断りを入れながらも、アーチャーと冒険出来るのがよほど嬉しいのか、そのまま彼を引き摺りながら外へ出て行くメイプル。

その様子を見届けざるを得なかったクロムは誤解したまま憤慨し、色々と事情を察しているイズは、ここにサリーが居なくて本当に良かったと安堵する。

そして麻痺が自然回復し、ようやく起き上がった際、未だ怒り収まらぬといった様子の彼に改めて質問を飛ばしてみた。

「それでクロム、らしくも無い行動ばかり取るぐらいアーチャーが気に入らないの？」

「……オレはただ一般論をだな」

「はい嘘ー。なに？ お兄さんポジションが取られそうで嫉妬しちゃった？」

「なんでさ」

普段はそれこそ年上として、ギルドメンバーを始めとした相手に世話を焼く穏やかな性格のクロムがここまで感情を露わにするのは本当に珍しい。

それは彼本人も自覚しているらしく、指摘されて少しは頭が冷えたのかバツが悪そうに身体を竦める。

「ただ：なんていうかな。アイツを直接見たらどうしてか、許せないって気持ちばかりが先行して冷静さを欠いちまったのは事実だ」

「まあ相性が悪いって相手はいるしね。：そうよ私もアイツ嫌いだったわ。あはははっ」

「そのリアクションでどんな感情を読み取ればいいんだ：」

ところ変わって石の街。

運良く街に入る前に麻痺から解放されたアーチャーは、ニコニコ顔で歩くメイプルの

後ろを付き添いながら歩き、質問した。

「元の予定はイベント用の羊毛集めではなかったかね？」

「えっとね、そっちはさつき終わったんだー。【発毛】ってスキルで自分から生やして切って貰ったの！」

「自分から羊になつていくのか……」

「お兄ちゃんも取る？」

「不要だ。というか呼び方を……はあ、まあ知り合いが近くに居なければ問題なからう」

何だかんだでメイプルに滅法甘いアーチャーは、度重なる連呼に諦めてアツチへふらふらコツチにふらふらと、興味の対象を秒単位で変えながら街を練り歩く子供のような彼女の後ろを歩いて行く。

途中、何度かアーチャーが足を止めて後ろを振り返る場面が何度かあったが、特に知り合いがいるわけでもなく、首を捻っていた。

やがて、いつも行かない道に行きたいと路地裏に入った所で、とうとう自覚なき天然2人組がやらかそうとしていた。

「……ああ騎士様！　どうか娘を助ける為……私を北西にある退魔の泉へお連れ下さいませ」

【クエスト 博愛の騎士 が発生しました】

「なんかクエスト始まった？」

「ふむ…マップで見るとだいぶ遠いな」

どうやら謎の症状で病床にある娘を救うべく、母親と共に行動する内容らしい。目的地まではモンスターの多い平野を突っ切った上で見通しの悪い森林を抜かねばならず、中々の難易度を誇ると思われた。

しかし、メイプルは私に任せてと母親を連れて広場に出るとアーチャーも見たことのある指輪を取り出す。

「それは…【絆の架け橋】か。メイプルもペットを？」

「そう！ シロップっていつてね可愛い亀さんなの」

「亀？ それで何をするつもりかね」

自信満々のドヤ顔でメイプルは手乗りサイズの亀を召喚したかと思えば、高らかに宣言する。

「シロップ！ 【巨大化】そして【サイコキネシス】！」

「かゝめ〜！」

「ぬおっ!!」

そこに現れたのは10人は楽に触れるであろう大きさまで巨大になった亀のシロツ

プが、フワフワと宙に浮いていた。

するとメイプルは当然のように背中に乗ってアーチャーを手招きし、胡座で座らせるとすっぽりその間に収まり座椅子代わりにして動こうとしない。

そしてそのまま母親も乗せて北西に発進するのだった。

「シロップのおかげでね、最近はずいぶん移動が楽なの」

「楽というか、ズルいというか。モンスターに感知すらされない高度で飛べるのは一方的過ぎるな」

眼下にはゾンビや狼がプレイヤーを求めてウロウロしているが、こちらに気がつく様子は全く無い。あからさまに巨大な影が空を覆っているにも関わらず、決められたルートをひたすら巡回している。

そこで暇になったアーチャーは、ふと思いついたように右手を掲げて詠唱した。

「――【トレス投影】、開始。干将・莫耶。そして【オク鷹の目】【オク投擲】！」

陰陽の夫婦剣が出現するや否や、自動追尾と遠投のスキルを組み合わせて下を横切るゾンビへ大雑把に投げつける。

クルクルと回転しながら目標に近づく双剣は、高所からのダメージボーナスと探知範囲外からの奇襲効果で、容易くゾンビを引き裂いて地に落ちる。

「おお、お兄ちゃんがよくやってるえふびーえすみたい」

その様子を感じするように見つめるメイプルだが、アーチャーはまだだとばかりにもう一度、干将・莫耶を「投影」すると同じように投擲。しかしここからが違う。双剣が敵に届く前に手を伸ばし、再び詠唱したのだ。

「【投影】、更に【投影】、もう一つおまけに【投影】、開始！」

回転する二本の刃が四本に分かれたれ、更に六本、八本と増えて放射状に広がると、それぞれが別のモンスターを狙う。

最初の四本は敵を貫き、五、六本目は突き刺さって消滅。残る七、八本目はダメージこそ与えたものの、倒すには至らなかった。

「ふむ、現状の火力では6体同時が限界。…擬・鶴翼三連、といった所か」

メルトリリス戦以降、【投影】が実は魔法と同じ判定で遠距離からでも行使可能と知ったアーチャーは、本来なら近接武器の間に合わせしか使えないこのスキルと【投擲】持ちの干将・莫耶、ホーミング性能を付与する【鷹の目】を組み合わせて、弓無しでの遠距離攻撃を手に入れていた。

しかも今回は見晴らしのいい上空から投げつけているので、モンスターがどこにいるか丸分かりである。

MP消費コストも投影品を繰り返し使用しているので消費量は低下。更にシロップに座って休憩状態なので自動回復速度も上昇。

そのお陰で道行くモンスターを片っ端から葬り去ってもまだお釣りが来る勢いだ。

そうして退魔の泉に辿り着く頃には、進行上に立ち塞がったであろうモンスター全てが切り刻まれて、拾えなかったドロップ品があちこちに散乱する結果となった。

「む？」

【スキル： 投射 を取得しました】

効果：

投擲の効果を持たない武器を空中から射出する。

獲得条件：

投擲のスキルのみで一定数のモンスターを撃破。

その間、ドロップ品を回収しない。

「ああ、もう、シロップで飛ぶのは卑怯よメイプル！」

後にこの様子を目撃したプレイヤー達からは『メイプルが爆撃機になった』『無敵空母メイプル』『殺戮するみそボンシステム』と畏怖され、全容が明かされる第四回イベントまで都市伝説として語り継がれる事になる。

そして更に

【クエスト 博愛の騎士2 が発生しました】

「連続クエストか：思ったより時間が掛かるかもしれないな」

「ええと指輪がいるらしいけど：もしかしてこれ？」

「身体を強くするならSTR、つまり筋力だろう。こっちの指輪も付けてみるか」

【クエスト 博愛の騎士3 が発生しました】

「早いな!？」

「娘さんも早かったよ!? 追いかけてよう!」

まさかのクエストアイテムを事前入手していた事で、大幅にイベントをスキップした2人。

因みにアーチャーは特に深く考えず、以前ミザリーから受け取った『濃炎の指輪』を試してみたらメイプルの指輪をトリガーに走り出した娘に持ち逃げされてしまうバグが発生。

二度と返却される事はなかった。

ミイは泣いている。

続けて超高速で走り去った娘を探して、常闇の神殿と呼ばれる場所へまたもや母親付きで移動する事になった。

朽ち果てた内部中央の広間には割れた外壁から光が差し込み、ある程度光量が保たれ、倒れ伏せた娘がポツンと横倒れているのが見える。

普通の親ならその時点で走り寄りそうなものだが、これはゲームの世界と言わんばかりに無反応だ。

「ああいう広い場所はボス部屋と決まっているらしいな」

「あつ、それサリーも言ってたやつだ。ちゃんと回復とか準備を怠らないようにして」「そうだったな…ではなくて、そういう事で万全を期すでしょう」

何やら何度もスキルを使用してはMPポジションで回復して、用意を整えるアーチャー。

その間、やる事がないメイプルは少しいたた寝するように彼の肩に頭の乗せてリラックサ状態になっていた。

「む、ポジションの数が足りんか…メイプル、すまんが少し貸して」

「私のを使つて良いよ」
「助か…!?!」

突然の相槌に驚いて勢いよく振り返るアーチャーだったが、周囲には呆然と立ち尽くす母親ぐらいししか姿は無い。

気のせいかな？　と思えば再び彼女を起こして作業を再開する。

そして改めて広間に突入した一行を待ち受けていたのは取り囲むように現れた死霊系モンスターの群れだった。

普段から大楯によるタンクを任されているメイプルは普段のおっとりさを感じさせない動きで「カバームーブ」「カバー」で瞬時に母親のガードに入る。

「ならば私はこいつらを殲滅させて貰おう！」

ガードに気を裂く必要が無くなったアーチャーはニヤリと笑い、取得したばかりのスキルを使用する。

「全【ソールドバレル・フルオープン投影】連続【オープン投射】………!!!」

彼の背後から現れるのは無数の投影剣。アトラス院での反省を活かして死霊系特攻の切り札として用意していた品だ。

弓も使わず、剣すら携えず、ただ掌を向けて放つ。

剣群は一斉に死霊へと襲い掛かり、避ける隙間すらない弾幕の厚さで圧倒する。

直後に巻き起こったのはもはや形容しがたいレベルの騒音を撒き散らす金属音と、モンスターに突き刺さる鈍い悲鳴だった。

死霊系には物理攻撃が通りにくいのは百も承知。

だからこそその死霊特攻。そして肝心のバトルは始まってからほんの10秒ほどで終了し、敵反応は消え去る。

「わあい楽勝だー！」

「やはり何事も仕込みが重要だな。丁寧に灰汁を取ったスープは見た目も味も良くなる」

さあこれで終わりだろうと、母親と娘の家に帰る2人。

しかし、そこで待ち受けていたのは。

「む?」

「およ?」

【身捧ぐ慈愛】

【七つの円環】

2つのエクストラクエストだった。

限界超越とヤンデレの変わる恋模様

身捧ぐ慈愛のクエストは非常にアツサリと終わった。

NPCに指示された場所へ移動し、アイテムを持って帰るだけの簡単なお使い：になつてしまったのだ。

本来はしらみつぶしに場所を探すか、ヒントを集めなければ目的地が見つからない探索型のクエストだったが、メイプルがリアルラックを発揮&mp;空からの見晴らしで、アツサリと見つけてそのまま終わりを迎えてしまう。

クエスト完了と新たなスキル獲得に喜ぶ彼女を他所に、アーチャーは自分のアイコンだけに表示されたエクストラクエスト「七つの円環」を改めて見る。

何かしらの条件を満たしたからこそ選択肢に現れたと思うが、今までのクエスト名である博愛の騎士から妙に浮いたタイトルと、見覚えのあるネーミングセンスに違和感を感ぜずにはいらなかった。

「お兄ちゃんはそれを選ばないの？ わたし、まだ戦えるよ」

ここまでほぼ戦闘が無かったメイプルは回数制限のあるスキルも殆ど残った状態であり、申告通りほぼ万全に近い。

アーチャーも戦闘で使用した武器は全て投影品なので損耗は無いが、「投射」のスキルを試す内にMPポーションが枯渇してしまい、そちらの買い足しが必要なくらいだ。

「勘繰りすぎても仕方ないか…。よし決定を押しすぞ」
意を決して、ポチリとアイコンをタッチする。

しかし予想していた母親や娘に変化は見られず、特別なメッセージが流れたりもしない。不審に思っていると突然、母親の口が開いた。

「S5168・N1150」

「えっ、いきなりどうしたのこの人」

「これは…もしや座標か？」

マップを開きグリッド表示に切り替えて、十字に切り分けられた枠から位置を精査するアーチャー。端的な情報だけなので時間は掛かったが、どうにか目的の場所らしき地点を突き止める。

その間、暇だったメイプルは「身捧ぐ慈愛」のスキル効果を確かめる為に金髪になって羽根を生やし、シロップと遊んでいた。…どうやら頭を使う部分で力にはなる気は全く無いらしい。

「というか頭は悪くないだろうとリアル側なら突っ込むところだったアーチャー。

「……は…特に何も表示されないが地形的にはダンジョンの入口といった所か」

「うーんやっぱりバグ？ でクエスト事態がおかしな感じだね」

確かにと返事をする。

ただ、このクエストの進め方自体が反則ギリギリの行為を連発しているので運営が一方的に悪いとも言い出せない。

何らかのフラグを踏み忘れて仕様外の挙動を招いたかもしれないという自責の心が今にして頭を過つたのだ。

万が一失敗に終わっても文句は言わないように心に誓う。

「取り敢えず、買物だけ済ませて現場に向かうか」

「はーいー」

短い期間に何度も出入りした家を後にする2人。

メイプルはシロップの上で密着する時間が長かった影響で、アーチャーにくつつく事に安心感を覚え、抱きつくように腕組みを強要してくる。

他者から見れば仲睦まじいカップルにしか見えない様子で路地裏を抜け、大通りへ出たところを横切るプレイヤーと衝突してしまう。

互いの不注意が招いた偶発的な事故だったが、姿勢を崩したアーチャーとは違い、相手は既に態勢を立て直して何か気になる事でもあるのか。じつと立ち尽くしている。

「おっと、すまない。大丈夫かね？」

「……ええ、さつきまではね」

「? 何を言つて……ぬわっ!」

「お兄ちゃん!」

咄嗟に出た謝罪の言葉もままならず、眼前に突き立てられたのはクリスタルの短剣。

P K行為が禁止された街中という事もありダメージは無い。しかしその刃を振るつた人物に問題がありすぎた。

「…まるでデートみたいだね。私、驚いちゃった。本当に」

「き、君は…ええとその。前回のイベントで出会ったプレイヤー…だったな、うん。取り敢えず刃物を降ろそう、降ろして下さい」

そこにいたのは見間違えるはずもない、サリーの姿。そして眼光。

あまりの恐怖に、普段のロールプレイから少し素が出た態度で落ち着かせようとするアーチャーだった。

サリーの瞳は完全にハイライトを失っており、平坦な声色とは真逆に渾身の力で何度も短剣を突き刺そうとしている。

流石のメイプルも慌てて抱きつきを解除し説得を試みるも、まったく聞こえていない様子で、ひたすらアーチャーだけを見つめて視線を離さない。

「ねえ私や楓の事はどうでもいいの? 良くないよね? そんな女相手に親しげにする

なんて…私、捨てられたのかって、勘違いしちゃうじゃない」

能面のような顔つきで、それでいて泣きそうな雰囲気醸し出すサリーの様子に思わず息を飲む。いつもは明るい、たまに異様な執着を見せる事はあっても、悲しむ姿をほとんど見せない友人の姿にたじろいでしまう。

最後に短剣を大きく振り振り眉間を突き刺す仕草から、崩れるように彼へ寄りかかるサリー。

顔は伏せられてどんな表情をしているのか、彼からは分からない。

けれどもここで声を掛けなければ、取り返しのつかない事態になると直感し、今にも消え入りそうな彼女の肩を抱くと。

「すまない……………この子はメイプルだぞ」

真実を告げてしまう。

「……………え？」

まさかの答えに、手の中でピクリと震えるサリー。

「えつと…サリー、聞こえてる？ わたし何が起こってるのか良く分からないんだけど…取り敢えずどこかで休憩でもしよっか」

顔は上げずとも、その声だけで相手が親友のメイプルと気が付いた彼女は石のように固まり、勘違いの恥ずかしさともう一つの理由で動かなくなった。

確かにメイプルを他人と勘違いして襲い掛かったのは不注意だった。

しかし、何よりまずいのは今までバレないよう、そつと好意を伝えた事はあっても、青年本人には黙っていた想いを遠回しにはいえ吐露してしまった事。

彼女の乙女心は決壊寸前まで追い詰められてしまう。

その変化を手触りから感じとったアーチャーは、命の危険から逃れた安心感と勘違いさせた申し訳なき、そしてあえて伝わらないようにしてきた彼女の気持ちを鑑みて、つい思ったままを口走る。

「……俺は、お前達を置いて本気で何処かにいったりしないから。だから……泣かないでくれ」

演技も立場も誤魔化さない、青年のままの一言を少しだけ抱き締めながら伝える。

それを抵抗もなく受け止めた彼女は顔を真っ赤にしながらも、僅かに震え「ありがとう」と、ギリギリ聞こえない大きき声で呟くとそのままログアウトしてしまった。

「え、えつなに？ 何が起こったの？」

「……まあ、あと10分もすれば頭も冷えて帰ってくるだろう。それまでメイプルは普段通りにしておくんだ」

「んん〜？」

「……ここで詳細を話すのは野暮だろうと、メイプルを無理やり納得させて帰って来るであ

ろう時間まで暇を潰す。

このNWOの世界に没頭してからそれなりに時間が経過し、リアル側で会わないからこそその関係やコミュニケーションの取り方がある事を知った。

この日からアーチャーは：いや、青年は幼馴染と友人の関係を壊さないよう、あえて地雷原の上で過ごすような日々を送ってきたが、そろそろ『道』を決めなければと思うようになる。

「いやーゴメンゴメン！ てつきり別の知り合いだと思つて勘違いしちゃった！ あやまるわー」

「いやいや、こちらこそ訂正が遅くなって悪かった。以後気をつけるとしよう。H A H A H A」

「…2人ともワザとらしくない？」

「気のせいよ」

「気のせいだな」

あの後、戻ってきたサリーは騒がせたお詫びとしてクエストの協力を申し出た。

途中参加の為、報酬は貰えないがせめてもの罪滅ぼしだと、たまたま偶然買い込んで

いたというMPポジションと「クイックチェンジ」のスキルスクロールを無理やり渡して話を強引に打ち切り、シロップの上に同行している。

「それで貴方の事はアーチャーさん、でいいのかしら？」

「……いや呼び捨てで構わない、敬語もいらんよ。ただし私はただの『弓兵』、アーチャーだと認識しておいてくれ」

「ん、分かった。……でも…確認が取れたら黙ってた制裁として刺すね」

何故か、うっとりした表情をみせるサリー。

「…その青年が可哀想だから辞めたまえ」

「ふっ、うーそー！」

いや実際の現場になったら刺すつもりだろうと、半目で疑うアーチャーはやっぱり自分から言いだすのを辞める事にした。

流石にサリーの前では存分に甘えるのが恥ずかしいメイプルはそんな2人のやりとりを少し離れた位置でチラチラ見ながらふと思う。

（何だろう…？ お兄ちゃんとサリーが仲良くしていると、何だか胸がつつかえてくる。ご飯、食べ過ぎたのかな？）

今まで後回しにしてきた感情が今更になって湧き上がってきたのか、しかしそれでも潜在的に『兄妹』という長年の括りが消える事を恐れて深く考えられないメイプル。

それでも真横に2人がいる以上、嫌でも会話は耳に届き、モヤモヤを拭い去ることが出来ないまま移動時間を過ごす。

今までこんな事はなかったのに。

どうして今になってこんな気持ちになってしまうのか。

「かゝめ〜?」

「ご、ごめんねシロップ! 何でも無いの」

心配するペットに両手を振ってアピールするも、何だかそれさえ虚しく感じて来る。ついさつきまで2人で楽しく遊んでいたのに全てが台無しになった気分。

いつもだったらお兄ちゃんが慰めてくれるのに今はサリーが独占しちやつてる…。

心の中で靄が揺らぎ、2人が気付かない内に彼女の心に陰りが見え始めた。

その感情を正面から『嫉妬』として認識出来ない彼女は

この時確かに、愛を渴望した。

そして三者三様の考えのまま、一向は目的地に辿り着いた。

何があるか分からない為、シロップは空中で待機している。

「洞穴なのかな？ 何処で見たような…」

「あつ、ここつて第二層に来る時に通つた階層ボスのダンジョンと雰囲気似てるわ」

座標だけが記されたその場所は、苔むした岩壁に重機を無理やり抉つたような亀裂が走る大洞窟。

砕けた岩がそこかしこに散乱し、入り口に通じる一歩道以外はまるで通れそうも無い。そしてそれは岩戸を障害物に侵入者を拒んでいる。

「これは…どういう事だ？ 座標か私が間違っていたのか、それともバグか…」
「うーん、取り敢えず探索つて事で」

あのメツセージだけではこの付近という事しか分からない。

三人掛かりで、あちこち探すが一向に成果は上がらず、もしかしたら次の階層が解放されたタイミングで達成出来るかもとサリーが思いついた時。

「あつそうだ！」

メイプルが必ずやらかす時の声を上げて、大洞窟を塞ぐ岩戸の前に立った。

「メ、メイプル？ 何をするつもりなの？」

「えっとね、たぶんこの先に入口があるはずだから…シロップ、【精霊砲】！」

間髪入れずに地形オブジェクトに叩き込まれたのは極太のビーム。

思わず目を瞑る眩しさから一瞬の後、期待に満ちたメイプルの表情とは裏腹に、まるで傷ついた様子の無い岩戸に肩を落とす。

因みに、彼女にもビームが直撃したが痛がる様子はどこにも無かった。

「あはは…流石にメイプルでもそんな力押しじゃ…」

「なるほど、そういう方向性もありか」

「え、待つてなんでアンタが納得顔してるの」

アーチャーもまた妙案でも思いついたのか、岩戸の前に並んでメイプルに何事かを呟く。すると彼女も疑問を挟む事なくある程度離れた位置まで走り去ると、宙に浮かんだシロップを更に遠距離に配置して準備完了を示すように大きく手を振る。

「ではいくか…イガリマー」

岩戸の下に挟み込む角度で巨山剣を呼び出すアーチャー。

それはすぐさま先端が突き刺さると、残りの刀身を出現させるべく後方へと伸びて姿を現わす。

その刃の中間地点にはメイプルが両手を上げたまま待機しており、重力に従って落ちて来たそれを、常識外のVITに物をいわせた耐久力で受け止める。

「な、なにをしようしてるの…?」

恐る恐る聞くサリィ。

「なあに簡単な……テコの原理だよ」

作用点は岩戸。支点はメイプル。

そして力点となるのは、遙かに上空で待機していたシロップが巨大化したまま落下する事で生み出される。

冗談のようなスケールの巨大シーソーは、その倍増どころでは済まない超荷重を岩戸の下で激しく発揮。不自然すぎる微振動を繰り返したと思えば、コルクを抜き去るようにシユポーン！と岩戸がカツ飛んでいった。

「よし」

「……………ええ〜」

実行犯達は科学の勝利だと思っているが、実のところは破壊不可属性のイガリマと岩戸が干渉し合った所に、シーソーが生み出す力から数え切れない回数と密度の接触判定が発生し、バグを起こして座標ズレが生じたのが原因である。

岩戸は元々、第三層開放時に撤去するだけの手抜きオブジェクトとして配置していたのが仇となった結果だろう。

天然かつ思いもよらない方法で、ギミックをゴリ押しクリアするメイプル。

天然でおかしな方法を思いついて、バグや不具合を引き起こすアーチャー。

1人だけでも運営を悩ませる問題児達は今日も予想外をしてのける。

「あーまあ…結果はともあれ、進む？　ここまで来て帰るのも何だし」

「うんうん。私達三人からどんな相手でもへっっちゃらだから大丈夫！」

無理やりこじ開けた大洞窟に侵入する三人。

やたらと意気の高いメイプルを先頭にして奥へと歩を進めていく。

彼女の言う通り鉄壁のメイプルに、PSお化けで今まで被弾0のサリー。条件付きで最大火力と防戦に優れるアーチャーならば、並大抵のボスモンスターだろうと初見で相手取れるだろう。

狭い場所での戦闘を考慮しての慎重に進むが、どこまで行ってもモンスター一匹すら出現する気配がない。

それどころか、どんどん周辺がシンプル：簡素な見た目が変わっていき、道端の石ころや草木も生えず、なだらかな面だけが通路を形作っている。

そして一行が自然と足を止める場所にはもう『地形』すら存在しなかった。

V R M M O が誇る現実のような外観を全て抜き去り、原色と発光体が正方形を組んで規則正しく整列。

二次元の線だけで編まれた三次元の構成物は一昔前のSFのようなデジタルエフェクトを思わせる。

宇宙色の見果てぬ空間に迷い込んだ三人は、自分達が今何処にいるのかさえ曖昧な認

識に苛まれて茫然自失となった。

アーチャーは頭の隅で、ここが未開発エリアだと予想しつつ、もう一方で危機探知の警鐘が鳴り響く予兆に、身震いして視線を左右に動かす。

左にいるサリーは困惑しながらも、既に短剣を構えていつでも動けるよう注意を配っていた。

そして、右に動かしてみると立ち尽くしていたメイプルが、虚空を見つめながら、うわ言を呟いている。

「あなたは…だれ？ あなたは、どこにいますか？ せまいのは、きれい。もつと…もつとおおきく…：…あなたは…どこにいる？」

「メイプル！」

「…うひゃあ!? な、なにお兄ちゃん！」

「今、完全に我を失っていたぞ…。自覚はあるか？」

「え、そうなの…？」

「大丈夫、メイプル？ ここに来る前から体調が少し良くなかったでしょ。無理したら駄目よ」

心配してくれる変わらぬ2人に安心しながら、多少の虚勢を張って元気をアピールする。

今は少しでも2人と一緒に居たいからだ。

「……この怖気。何も居ないはずは無いが」

「見て、あそこー！」

どこまでも続きそうな平面で組まれた空間に、突如として立方体のポリゴンが現れ、攪拌されるように混ざり合いながら1つの生き物を形作る。

金色の毛並みにスラリと伸びた肢体。四足と九本の尾を備えた巨大な獣。――本来ならば第五層への道に立ち塞がる階層の主。

『九尾の狐』が三人の前に姿を現した。

「……このボスかな？」

「たぶんね。……でもヤバい雰囲気だビンビンする」

そんな事を知る由もないメイプルとサリーは、これがクエストの達成条件だと思いつき、それぞれが盾と短剣を構えた。

当然それに倣って弓を装備するアーチャーだったが、未だ鳴り止まない警鐘を訝む。

そして、それを証左するように声が掛けられた。

「お前さんの相手は、その稲荷様じゃねえよ」

いつからそこに居たのか、背後から姿を見せたのは和の着物を纏う一人の『白鬼』だった。

着崩した格好とは裏腹に視線は鋭く、肩に担いだ抜き身の刀をダラリと持っているが、隙は一切感じない。

そんな達人を思わせる立ち振る舞いは余りに滑らかで、まるで人のような息吹を感じさせた。

「……こちらもまた、本来ならば第四層の難敵として立ちはだかるボスモンスターだ。

「ただのNPC……という訳では無いようだな」

その見た事もない風貌に警戒心を募らせる。

脳裏に過ぎるのは、つい先日現れたアルターエゴを名乗る一人の少女。

また頭を痛めるような厄介事が舞い込んだのかと顔を顰めるが、男はあつけらかなと言いつつ放つ。

「あん？ 何を勘違いしてるのかさっぱりだが、お前さんが挑むべきなのはこっちだ、

こっち。只の隠れ蓑に気を取られすぎんな」

「なに?」

「詳しい理由なんざ聞いちやいねえが、どうも戦って実力を計るのが仕事なんですね。——この儂オレと、死合つて貰もらうぜ」

カチャリと流れるような動作で刀を構えると、白鬼は殺気を巡らせた。

第三イベとヤンデレのR—15行為

「なるほどそれで？　狐なんて畜生に負けた情けなさで、今日まで顔すら見せずに落ち込んだ挙句、この私を放置していたと」

「…まったくもって申し訳ない。加えてリアル側では試験前でね、君に宣言した約束すら守れなかった。出来る限り埋め合わせをさせて欲しい」

黄金劇場内に割り振られた一室、マイルームというべきその空間は他とは一線を画す内装が施されて、元の姿は見る影もない。

調度品全てが淡い水色を放つクリスタル製に統一。

白のみで彩られた色調は病的なまでの清潔感を放ち、塵一つ足りとも落ちていない。

ただ、場違いなペンギンのぬいぐるみだけがベッドの上で、こんいちわしている以外、静謐そのものを現わす設えで満たされている。

そしてその部屋の主と自称するメルトリリスは不機嫌さを隠そうともせず、お気に入り水晶椅子に座って、正座させたアーチャーを責め立てた。

「対価は勿論、要求します。しかし仮にも私の所有物であるアナタが土を付けられるなんて我慢ならないのよ。ブランドというのはね、常に品格と一定以上の質を示すもの。

無様に逃げ帰る前に打てる手は無かったのかしら？」

カントツと刃のハイヒールを床に突き立て、威圧する。

姿勢のせいで必然的に見上げる角度から表情を伺うアーチャーは、冷酷な目線で見下し、今にも彼の首を蹴り落とすような勢いで苛立ちを籠めるメルトリリスに口を開く。

「すまないな。君がそんなにも私に会いたいとは思っていなかった」

「はあっ!? 何をどう聞き間違えたらそうなるの!」

「打つ手段とは、つまるところ君を〔令呪〕で呼ぶ事だろうか? 手を煩わせる位ならと遠慮していたが…今日までの日も含めて、いやはや求めてくれるのならば吝かではない」
虚を突かれた返答に驚き、ムキになる。

アーチャーは、彼女が遠回しに頼られなかった事に対する不満部分を だけを掬い上げる事で論点ずらしに成功した。

「拡大解釈の頭オカメインコよアナタは。自己評価が高すぎて、独りよがりの求愛ダンスを見せられている気分」

「だが強ち間違いでもあるまい。…蔑ろにしたつもりじゃないんだ、すまない」

「アーチャーはあ、もういいわ。私のアドリア海より広い慈悲に感謝しなさい」

「ここで話は終わりと脚を組み替えて、首ごと視線を逸らすメルトリリス。その頬が少しだけ赤いのは気のせいだろうか。」

(さて、とりあえず白鬼に言われた通り、勘付かれないようにしたつもりだが……ここからどんな目が出るかは賭けだな)

思い返すは謎のクエストで出会った白鬼の事。

彼の言う通り、強大な力を誇る九尾の狐はメイプルとサリーを必要以上に痛めつける事は無く……というよりダメージを全く与えられず逆に追い詰められていたが、言葉自体に偽りは無かった。

そして死闘じみた戦いが始まると思えば一太刀合わせた所で、失望顔の駄目出しされてしまい、話がこんがらがってしまう。

「駄目だ駄目だ、棒振り小僧未満の赤子じゃねえか。刀なんて預けられん」

口調だけなら失望して突き放す発言だったが、彼は九尾の狐に向き合うと、さも当然のように口を開いた。

「おう、面食いの稲荷大明神の使徒さんよ。ちよつくらコイツと儂の周りだけ時間を早めてくれねえか。せめて火入れに耐えられるまで叩き上げたいんでね」

「ちよつ……ちよつと待ちたまえ！ 何が目的なんだ。時間加速までして私をどうしたい」

「あー、詳しい話は分からないつつたろうが。儂はただ刀を預けるに足る男にしてやる

「ただだ」

つまり、勝つまで戦え。と白鬼は言いたいらしい。

「——構えろ。仮初めの身体で剣士ですらないこの身を越えられないなら、この先誰かを守るなんざ夢のまた夢だ。そんなのは……嫌だろう？」

「ッ……」

否応無しに、外界から時間が切り離され加速した影響でメイプルとサリーの動きが停止したように鈍い。

「なに、ちいとばかりキツいだけだ。及第点を越えたら奥の手を一本打ってやるから頑張んな」

始まるのは永劫無限かと錯覚するような剣戟の応酬。

斬つては突き、突いては斬るをひたすら繰り返す。袈裟斬り、唐竹、水平、突き、薙ぎ払い。緻密に練り上げ、寸分違わず構築し、どこまでも、どこまでも『収斂』だけを言祝ぐように技を磨く。

やがて時間経過も気にならない程の鍛錬に明け暮れ、何週間、何ヶ月、もしくは何年も経過し、時間加速の負荷に脳が耐えられない限界時間ギリギリまでを費やして、とうとうアーチャーは白鬼に認められた。

「よおし、……まで。農みてえに剣を振る才能は無いが、なかなかどうして一端の顔に

なったな。どんな鈍らだろうと研いで磨けば、野菜も切れる、人も切れる、妖もバケモノも纏めて斬り捨てられる。お前さんはそういう人間だ」

「……白鬼」

「農からの餞別だ。まずはそいつを受け取んな」

中空に手を差し出して放り投げたのは何の変哲もない「一振りの刀」。

外見から既を感じる凄まじい恐怖に反して、抜刀した抜き身の刀身は些か冴えに劣る。一流品には間違いないが、鞘と柄に比べると格が釣り合っていない気がしてならない。

「おう、そいつは間に合わせの竹光擬きだからな。本命が打ち終わるまで繋ぎに使ってくれ。一等良いのを用意してやるからな」

【明神切村正】

種別：刀

STR+50

【防御貫通】【バフ倍加】【耐久値半減】【収斂】

とはいえ、これだけでも充分規格外の性能を誇っている。ならば彼のいう本命とやらはどこまでの強さを秘めているのだろうか。アーチャーは思わず息を飲む。

「最後に雇い主からの忠告だ。……つつても明確に言葉にされた訳じゃねえから齟齬があ

ると思うが覚えておけよ」

白鬼はいつのまにか役目は終えたとばかりに、金色の粒子に身体を変換しながら別れも惜しまず言い放つ。

「……『水月こそが本命。癌細胞に惑わされるな』」

「まさか……まさか本当にアレが実在するということのか？ いやその言葉通りならもしかして……」

「おつと大前提を忘れてた。何でも奴さん、この世界を乗っ取るまで別の場所へ干渉出来んらしい。つまりここが踏ん張りどころつてなわけだ。……頑張んな」

一本の刀と言葉を残して夢幻のような邂逅は終わりを告げた。

元の時間速度に戻った世界では、九尾の狐がまるで人のようにお辞儀をしてから消え去り、気が付いた時には大洞窟半ばの通路で三人もろとも倒れ伏せていた。

メイプルとサリーに記憶を擦り合わせようとしても、時間加速での話は彼女達には届いていない。

ただ、この疑問を打ち明けるにはアーチャー自身の脳内整理が追いついていないと不思議に思う2人を引き連れ、入口へと取って返す。

そのタイミングで、真剣な心情とは真逆の軽快な効果音を鳴らしてテロップが流れる。

【スキル：天覆^{ロイ}う七^{アイ}つの円環^ス を取得しました】

効果：

スキル発動時にVIT100相当の盾を最大7枚まで展開させる。

1枚毎に最大MPの10%を消費。

遠距離攻撃に対してはVITの値を2倍で計算する。

「これが本来の報酬か？ ならあれは……」

白鬼は『儂から』とワザワザ付け足していた。

とくれば、この刀は彼が個人的に面倒を見てくれた言葉通りの餞別だったのだろう。鍛錬も含めて厳しい口調の割りに面倒見の良い御仁だったと苦笑する。

そして、知識通りならメルトリリスは『月側』の勢力である。彼女の最後をゲームで知っている以上、その心根に改心の要素が無いとは言い切れないが、それでも生まれかからして警戒対象になり得る相手に違いない。

だからこそ、自分でも歯が浮くような台詞回しで誤魔化しながら、動向を探ることにした。

しかし出来れば敵対はしたくないと、アーチャーは即座に彼女を切り捨てる判断を下

さず思い悩み、第三回イベント当日までログインする事すら出来なかったのだ。

何はともあれ、関係を深めるのは無駄ではないとアーチャーは考えて出来るだけ機嫌を取るように心掛ける。

この黄金劇場も、場合によっては魔窟と化す可能性があるのでセーフハウスの設置も視野に入れなければならない。

正座から立ち直して彼女に向き合う。

そのまま表情を変えずに思い悩むアーチャーに、一つ小さな咳払いをしてからメルトリリスは話題を振った。

「それで今日はどうするのかしら。ギルドは牛追いなんて野蛮なイベントに参加中だけどアナタは合流するの?」

「ああ…それなんだが、私のキャラビルドはソロ特化だからね。本隊とは合流せずにメイプルと狩りをしようと思う」

「メイプル…?」

「おっとまだ紹介していなかったな。彼女はギルド『楓の木』の代表で私の友人…まあ隠す話でも無いが、リアル側では幼馴染の関係でね。兄と妹のように育った仲間でもある。昔からなかなか隙の多い性格だが、芯は朗らかで天真爛漫といって差し支えないな。少しばかり痛がりりで毎年インフルエンザを患う癖があつてね、病弱では無いんだが、昔か

ら目を離せないんだ。今年はまたマフラーでも編もうか…。そうそう元はデジタルゲームを苦手にしていてね。幼い頃はよくおままごに誘われてはなぜか母親役ばかりやらされて困ったものだよそこはいつも通りお兄ちゃんじゃないのかってそれと「シヤラップ！」どうしたメルトリリス?」

メチャクチャ語り出したアーチャーの勢いに突っ込まざるを得なかったメルトリリス。頭痛を抑えるよう額に手をやって率直な感想を述べる。

「アナタ…シスコンだったのね」

「なんでさ」

「自覚症状が無いとか、噛みたいに脳がスカスカよ。年頃の男女が睦み事も無しに距離が近いなんて、シスターコンプレックス以外あり得ないわ」

そして彼女は小声で呟く。

「この前の女といい、泣き虫炎帝に加えて幼馴染の妹。何で月も関係無いのにライバルが増えてるのよ!」

「メルトリリス?」

「! 何でも無いわ。…それと気が変わったから、今日はアナタに同行してあげる。ステキなデートスポットにでも案内しなさい」

「いやメイプルとの約束が…」

ある。と言い切る前に棒立ちの鳩尾めがけて膝蹴りを見舞う。

案の定、ダメージは無いが反射で前屈みになると、そこを狙って両の手でガツチリと顔を挟み込まれる。

そして唇に冷たく柔らかい膨らみが、少しだけ密着した。

「……私を優先しなさい。これは命令よ」

言うや否や。

そこで終わると思った唇同士の触れ合いは、にゆるりと口内に侵入する舌の感触で継続が確定する。

なぜ、全年齢向けのNWOでこんな行為が出来るのか不明だが、彼女という存在ならばシステムを弄るくらい造作も無いのだろう。

近すぎて顔が見えないが、歯の一本ずつまで愛撫するような丁寧さで口の中を侵される。

互いの粘液が絡まり、混ざり合い、唾液が分泌されすぎてクチュクチュと音が漏れるくらいになってようやく舌が引き抜かれた。

そこで見えた彼女の表情はまさしく陶酔。

美酒に酔ったうら若き少女はニヤケながら舌舐めずりをして、男の太い太ももに、自分の細い両脚を絡ませてピッタリと密着する。

前屈みの姿勢からの接触は、まるでバレエのように大きく上半身を反らすキツイ動きだったが、彼女の柔らかさからしてみれば苦しさの一つもない自然な動きで負担などどこにも無い。

手足の感覚が鈍い体質のせいか、代わりに全身で彼を感じられるように隙間なく身を這わせては上下に動かしして摩擦を味わう。

見上げるメルトリリスは本人は隠しているつもりでも、間違いなく興奮していた。指摘は出来ないが、あからさまに下半身の動きが早くなってきたからだ。

ゴクリと喉を鳴らすと、彼の方が興奮している証拠だと機嫌を良くして再び熱烈に口付ける。

激しい加虐体質を持ちながら、彼女の中に秘められた真逆の心情である『奉仕欲求』。それに従い、気持ちいいと感じる行為を積極的にこなしていく。

快樂のアルターエゴ・メルトリリス。

糸を引く、ディープキスを終えて淫猥に微笑む姿は、見ようによつては毒婦であり、たしかに名前負けしない魔性の女だ。

少なくとも今の彼は、そう思う他なかった。

「―――馳走さま。とにかく、今日は私の貸切よ、反論弁論は一切受け付けないから覚悟しなさい」

「……仕方あるまい。だが、彼女側から接触してきた場合は無視できないからな」

「ふんだ。この広い第三層でチャット機能も使えず偶然出会うなんて伝書鳩でも無ければ不可能よ」

そう言い放ち、メルトリリスはここ最近籠りっぱなしだったマイルームから出て先を行く。

メイプルには途轍もなく申し訳ないが、今日ばかりは仕方ないと機嫌をとる事を優先する。しかしあのメイプルだしな……。とぼぼ確定した未来を予知したアーチャーは先程までの快樂を少しでも早く忘れる為に、天を仰いだ。

「あつ、お兄ちゃん！ こんな所にいたんだ」

「……嘘でしょここイベントに全然関係ない山頂よ!? どういう思考回路をしたら辿り着けるのよ、ていうか亀が飛んでるんですけど!?!」

「まあ……メイプルだからな」

雪の降り積もる岩山のとっぺんでプレイヤー達を見下ろしたいとオーダーを下した彼女を担いで行く千里。登頂部でようやく一息ついた所に、空飛ぶシロップに乗ったメイプルがふよふよと浮きながら接近してきた。

この邂逅より30分前。

流石にメイプルの先約を無視してそのままデートするのは心が引けるアーチャーは、メルトリリスが不機嫌になるのを承知で彼女に断りを入れた。

しかし、イベントに貢献しなければいけないギルド長としての立場よりも最近甘え癖が再発してきたメイプルは、何だかんだと引き下がらず。

メルトリリスから「もし私たちを見つけれたら同行を許可しましょう」と、かくれんぼ式の提案を持ち出されて渋々承諾していた。

そして20分の時間差で街を出たはずのメイプルは、空飛ぶシロップによるルート無視と、野生のお兄ちゃんリーダーで位置を特定するとRTA並みの記録で追いついてしまったのだ。

「よおし、見つけたから私も一緒に行くね！」

「くっ…：幼馴染属性を油断していたわ」

「そういう話なのか…？」

変な所でサブカルチャーに詳しいメルトリリス。

その悔しそうな顔とは対照的に嬉しそうなメイプルは、シロップのゆったりした移動時間も勿体ないとばかりにアーチャーに向かって身体を乗り出して手を伸ばし…：亀甲の端からズリ落ちた。

「!? 危な…ッ!」

「い、いやあああああああああ!?!?」

しかもぎりぎりアーチャーの服の裾を掴んだせいで両者諸共、山の斜面を転がり落ちていく。

突然置いてけぼりにされたメルトリリスとシロップは啞然とそれを見送るが、転がり落ちる音はいつまで経つても鳴り止まず、しかも遠ざかっていく。

「…とりあえず降りるわよ」

「…かめ」

メイプルからの「サイコキネシス」が無くなり、巨大化も解かれたシロップは彼女に抱かれながら下山していく。

本気を出せば真つ直ぐ降下しても無傷で済むが、砂や埃が付く事を嫌って慎重にステップを踏みながら後を追った。

一方その頃、アーチャーの耐久力では落下ダメージに耐えられない筈だったが、メイプルの咄嗟の機転による「発毛」に飲み込まれて、毛玉と化す事で難を逃れていた。

斜面を転がるモコモコのパンジヤンドラムは、途中でポップしたモンスターを跳ね飛ばしながらダイナミック下山。

しかし球体であった事が災いし、地面に激突しても勢いは収まらず、道無き道を駆け

抜けていく。

「うにやあ〜〜！」

毛玉の中で攪拌されるメイプルは反射的にアーチャーへしがみ掴もうと四方八方へと手を伸ばす。

しかし激しく天地上下が入れ替わる内部では方向が分かるはずもなく、偶然外に出た手が硬いアイテムを掴んだ感覚はあっても彼の元には届かない。

そのままゴロゴロ転がって特大の衝突音と共にようやく動きが止まった。

「め、目が回った〜」

「ぐう…：な、何がどうなったというんだ」

毛にまみれて外が見えない彼らは知るよしも無いが、毛玉が停止した場所は以前「身捧ぐ慈愛」で訪れた教会である。

そこへホールインワンした2人に、奥で待ち構えていた悪魔騎士風のボスモンスターが登場。何事かを喋りながら戦闘態勢を取っているが、未だ混乱の最中にある頭では状況を判断出来ない。

どうやら早速攻撃されているらしいが、実はこの毛玉の防御力はメイプルと同等という見た目に反した超装甲なので、まるで効いた様子がない。

やがて毛玉の2人は目を覚まし、何事かを相談しながら行動を起こした…。

『ぎゃああああ！ メイプルがまたやらかしたあ！』

『どうしたどうした、あの子がやらかすのは前から知ってたろ』

『最近だと慈愛クエの、あのショートカットは驚かされたね。でも浮遊アイテム実装前に気付けて良かった』

『不具合発見の一例になってるからな！ 多少は目を瞑つても…』

『【かつての夢】のキーアイテム取られた…』

『『キーはあ?!?!?』』

『待て待て、待て！ あれ第三層用の、しかもエンドコンテンツ用クエストだろ!? 何で今入手してるんだ』

『どうも森の中に設置したアレをリアルラックで見つけたみたいで…』

『そんなの砂漠の中で針一本見つけるようなもんだぞ！』

『でも実際問題、見つけてしまってるんですよ！』

『……あのく、どうしたんですか皆さん。随分と焦ってるようですけど〜』

『し、新人ちゃん…これはその…』

『メイプルっていうプレイヤーがいてね〜。その子が毎回のように規格外のプレイを引き起こすから〜焦ってるの〜』

『ほうほう…つまり不正行為はしていないけど厄介な行動が多くて困っていると』

『ああ…そうなるね。お前ら、キーアイテムだけで手に入れられるクエストじゃないし一旦、落ち着け』

『チーフ…あの…』

『アツプデートまで時間はある。今日の業務が終わったら対策を』

『チーフ!』

『何だよ落ち着けて言っただろうが』

『メイプルと弓兵が「滲み出る混沌」のクエスト始めてます…』

『『『………?』』』

『全員見事にフリーズしてますね…』

『え、何で…あ、そうか慈愛持つてるから…まさかノーヒントで教会に入ったのあの子!?!』

『しかもまた弓兵と一緒にかよ! 今度は何をやらかすつもりだ!』

『あの…このライブモニターを見れば一目瞭然かと…』

『あつ、私も視聴しますね。えつとおく☒ ……………何これ』

『毛玉?』

『毛玉だな…』

『その毛玉から剣が生えてるぞ』

『360度な…』

『ウニじゃん』

『うわ、ボスAIが予想外の行動取られて困惑してるぞ』

『何とか殴り掛かったけど、剣に刺さってどんどんHPが減少してる…』

『無敵かよ』

『お、落ち着けお前ら…こいつはHPが減れば形態変化して火を吐く。このウニ…じゃなかった毛玉はそれで燃え落ちる筈だ』

『……あれ?この毛玉動いてね?』

『歩いてる? でも中に引き籠もってるから方向は分からないはずだよな』

『あく【呪縛】の鎖でボスと繋がってるから、中で引っ張ってるのかな』

『なるほど…つて、おいおいおいおい!?!』

『『ボ、ボスがウニに押し潰されたあ!!』』』

『うわあ〜…』

『ひいっ！ 無理に動こうとするから余計に突き刺さってる』

『どこの拷問器具だよこれ！』

『ヤバイぞ、継続ダメージ扱いでボスの形態変化が機能してない！』

『げっ、弓兵が出てきた』

『あら無銘。じゃなかったアーチャーさんじゃないですか。へえ〜ここでもそんな呼び方なんですわねえ〜』

『すっげえ悪そうな顔してるぞ…』

『この上で何をする気だ？』

『スキルか？』

『おおく綺麗な花が天井に咲いたね〜』

『これってアイツが作った天覆^{ロイ}う七^{アイ}つの円環^スとかいうシールドだよな？』

『だな。それを使って……はあ、そうくるか〜』

『『ウニごとボスを押し潰すと……』』』

『…貴方そんなぶっ飛んだ性格してましたっけ？』

『あつ、死んだ…』

『圧殺死とか始めて見たわ』

『ヒドラを食ったのも驚いたが、今度は拷問かよ…』

『勝利のハイタッチしてる…』

『駄目だ公式イベント中なのに、こつちがハイライトすぎる』

運営たちが頭を悩ませる中、新人と呼ばれた彼女だけがじつとモニターを見つめる。メイプルとアーチャーを…いや『彼女』だけに注目して、口を歪めた。

「……【滲み出る混沌】のスキル。うくん使えそうですねえ」

無限の劍製と防振りのメイプル

炎帝の影とヤンデレ愛の行き着く先

『炎帝』ミイとは。

あらゆる難敵を鎧袖一触にする戦闘力と、威風堂々たる立ち振る舞いによって、多くのプレイヤーを魅了する炎帝ノ国のギルドマスターである。

その拠点たる黄金劇場のメインホールは、数多く在籍する団員数に比例したような巨大さを誇り、NPCの演目やダンスの鑑賞以外にも、戦闘訓練を熟す場所として度々放されている。

今回の使用者は団員にすら人払いを掛けて、秘密裏に訓練相手と刃を交え合い切磋琢磨…いや、一方的に蹂躪されていた。

「遅いわ、ノロマよ、アメリカカヤマシギみたい。攻めのリズムは褒めてあげるけど、守りと回避はお話にならないわ貴方」

「くっ…君が早すぎるんだ。本当にチートは使っていないだろうな」

「自分の未熟を私のせいにししないで貰える？ これは歴とした技術の問題、愚痴を漏らす暇があったら早くその『劍』を構えなさい」

「こっちはまだ初歩的なスキルしか覚えていないのだ……ぞー！」

最後の一言に弾みをつけて突撃するのは炎帝たるミイ。

訓練相手のメルトリリスから押し付けられた『原初の火』という長剣に慣れる為、定期的に模擬戦を繰り返している。

普段愛用している短剣とはカテゴリーが違う上、未経験の近接戦を強要されては実力をうまく発揮出来ず、屈辱の時間が過ぎていく。

時折挟む【炎帝】のスキルによつて形勢を押し返す事は可能でも、指摘の通り、受けに回ると反射的に身体がビクついて対応が遅れてしまうのだ。

それもそのはず、皆が憧れる炎帝ミイとはゲームのアバターと同じように仮初めの殻であり、内側の本人は引つ込み思案で大人しい性格をした一般人の少女。

いくら仮想世界とはいえ、痛みに対する恐怖を簡単に拭い去る事など出来ない。

もう何度目になるか分からない、脚の刃で蹴り上げられて無防備な所へ突き刺さる追撃の膝蹴り。

一切の遠慮なく鳩尾に入った痛撃に顔をしかめて後退るが、相手は待つてくれない。

【踵の名は魔剣ジゼル】

「くう……！ 【花散る天幕】！」

メルトリリスを放った蹴りの衝撃波を、同じく長剣から斬撃を飛ばす事で何とか相殺

する。

しかし、彼女の攻撃はまだ終わっていない。反対側の脚から続け様に衝撃波が繰り出されて防衛すら出来ずに直撃。ミイはホール端まで転げ回る。

「はあ…はあ…」

「咄嗟の判断は良いけれど舞台を降りるまで演技は終わらないと前も言ったでしょう。あまり不甲斐ないようならサツサとあの男を私の物にするわ」

「そ、それだけは駄目だもん！」

「はあ、このまま心を蹴り碎いてしまいたいけど、今はまだアヒルなのか、白鳥なのか判断しかねるわね。…実技は追々にするにしても、せめて【宝具】の解放までには至りな
やう」

「…宝具？」

聞き慣れない単語に思わずオウム返しをするミイ。

その反応にメルトリリスは咳払いを一つしてから説明を始めた。

「そうね、貴方に分かりやすく伝えるならば【スキル】の上位に位置する新要素が【宝具】と言ったところかしら。伝説や神話に謳われる英雄達の武器、逸話を元にした幻想の具現化。その一つである『原初の火』の中にはある『英霊』…NPCがいます。彼女を呼び起こす事で使用が可能になるでしょう」

「彼女……」

「先入観を与えない為にもヒントは与えないわ。まあ、あの性格からしてひよっこり出て来るかもしれないけれど、精々頑張りなさい」

一方的に言い放つとメルトリリスはハイヒールを響かせながらメインホールを後にする。

1人残されたミイは俯きながら恨み辛みと宝具について愚痴を吐くが、やがて心の膿を出し切ったのか、長剣を杖代わりにして立ち上がり、トボトボと自室へ向かう。

ギルドマスターたる彼女には、日々の業務をこなす支配人室の他に個人用スペースである自室も割り振られている。

そこは劇場内でも最も奥まった場所であり、直前の通路そのものに入場制限が掛かっているのだ、中を見た者は誰1人としていない完全な密室だ。

ミイは他の団員に落ち込んだ所を見られないよう慎重に歩を進め、その部屋へと近づく。

両手開きの扉を開け、中に足を踏み入れると彼女は解放された気分ですぐ口を開いた。

「ただいま、アーチャーさん」

疲れ果てたミイを出迎えたのは褐色肌の偉丈夫。赤い外套を見に纏い、ニヒルな笑顔で浮かべて見つめ返す青年の『スクリーンショット』だった。

「今日もね、メルトリリスに虐められたの。酷いよね」

愚痴を溢しながら動きやすい私服に装備変更し、辺りを見回す。

そこには、部屋一面に配置されたアーチャーの姿。

それこそ壁、天井、床、平面という平面全て。

『アーチャーの隠し撮り』が所狭しと敷き詰められ、1mmの隙間も無い。

しかも一枚として同じものは貼られておらず、遠景で薄ぼんやりとしか写っていないような構図すら網羅する徹底ぶりだった。

常人が見れば狂気としか表せない空間だが、彼女の表情はどこまでも軽やかで一面を薔薇の花で囲まれたかのような幸福感を感じている。

更に天蓋付きベッドには、絵師を雇って描き下ろした特製のアーチャー抱き枕が鎮座。秘密のリバーシブル加工付きでミイの帰りを待っていた。

身軽になった彼女はポフンとベッドに飛び乗ると抱き枕を抱擁しながら横になる。

その姿は炎帝という二つ名をまったく感じさせない、少し幼児退行した少女の顔で頬を緩ませた。

「はあ…好き、好き、好き。アーチャーさんは本当に理想の男の人だよ」

思い返すのは出会の頃からつい最近まで。

そう、私はアーチャーに出会った瞬間から男性としての魅力に惚れてしまっていた。

一人寂しくソロ狩りをしていた時に現れたヒーロー。見た目から少しだけ怖いかもと思っただけど全然そんな事はなくて、むしろ時間が空けばいつだって私を気遣いフオローや相談に乗ってくれた。

人前に出るのが苦手で、そんな自分を忘れる為にロールプレイをしてみたいと打ち明けてもあの人は笑わずに、寧ろ自分も演じてプレイしていると、バレバレな嘘で勇気つけてくれた優しさ。

あんな素晴らしい人なのに演技なんてあり得ないよ。

彼はその分け隔てない性格から他の女に勘違いされて、迷惑を被る事も多い。しっかりと管理してあげないと負担を掛けてしまう。

その為に、私の演技を勘違いしたプレイヤー達に祭り上げられて結成した炎帝ノ国を一大ギルドまで発展させて支援体制を整えた。

群がる敵をあらかじめ排除し、二人きりになる機会さえ増えれば自然と私だけを見てくれるはず。

だけど、さつきまでの性悪女が頭を過ぎり、無意識に抱き枕を強く握り込んでしまう。彼のパートナーを自称する、メルトリリス。

大空洞で『ボスモンスターを演じていたチート使い』は運営にBANされる事なく、今も彼に付き纏い自室すら共有して私を苛む。

本人はもうチートを使つてないと豪語するが、その理不尽な強さに疑いを捨て切れず、毎日のように違反報告を運営に送つて総数が500を超えても何のお咎めも受けていない。

正直、強くなる為と渡された『原初の火』もチートアイテムだと疑っているけど、こちらは問題ないと驚くほど返信が早かった。

一刻も早く使いこなしして彼の横に並び立ちたい。その想いだけ今日まで頑張つてきたけど、もう…いいよね？

そろそろ『ご褒美』が欲しいなあ…。

「えへ…えへへ…」

空中に浮かび上がるコンソールを操作してファイルを開く。

そこにはアーチャーさんが何月何日何時何分何処で何をしていたのか、事細かにリストアップした私の集大成だ。

勿論、どんな言葉を使ったのか一言一句聞き逃さないよう、常に動画撮影とメモは欠かせない。交代で監視している団員にもそれは徹底させているのでNW0の世界で一番彼に詳しいのは私だと断言出来る。

そのせいもあって、断片的に入手した多くの情報から彼の所在がかなり絞り込めた。

普段利用しているというスーパーは幸いにも個人経営だったので、名前をネット検索

で調べれば該当するのは一店舗のみ。その周辺地域で住んでいるのは間違いない。

そしてバス通学という話から、スーパーと付近の住宅地から最も近い学校を発見。口グイン履歴から通学時間を割り出して、どの路線を使用しているかも把握した。

後は直接バスに乗り込んで跡を尾ければ住所が特定できる。

「もうすぐ会えるね！ アーチャーさん」

約束はしていないけど、きつと彼は私なら受け入れてくれるはず。もう既に新幹線のチケットを用意して準備は万端だ。

下校時間に合わせてバスに同乗し、ご実家に挨拶させて貰う予定だ。

将来の家族になるのだから今の内から仲良くするのは我ながらいい案だと思っている。もしかしたらお泊まりの可能性もあるのでこっちの準備も整えよう。

「あはははっ、楽しみだなあ…今日は寝れるか心配になっちゃう」

遠足を前にした子供みたいだけど、私は胸のトキメキを抑えられずにいた。

「どうしたのよ？ 急に身震いなんかして」

下校時刻を過ぎ、いつもの三人で帰り道を歩く中、青年が急に立ち止まって辺りを見回した。

どうにも馴染みのある鋭い視線を感じて気になったという。

横を歩くサリーは疑問符を浮かべ、最近寝入りが悪いというメイプルは彼に背中を押されてユラユラ揺れるだけ。視線に心当たりが無い彼は頭を捻るが、周囲に怪しい人影はない。

「よく分からないけどバスに乗り遅れちゃうわよ。ほら、ちゃんと自分で歩くー」

「うう…だつて眠いんだもん…」

急かされてようやくやくメイプルが歩く速度を上げる。青年としては一本くらい遅らせても気にしないが、どうも彼女達は第四回公式イベントで上位入賞を狙っているらしく、レベル上げやスキルの取得を目指して頑張っているので一刻も早くプレイしたいのだろう。

そのせいで寝不足になっては日常生活に支障を来すと注意しているが、一向に改善の兆候は見られず、今日も介護がなければマトモに歩くのも億劫の様子だ。

ただしNWOにログインすると、途端に元気になるので実は仮病を疑っていたりもす

る。

青年はこのまま寝不足が続くなら、昔のように朝方迎えに行くかと冗談めいて提案した。するとメイプルの顔は喜色満面に染まり、大賛成とばかりに相槌を打つ。

「ホントに!? やったあ!」

「じゃ、じゃあ私も心配だから迎えに行くわね!」

何故かサリーも同意して、あれよあれよと明日以降の登校時間が勝手に変えられていく。どうも寝不足そのものを解消するつもりは無いようだ。

テンションが高いままバス停に向かう二人を追って苦笑しながら道を歩く青年。

途中で腕に抱きついてきたり、謎の手相占いと称してボディタッチが多いのはいつもの事である。ただし、少し間違えば痛い目をみるので、内心ヒヤヒヤしているのは内緒だ。

バキンッ

小さい何かが割れる音に気が付いて、青年が足を止める。

おもむろに振り返るといつからそこに居たのか、手元のスマートフォンを慌てて操作する少女がいた。

目出し帽と襟の大きいコートで顔がよく見えないが、必死にスライドやタップを繰り返して動作確認しているので、音の原因は間違いなく彼女だろう。

困った女性を無碍にするのも気分が悪いので、青年は自然な動きで近づき声を掛けようとする。

しかし一步踏み出すより前に、両肩をがしりと掴む二人の手。

「……バスはこっちだよお兄ちゃん」

「……よそ見寄り道は厳禁だから。……分かるよね？」

はい…。

囚われの彼は、美少女二人に引つ張られるという傍目からすれば両手に花の状況だが、思いつきり抓られているので痛みを我慢するので精一杯だ。

早速の痛い目に、親切を働こうとして何が悪いと反論するが、それで何人勘違いさせたと身に覚えが無い話をされる。

本気で自覚がない様子に幼馴染と友人は深くため息を吐いて、青年を強制的に前へ前へと歩かせる。

本気で抵抗するのもみつともないので、心の中でスマホの少女に謝罪しながら早足でバス停へと向かった。

「そんなの…嘘だ」

その様子を悟られないよう覗き込んで見ていた彼女は、細い指を握り締めて睨む。

視線は二人の少女よりも、むしろ青年の方へと真つ直ぐ突き刺さり、射抜かんばかりの眼光を湛えている。

「そういう…関係なの…？ 私の事は遊びだったの？」

あの人だと、一目で気付いた。

あの人なら、きつと受け入れてくれる。

あの方は、私だけを見ていたはず。

あの人だって、私を愛してる。

なのに、なんでメイプルとサリーなんかと親しそうなの…？

悲観と憎悪が入り混じり、自分でも信じられない規模の感情の洪水に意識が上手く保てない。

裏切られた。裏切られた。裏切られたー。

確かにNWOのゲーム内では青年の事を良く知っているのはミイである。

しかし逆に言えばそれはゲームだけの話であり、リアル側での付き合いは完全に想定外だった。一方的な全能感が消え失せて、沈み込むような喪失感が心を汚泥に引き摺り込む。

なるが、その分一緒の時間が増えると正しく柵から牡丹餅の気持ちだった。

特に最近はずつすらと本心を伝えた事もあって、青年との関係がステツプアップするのではと期待感が高まる。

そんな恋する乙女丸出しのサリーだったが、バスが進むに連れて違和感を感じるようになった。

車内に異常な点は見られない。彼の様子も問題無い。なら何故、こんなに警戒心が顔を出すのか。

女の勘を信じて視線だけ動かす。するとバスの後方、車を二台挟んだ距離を走るタクシーの存在が目止まる。

距離が離れている為、視認しにくいが停車の度にこちらも止まるので、気になってみれば一目瞭然。明らかに尾行されている。

もしかして…。

他の乗客に有名人がいるはずもなく、そのターゲットが彼である保証は無い。しかし念には念を入れるべきだとサリーは判断した。

「ごめん。今日はちよつと用事があるからここで降りるね」

理由を尋ねる青年に言い訳をしてから、次の停留所で降りるとスマホをいじる真似をしながらタクシーを見張る。

バスが発車し、やはりそのタイミングで走り出車内の様子を持ち前の動体視力で見切った。

運転手は問題無い。しかし乗客がついさつき青年が気にかけてようとした少女その人だった。

しかもサリーだからこそ、分かる違和感の正体。隙あれば自分も陥る悪癖の気配がすれ違いざまに漂う…。

——あの女は、彼に危害を加えようとしている。

青年は何事もなく家に着いた。

といつても最寄りのスーパーで買い物をする為、私服に着替えて身支度を整えるだけの一時帰宅だ。

制服のままだと何かと目立つ上、汚したくないのもある。手縫いで作ったマイバッグを掴んで、ネットの割引情報を確認しながら階段を降りる。今日は鮭とキャベツが安いので安直にちゃんちゃん焼きにするか、奇をてらって回鍋肉風でも良いかもしれない。

いやむしろ一日味噌床に漬けて焼き物も有りだろう。

趣味と実益を兼ねた料理に関して並々ならぬ拘りを持つ青年は、一階に降りて、ふと思う。

買い忘れが無いよう冷蔵庫のチェックをするべき否か。

そこで彼は念の為、足を向き直してキッチンへ向かう。

簡単な手間で面倒が省けるならした方がいい。そう思い至るとほとんど彼専用スペースになっている場所へと暖簾を潜って入る。

そこには、机に力なく倒れ伏す母と妹の姿。

姉妹と間違われるくらいに似ている年齢詐欺な二人が、朝まで徹夜テンションで元気だった母と妹が、ピクリとも動かない。

薄暗い部屋に夕暮れの陽は差し込まず、証明の灯りも無いので細かな表情は分からないが、苦しみに耐える顰めた顔つきというのは分かった。青年は一瞬惚けてから、ゆっくりとキッチンに入り込むと気付かれないよう新聞紙を丸めて棒代わりにする。

そこで目撃する周りに散乱する有り得ない物。それは

「も、もう食べられない……」

菓子パンの空き袋だった。

青年は暴食の限りを尽くした似た者親子の頭を叩いて、説教モードに入った。

買い置きのパンは朝食か、おやつの際に一人一個まで。賞味期限はまだしも消費期限切れには手を出さない。食べかけを放置しない。封を閉じる。包材をそこら辺に捨てない。などなど。

どちらが親か分からない立場関係だが、ポンコツ二人の世話を昔から焼いている青年にとつて、こういったお小言は日常茶飯事である。

その様子なら夕飯は要らないと話せば、いやまだ食べられると宣う。

そんなだから腹が出るんだと脅すと、そこがチャームポイントだの愛らしいだの言い訳を始める両者。

確かに母に関しては今でもゲームチャンプに君臨し続けるプログラマーだが、妹はただの引き籠もりだ。

無駄にアタマが良いので義務教育が終わったタイミングでゲーム三昧。しかし通信教育だけで既に大学卒業の資格を持っている才女。

ただし何度も言うが、見た目が残念すぎてエリート感は全くない。

大きな丸眼鏡が可愛いと豪語するが、いつも鼻で笑う青年。

やがて気が済んだのか、冷蔵庫の在庫チェックと菓子パンの買い足しを決めてキツチ

ンを出す。

背中に今日は牛肉が食べたいと声が掛けられるが、無視して靴を履き変え、家のドアを開く。

空模様はいつの間にか夕暮れから夕闇へと明るさを変え、辺りは一層暗くなっている。

そして、街灯が順番に光を灯して道を照らしていく。

スポットライトのように一つ、二つ、三つ。

そして

青年の自宅前も明るく光り、

一人の少女が目の前にいた。

「裏切り者！」

どこかで聞いた声と共に、
閃く白刃が青年の胸へと突き刺さった。

弓兵不在とヤンデレの献身

集う聖剣ギルドホーム『チエイテ城』執務室。

ギルドマスターでありNWO最強と名高いペインは、数多い団員の中から中核戦力として期待している3人を集めて会議を開いていた。

「さて、皆に集まって貰ったのは他でもない、第四回イベントについてだ」

「ん？ ついこの間、情報収集に努めるとか言ってたやつか？」

「もう進展があつたんだ」

「ワザワザ俺らを集める必要があるって事は問題発生かね」

重斧使いのドラグ、多重魔法のフレデリカ、神速のドレッド。

机を挟んで椅子に腰掛けるペインの前に並んだ三人はそれぞれ別の反応を返す。

そして彼らのまとめ役である彼は単刀直入に切り出す。

「イベントに挑む上で要注意対象としていたメイプル、サリー、アーチャーの引退説が流れているのは知っているかい？」

「え…嘘でしょ!？」

いの一番に食いついたのはフレデリカ。第2回イベント以降、ネットの噂でよろしく

やっているのと勘違いしてから接点を持たないようにしていたが、予想外すぎる展開に思わず声を張り上げた。

その剣幕に若干驚くペインだったが、状況を共有する為にも話を続ける。

「まず始めに3人共ログインすらしていない。しかもまったく同じタイミングで。そして炎帝ノ国メンバー…仮にDと呼ぶ人物からアーチャーが事件に巻き込まれたとの情報が流れている」

「じ、事件…?」

「ああ、どうも彼らのクラスメイトらしくてね。詳しい話はプライベートに当たるから臆気なんだが…アーチャーが危篤状態に陥って予断を許さないそうだ」

「うげ…マジでヤバイ話なのかよ…」

「メイプルとサリーも並々ならない関係者という事で、ゲームする暇など無いのだろう。言葉は憚れるが最悪の場合はログインどころか…」

「…話は分かったからよ、そういうのは明言を控えようぜペイン。フレデリカをよく見ろよ」

ドレッドの指摘でハツとした彼の目に映るのは、明らかに憔悴した様子で立ち尽くす姿だった。

本人は事実確認のつもりで話したが、知り合いがいる前でする話題では無かったと今

更ながら後悔する。

「すまない、俺の浅慮だったようだ。ただ彼の容態が回復する場合もあり得る。気に病みすぎて君まで体調を崩さないようにしてくれ」

フレデリカは小さく言葉を返すが、心ここにあらずといった様子でマトモに話を聞き分けられる状態では無いだろう。

3人組と特に接点が無いペインとドラグはそれほどでも無いが、第1回イベントでまんまと策略に嵌められたドレッド、いつかの再戦を望んで戦いを重ねていただけに同情と同じくらい虚無感を感じていた。

「言うまでも無いが、この話はトップシークレットだ。公言だけは避けてくれ」

ペインの一言にそれぞれが頷く。

その後、彼らはバラバラに退出して執務室に残るのはペインのみ。暖炉で燃える赤い火を背中に受けて物思いに耽る姿は金髪美形の容姿と相まって眉目秀麗という言葉が相応しい。

しかしその表情は真面目というよりも、苦悩する顔つきで何かに耐えているようにも見える。

「……彼ならば、或いはと…思っていたんだが」

彼以外、無人の室内に声が響く。

片手でコンソールを呼び出し、手慣れた指使いで自身のステータスを確認すると、そこに並ぶ高い数値以上にじつと見つめる項目がある。

【宝具】

ランタ：A+

種別：対軍宝具

レンジ：20～40

最大補足：300人

「なぜ、こんな規格外が存在するのか、必要なのか。…恐らく原因は君にあるのではないだろうか？ 少なくともアレはそう思っているようだが…」

誰よりも強くなりたい。負けず嫌いの彼はただひたすら己を鍛え上げて【宝具】を得るに至った。そして『ある人物』に声を掛けられる。

最も強くなりたくはないかと。

提案を持ち掛けるそれに、彼は迷いなく断わってみせた。

研鑽とは自分自身の為に行うものであり、他者の介入などあって良いものではない。唐突に横からしやしり出て、目的の為には手段を選ばない気質は、特に彼の神経を逆

撫でた。

その精神性を心底馬鹿にした人物は、徹底的な煽り文句や脅しを駆使するもペインは一切揺るがない。そして言葉の節々でアーチャーやメイプル、サリーと思わしき名前が上ったのを彼は覚えていた。

「事件が無関係でないのなら、彼らは何かしらに巻き込まれている……もしくは黒幕側なのか。見定めなければいけない」

彼は全力で取り込んでいるこの世界を。

何に変えても守りたいと、心に誓っているのだ。

人工呼吸器と最新の医療器具だという電子バイザーに繋がれて、常にバイタルチェックを受けているのは一人の青年だった。

昨日未明、自宅を出た瞬間に刃物による刺突を受け、大量出血。幸い自宅内にいた母

親の通報が早く一命は取り留めたものの、原因不明の昏睡状態に陥り、未だ意識は戻らない。

しかも犯人は未だ捕まっておらず、周辺地域では通り魔による犯行も考慮して、厳戒態勢が敷かれるほど事件は大掛かりになっている。

それだけの騒ぎに囲まれても青年はまったく目を覚まさず、懇々と眠り続けて一週間以上が経過していた。

ベッドの横では普段の自堕落さを全く感じさせない、憔悴した顔で看護している母親の姿。

青年の父はゲーム好きであつても仕事に就くサラリーマンであり、夜遅い時間帯にしから見舞いに来れない。

もう一人の家族である妹は、何だかんだお兄ちゃん子だったせいで事件当時の惨劇を直視して卒倒。ゲームもプレイせず寝込む日が続いている。

よつて一日の大半は母親と過ごす事が多いが、毎日夕方が近くなるとすすり飛ぶように現れる女の子達がいる。

「失礼します…」

「おばさん、ご飯買って来たよ」

ありがとうと力なく笑う姿に、普段を知るメイプルとサリーは胸を締め付けられる。

何よりベッドで横たわる青年の安否が気になって、まともに学校生活を送っているとは
いえないが、周囲に諭されて登下校だけは済ませている。

折り畳み椅子を持ち出して青年の側に並ぶ。

「ねえ、お兄ちゃん。もう第三層が解放されたし、イベントも近いんだよ？ 早く起きて
遊んで欲しいよ……」

メイプルの顔色はかなり悪い。元から睡眠不足の兆候はあったが、今回の事件で睡眠
の質も悪くなり、毎日をうなされるように過ごしている。

無言で彼の少し冷たい手を握るサリーも同様だ。三度の飯より好きなゲームはおろ
か、彼に秘密で集めたコレクションを愛でる事もなく、頭の中は安否の心配で一杯だ。

二人は無反応な青年をあえて気にしないように、いつものような口調を心掛けて話題
を振るが、精彩を欠いた声量は物悲しく聞こえるばかり。

どうしてこんな事になってしまったのか。

サリーはあの日、確かに不審人物を見た。タクシーに乗る目出し帽に高襟コートの少
女を。

しかし嫌な予感に従いすぎて、すぐにバスから降りたのが災いした。どれだけ全力疾
走しても、自動車の速度に追いつけるはずもなく、途中から最悪の事態を想定して青年
の帰宅ルートをショートカットで駆け抜けた。

オレンジ色の夕暮れがやけに眩しく、前が良く見えない。それでも彼の為に足を動かす。そして悪い予感的中するように、自宅前には先程の少女が右往左往しながらインターホンを押そうとしているではないか。

呼び止める事も忘れて猛然とした勢いのまま、少女に飛び掛かろうとする。

許さない、許されない、許されるものではない。

他の何においても、青年を害して良いのは自分だけなのだ、教え込んでやる！

サリーはこの時、確かに肩を掴んだ。

「ん、お客さん?」

自責の念に駆られていたサリーの耳に、メイプルの声とノックの音が入る。

どうやら悩みすぎて結構な時間が経過していたらしい。窓の外はあの日のように夕闇に包まれ始めていた。

そして母親の許可を得てメイプルがドアを開けると、そこにいたのは一人の少女。

今しがた思い浮かべた、目出し帽に高襟コート姿。

それを認めたサリーは即座に反応して立ち上がり、声を上げた。

「来てくれたのね、ミイ！」

「うん…でも、私…直接アーチャーさんを見るのが怖くて…全然来れなくて…」

「その気持ち分かるよ。でもさ、ちゃんと生きてるんだから会わないと損だよ？　せつかく逃げないんだからさ」

「そ、そうだよね。この人、すぐ目移りするもん…」

久しぶりに見せる茶目っ気のある表情を浮かべるサリーに、美人の眸に収まる綺麗顔をプクリと頬を膨らませるミイ。

キョトンとする母親とメイプルだが、どうやらNWOで青年とかなり親しいフレンドと紹介されて納得する。そういえば事件当時に居合わせた子だったと。

そう、

ミイとサリーは事件当時、二人で話し込んでいたのだ。

そもそも、ミイはかなりの引つ込み思案であり喫茶店でお茶を楽しむだけでも団員を総動員するレベルのビビリである。

サリーが現場に間に合ったのも、インターホンを鳴らすという行為だけでもテンパって、ウロウロしていたからだ。

興奮が乗じて直接逢いに来たは良いが、真正面から会う勇氣も無く怪しげな格好に変装。

更に仲の良さそうなメイプルとサリーを見て、彼が最初に話していた『幼馴染と友人から離れてゲームを楽しみたい』という事情から勝手に仲違いをしていると思いついていた。

嘘をついた。騙された。裏切られた。

だけど、その程度で彼から離れるほど、この気持ちは軽くない。

たとえ何がまた受けようと私は受け入れてみせるし、嫌われたからハイ終わりなんてのは認めない。

私を好きになるまで付き纏えばいいんだから…！

むしろ不幸なのは敵意⇨危害を加える、と自分の性癖で暴走したサリーによって押し倒された時のミイである。

完全に血走った目で息を切らせながら掴み掛かる姿は完全にホラーだった。

その話を聞いて、母親は頬をヒクつかせながらも続きを促す。

どうやら息子のプレイボーイぶりは、年齢と共に右肩上がりのようだとため息を吐きながら。

その後、青年の話題で互いに盛り上がり、事件が起こるまで二人で話し込んでいたら

しい。

当然、犯行現場近くにいたので危害を加えた人物を見たはずなのだが、どうにも歯切りが悪い。

何せ相手が『黒い人影で音も無く現れた』のだから。

呆然とする二人とは逆に、入れ違いで現れた母親は倒れ伏す息子を認めると即座に救急車を手配。応急手当てで急場を凌いだ。

「暗くてよく見えなかったの？」

「…正直、夜目に慣れ始めた所に街灯が点いたからハッキリとみたわけじゃないわ、でも…」

「本当に『人の形をした影』だったの。まるでNWOみたいな世界から抜け出してきたモンスターみたいに」

こんな事を警察に話して正気を疑われるか、まともに取り合って貰えないかの二択だろうと誰にも話していなかった。

しかし旧知の仲であるメイプルと母親には事実を話しておきたいと前々から思っていたらしい。

こんな事を話されても困るだけだろうと、謝罪するサリーだったが、困惑するメイプルとは逆に、母親は何か真剣に考え込んでいる様子だ。

やがて言葉を選ぶように確認する。

「その影…もしかして、『黒いノイズ』みたいじゃないツスカ？」

病院内の面会時間が終わり、親族以外が退出させられる時間になっても母親は病室にいた。もう30分もしない内に旦那が忙しい時間を縫って顔を見せてくれる。

「……一度は絶望した人生だけど、家族に囲まれてアタシは今も生きている。」

「ねえ息子くん。こうやって寝てる君を眺めるのは何年ぶりツスカね…。情けない母親で迷惑ばかり目立つけど、ちんまい頃はよくこうしてシーツを掛け直したりしてたんよ。」

大きな眼鏡から覗く瞳は、悪戯げに歪みながら慈愛の光を湛えていた。

「……むかし、昔のボクの体験談。今でも覚えてる？」

昔を懐かしむように、沈黙したままの彼をどこまでも優しく撫でながら語る。

「お父さんとお母さんが死んで、何もかもが嫌になって、どんな願いでも叶えてくれるって話に乗ったら、訳わかんないくらい恐ろしい場所で戦わされる羽目になったお話」

ほんの小さな自信は、本当の天才や規格外の化け物に一瞬で踏み潰されて、震えながら死を待つしかなかったあの時。

何の価値も無く、何もせず。諦めて、諦めるのが怖くて引き籠もった校舎でのひと時は今でも鮮明に覚えている。

「途中で現実突きつけられて、戦わされたけど。やっぱり全部諦めれば良いって自暴自棄で迷惑掛けまくったんす」

ただの凡人が癩癩を起こしただけ。そう判断されて切り捨てられても仕方がなかった。

「でも、本当に死にそうって時に、助けてくれた人達がいたんす。無駄に元気で、無駄に声がかくて…本当は誰よりも不幸な坊さんと、無口で愛想が悪くて誤解ばかり招く…凡人に過ぎない僕には、全くもって不釣り合いな大英雄」

どちらも、ありのままの自分で良いと、命を持って教えてくれた大恩人達。今の姿を見せたらきつと度肝を抜くに違いない。

「でも、それはもう無理なんすよね…。二人とも居ないのに合わせて、地球に帰ってみればビックリ仰天こは『並行世界』。でもお父さんとお母さんも既に居なくて、僕も行方

不明扱いになつて驚いたツス」

幸いパーソナルデータはまったく同じだったから、本人だと認識して貰ったけど、あそこを乗り越えなければ人生は全く方向性が変わっていただろう。

未だに何故この世界なのかは分からない。けれど。

「何事も 間が悪かつたと思えば受け入れられる。何かを為さなくても、何かを求める権利までは奪われない。…そのおかげで息子君と娘ちゃんに恵まれて、僕は本当幸せ者ツス」

だから、もうここまでで良い。

もう充分に施しは受けたのだ。そろそろ自分もそちら側に回らなければならぬ。

「それが親、つてやつなんだから」

そつと胸に手を当てて、一心に乞い願う。

これ以上は息子を苦しませたくない。うまくいくかなんて保証はどこにも無いけれど、何故だか確信だけがある。

あの時。月の聖杯戦争で唯一の生還者となつた彼女には、とある理由があつた。

インドに名高き大英雄が纏いし黄金の鎧。

その力によつて、ムーンセルによる魂の分解すら退けて生き長らえた。

それは今も消える事なく。むしろ現存する宝具という規格外の存在のまま、彼女の中

で眠り続けていたのだ。

身に付ける者への凡ゆる外的干渉と死を無効化する効果ゆえか。加齢による老いすら寄せつけないのは予想外だったが、未練はない。

「だから……」

だから、もう一度だけ奇跡を。

一人の人間として見てくれた私のサーヴァント。

貴方のお荷物でしか無かったけど、どうかワガママを聞いて欲しい。

真正正銘、これが最後の願いだから……」

「……カルナさん、息子を助けて……」

かつて、

ジナコ・カリギリと呼ばれた女性の身体が黄金の光を放つ。

やがてそれは神々しくも収束し、輝く球体となって青年の胸へ導かれるように吸い込まれていく。

そこから生じる変化は劇的だった。

不動の身体は脈打つように跳ねて頬にも赤みが差し、そしてドイツ人のクォーターである彼の髪は、亜麻色から絹のような白髪へと染まる。

耳に現れたほんの小さな飾りはお守りのように暖かく輝き、誰の加護を受けている

か、ジナコにはハッキリと分かった。

こうして英霊カルナの宝具【日輪カよ、具足ヴァーチャクンとなれダーラ】は今、青年へと正式に譲渡されたのだ。

四者集結とヤンデレのドキッ! 水着だらけの慰労会 （ポロリもあるよ）

「…で? なぜ私は水着女性に囲まれながら、拘束されているのかね?」

今までのシリアス展開は何処へやら。一夜で完全回復& a m p ;白髪化で医者達を騒然とさせた死傷事件から2週間が経過。身体は全快しても検査入院は長引き、ようやくN W Oに復帰したアーチャーを待っていたのは楓の木主催による慰労水着パーティーだった。

復帰祝いも兼ねた催しなら分かるが、何故水着なのか聞いても誰も教えてくれない。というより主賓が後ろ手に縄を掛けられて、正座している姿はむしろお白州に晒された罪人である。

彼を囲む四人のうち若き少女は、じっと見下ろして優に10分が経過してからようやく話し始めた。

「あのさ。本当に自覚ないの?」

「? どうしたサリー。何か私に落ち度でもあったというのかね」

「アーチャーさんはもう少し周りを自重すべき思うの。…あんまりお痛が過ぎると、そ

の。駄目なんだよ…ッ」

「分からん…なぜミイまで私を責めるのか、さっぱりだぞ…」

「お兄ちゃんも反省！ もう好き勝手したら許さないんだから」

「メイプルに…注意された、だと…!?」

「その悲観に暮れる表情。やっぱりアナタはシスコンで合っていたようね」

サリーとメイプルは、イズに用意してもらった健康的なスポーツタイプの色違い水着を着用した仲良し仕様。凹凸が少ない体型が似ている為、まるで姉妹のように見える。

ミイは常に赤面するほど恥ずかしがっているにも関わらず、着ているのは真っ赤なビキニ水着だ。豊満まではいかないが、出るところと引つ込むところはキチンとメリハリがついているので、この中では一番セクシーといえる。

そしてメルトリリスといえば、パーカーを羽織ってボディラインすら見せないお忍びの服装。隙間から覗く肌色の面積からして内側は水着だと思われるが、ここまで脱ぎようとはしていない。

アーチャーは彼女らに囲まれ、何故かメルトリリスからゲシゲシ蹴られているので地味にHPが減っていく。

因みに彼は巨乳好きなので、ここにミザリーがない事に大変落胆しているが、素直に吐露すると最低4回は死ぬ。

そんな困惑する様子を他所に、因縁のある二人の視線は互いを認めて牽制し出した。

「……まさか、ここで出会すとは思わなかったわね、『お姫様だっこ』さん？」

「……ええそうでしょうとも、私だって予想外ですもの。貴方がここまで攻勢に出るなんてね」

バチバチと火花を散らすようにメンチを切り合うサリーとメルトリリス。

出会いは第2回イベント。当時は事情もよく分からず、追う者追われる者だけの関係だったが、こうして対峙してみれば明らかに互いが共通の目的を持って、彼に近づいているのが理解できた。

メルトリリスはハイヒールでアーチャーの膝を貫いて啖呵を切る。

「言うまでも無いけれど、これは私の所有物で先約済みなの。貧相な胸で誘惑して、托卵されては困るのだけど」

「托ら…!? 誰が貧相よ! アンタだって変わらないでしょ!」

サリーは短剣をアーチャーの肩に突き刺して、憤慨を表すように握り込む。

「私の胸は無駄を削ぎ落とした造形美よ。発達不良のお転婆風情には理解出来ないかしら?」

「ふんだ! ペンギンのパーカーなんか着て、本当は身体に自信が無いから隠してるんでしょ」

「これはリヴァイアサンよ！」

ザクザク、ブスリ。

ただの鬱憤払しの道具と化したアーチャーは、消え入りそうなHPゲージの残量を見ながらリスポーンによる拠点復帰を期待したが、その横に控えているミイは優しい顔でポーションを使用。強制的に生き残らせる。

「ミイ、ミイ……？」

「……もう少し頑張れるよ？ アーチャーさんなら」

頬を染めながら瞳を濁らせるといふ恐ろしい顔芸を披露しながら、この拷問から離してくれそうも無い。一番大人しかった彼女が何故……。初々しい出会いの頃から何が変わったというのか。

最後の頼りの綱を探して視線を彷徨わせると、ドンと背中に衝撃。そして振り返る暇もなく首筋に当てられる『黒い短剣』。

「おにくちゃん！ ここでお話 しようね」

アーチャーの肩に顔を乗せてご満悦の声色だが、突き付けられる短剣の閃きが眩しい。それで傷付けられても微量のダメージしか負わないが、彼女の狙いは間違いなく【パラライズシャウト】による麻痺拘束なので、無闇に手を出せない。

無意識かつ的確にヤンデレとして成長を続けるメイプルに、冷汗が止まらないアー

チャー。

美少女四人に囲まれて見た目は天国。中身は地獄。

死に戻りも、逃亡も封じられた彼はまさに籠の鳥だった。いやむしろ籠では無くてアイアンメイデンに閉じ込められた気分である、

そんな様子を物理的にも精神的にも、遠目で見守るしかない『楓の木』残りのギルドメンバー達。

「アイツが女誑しなのは知ってたけど、ここまでとはね。因果応報ってやつじゃない？」

イズは笑い飛ばしてケラケラ笑う。

「噂程度の理解だったが、目にするると凄まじいな……。やはり私には恋愛関連は早いようだ」

間違った恋愛観を植え付けられるカスミ。

「あはは。僕も見てる分には面白いけど実体験はゴメンだなー」

カナデは面白がっているが、一步引いているので本能的に恐怖を感じているようだ。

「やっぱり女の子を誑かしてるじゃないか。一人に絞ればこんな事には……いやなるかもしれないけど、アイツの態度は気に入らん！」

義憤に駆られながらも、ちよつと怖いと思うクロム。

「やつぱり悪い人だよお姉ちゃん。辞めときなつて…」

「でも言い寄られる分、魅力的つて事だと思うの。あとリアル側で白髪のドイツ人クォーターつて絶対格好いいよ。お世話してほしい…」

「それは分かるけど、中二病は私達にはまだ早いよ!」

ヤンデレ予備軍に足を突っ込んでいた姉を何とか軌道修正しようとする妹。ユイマイ姉妹は蚊帳の外にも関わらず、盛り上がっていた。

「そもそも勝手に私達の復帰祝いに割り込んで、我が物顔で主張しないで貰える? どんな関係か知らないけど部外者はお呼びじゃないの!」

「はあ…これだからお子様は嫌いなよね。…でもそうね、私とアーチャーの関係を表すなら言葉の一つも使わずに魅せてあげましょう!」

「まさか…! 辞めるんだメルトリリス、こんな業火が燃え盛る事態にガソリンを撒くつもりか!」

嫌な予感というか、確実にアレだろうと思いつたアーチャーは必死に止めようとして短剣と棘を無視して膝立ちになるが、首筋に炎の長剣を添えられて動きを止めざるを得なかった。

「どうせなら、皆んなに見て貰った方がいいよ? ね?」

これから何が起きるのか知っているミイは、今までより遥かに滑らかな動きで首切り

の態勢を取っている。

害する気持ちは無いが、逃すつもりも無い。彼女の心は事件を通して強くなったのだ。…彼に対してだけ。

そしてメルトリリスがひけらかすのは、普段は決して見せない手を袖から出して、左の薬指に嵌る水晶の指輪を掲げた。

その位置。そのアクセサリー。

一瞬で、意味を理解したメイプルとサリーは同時にスキルを発動する。

「【ヒドラ】！」

「【大海】！」

即死級の毒が溢れ出る水で薄められて、激痛を伴う継続ダメージのコンボ技が成立。アーチャーを閉じ込めた。

そして阿吽の呼吸ですぐ死なないうよう、HPポジションを湯水の如く使って生き残らせるミイ。

新たな拷問が生まれた瞬間である。

メルトリリスは笑みを浮かべて圧倒的優位を確信しているが、サリーは今まで温めてきた爆弾発言で覆そうとする。

「そ、そんなデータより私の方が凄いや物持ってるんだから！ 四季折々の古着一式とか、

脱ぎたてを真空パックした下着とか！」

「いやそれは羨ましくないわ」

「何で!？」

やっぱりズレた感性のサリーは自爆して塞ぎ込む。

幸い盗難されまくっている本人は、水球に閉じ込められて生きるのに

精一杯だ。とても耳を傾けられる状態ではないだろう。

その内、ポーシオンを投入しすぎて無毒化された水球からアーチャーが這い出てくる。

ヒートアップするサリーとメルトリリスを尻目にミイに背中をさすられて、ようやく一息を吐く。

「つい先日まで重病人のはずだったんだがな…」

「ふふつ、でも助かって本当に良かった」

「……何度も言うが、気に掛けてくれてありがとう。この恩はとりあえず、次のイベントで返させて貰おう」

「ん、期待してる」

ようやく朗らかに笑ってくれたミイに安堵して気を抜くと、何気なく周囲を見回す。

岸壁に囲まれた入江は、人氣が無いにも関わらず、絶景のロケーションである。リア

ル側ではそろそろ寒くなってきたのでひと泳ぎでもしたい所だが、それが出来たらとつづくにやっていると自問自答する。

苦し紛れに視線を上げると、岩場の陰に隠れて金色のサイドポニーが揺れていた。

(あれは、もしや……?)

見覚えのあるシルエットに相手を思い浮かべるアーチャー。

その視線に釣られて、ミイも首を動かし

「炎帝」

無表情で焼き尽くした。

彼女は引つ込み思案な性格であり、その本心を向ける彼には気恥ずかしくて態度は軟化しているが、外側の殻を維持できる『外敵』には一切の容赦がない。久しぶりに見る炎帝の姿に衰えはないようだ。

「殺す気か!」

彼女は何と生きていた。

金髪の多重魔法使いであるフレデリカは怒り心頭のまま、入江の砂浜を踏み締めて近づいてくる。

「あらあの子、随分と根性あるわねー」

「…勇氣と無謀を履き違えるとは」

「ポーション投げとく？」

「まだいるのかよ……」

楓の木メンバーは完全にお通夜ムードで彼女のエントリーを見守るが、良い意味で空気を読まないフレデリカはビシリと四人に指を突きつけた。

「ちよつとアンタ達！ あんまりアーチャーを虐めるんじゃないわよ。自分にされて嫌な事は辞めましょうなんて、小学生でも教わる当たり前の事がどうして出来ないの！」
突然の忠告に目をパチクリさせる四人。

事件の関係者ではなかったフレデリカは、アーチャーが復帰するまで心残りを抱えたまま過ぎしてきた。情報収集係の団員がこの情報をリークして来なければ、未だに思い悩んでいた事だろう。

それぐらいには気に入った相手なのだと言確認した彼女は、目の前の少女達が俗に言う『ヤンデレ』だと断定して釘を刺しに来たのだ。

アーチャーと真正面から向き合いたい、彼女なりの誠意から出る行動であった。
(四人もいるとは思ってなかったけどねー！)

早速後悔しているフレデリカの前に、四人が並び立つ。

アーチャーは麻痺して動けない！

「随分と浅い闖入者ね。まるでひよこみたい」

「自分がされて嫌な事? そんな事してないわよ」

「むしろ付け回して欲しいくらいだし…」

「お兄ちゃんは何でも許してくれるよ?」

「嘘でしょ全員マジトーンじゃん!？」

手強いどころの話では無かった。

ぐぬぬ…と表情を歪めるが、実力行使は以ての外だ。全員がユニークシリーズ持ちであり、二つ名持ちの有名どころでもある。罷り間違つても四人相手に勝ち目はない。

「お、覚えてろよおおお!!」

捨て台詞を吐いてから、涙目で飛行用アイテムに乗って飛び去る。

負けるなフレデリカ。頑張れフレデリカ。たぶん君が最後の良心だ。

「さて…:…そろそろ断罪の時間にしましょうか」

これでひと騒動も終わりかと思いきや、悠然と戦闘態勢を取るのはメルトリリス。

両手を左右に広げると、ポコリと水球が生み出された。

「な…:何をやる気だねメルトリリス それにそんな力があるとは…」

「お忘れのようね。私を構成する三柱の神、その一つはリヴァイアサンよ。こんな水辺にのこのこ現れるなんて本当に隙だらけのお馬鹿さん。このまま波で連れ去ってしまおうかしら」

すかさず反応したサリーとミイが躊躇なく襲い掛かるが、水球二つに囚われて身動きを封じられ、ついだとばかりにメイプルも弾き飛ばされる。そしてアーチャーも逃す事なく水の鞭で雁字搦めにされた。

「うっ…やっぱりこの人嫌い…!」

「がぼぼっ! ゴボツ、ガルルルブブう!」

戦闘面でも相性が悪いミイはともかくとして、サリーは無駄に高い【水泳】のスキルで抜け出そうとする。その姿に「もつと女の子は貞淑にするべきよ」と手振りだけで海水を持ち上げて、洗濯機のように攪拌。徹底的に閉じ込めてしまふ。

「勘違いしているようだから、改めて宣言しておくわ。この男は私の物、私だけの世界で唯一のコレクション。つまりはお気に入りなのよ」

サクリ、サクリと砂を踏み、ゆっくりと分からせるようにアーチャーへ近づく。

そして今まで決して脱がなかったパーカーを捨て去り、水着姿を披露する。

自らの肢体を惜しげもなく披露する際どいハイレグと基調にしたドレス姿に、思わず視線が奪われる。

貯めて、貯めてからの解放。快樂のアルターエゴは、その手の駆け引きならばお手の物だった。

「……アナタが倒れて、私が心配しないとも思っただ? 一目惚れ程度の女じゃ情が

湧かないかしら? ……それでも今は構いません。元より……恋焦がれる、というのは慣れていきますから」

ゆっくりと見せつけるように、メルトリリスはアーチャーに歩み寄ると、そつと視線の高さを合わせて顔を近づけていく。

「!」

「ふわっ!?!」

唇と唇。男女の愛を直接伝えるコミュニケーションが、今まさに繰り広げられそうになっている。血走った目のサリーとグルグルさせているミイの瞳が、見届けるしかない状況に悶えて苦しむ。

その仕草をチラ見で鼻を鳴らすメルトリリス。悠々と距離を縮めて勝利を確信し。

「駄目エエエエエ!!」

「っ!?!」

金切り声の痲癩を上げたのはメイプル。

視線だけを移したつもりだったが、映る光景に目を見開いて即座に飛び退く判断を選ぶ。

直後、立っていた場所へ降り注ぐ暴力的な破壊の光。

砂浜を軽々と撃ち抜いて尚、止まらぬ威力で薙ぎ払うそれは、メルトリリスをどこまでも追尾する。

「チッ！ 妹分というから見逃してあげたのに、どうやら本気のお仕置きが必要なようね！」

その正体は、メイプルが最近手に入れた「機械神」のスキル。

右腕だけに展開された超威力のビーム攻撃は、リスクとして装備の破壊が前提とされるが、彼女の防具は全てユニークシリーズだ。「破壊成長」スキルが付与済みなので、瞬時に再生して強くなる。

まさに悪夢のようなシナジーと言えるだろう。

回避し続けるメルトリリスは、時間を掛けるほどに不利になると直感し、一度で勝負を決める事にした。

「睦み事を邪魔する野暮には、ご退場願いましようか」

ドロリと彼女の足元が海水ではない液体が溢れ出し、アイスクスケートを滑る滑らかさで、全ての攻撃を避けていく。

「私の蜜は万物を犯す『毒』。麻痺毒、致死毒何でも全て揃っているわ。死ぬほど痛いでしょうが、我慢なさい」

プリマの華麗さでバレエを踊り、ステップを踏んで軽やかに舞う。演目を魅せるように死角となる左側へ回り込んで、締めとばかりにつま先で蹴り込んだ。

「……【メルトウイルス】。さあどこまで耐えられるかしら？」

闇色に輝くエフエクトがメイプルを襲い、明滅し浸透していく。

アーチャーの記憶では恐ろしい効果を発揮する一撃が、確かに当たった。

「？」

「……メイプルは【毒無効】とVIT1000超えだぞ」

「この運営は馬鹿なの!？」

一同もそれには同意する。

「せめて上限値くらい設けなさいよ!　つていうか更に毒無効つて、私の攻撃何も通らないじゃない!」

「あー…そういうえば君はそうだったな」

メルトリリスの特性は「レベルドレイン」による自己強化と、「メルトウイルス」による弱体付与である。

相手を最低値に、自分を最高値にする事で圧倒的な蹂躞を可能にするのだが、メイプルにはそのどれもが無効化されてしまう。

「レベルドレイン」は冗談みたいなVITに阻まれて傷一つ付かず。

「メルトウイルス」は毒無効で括られて状態異常にならない。

ミイに対して絶対的なアドバンテージを取っていた彼女の天敵は、まさしくメイプルだったのだ。

「…何でメルトリリスさんは、お兄ちゃんとキスしようとしてるのかな?　かな?」

気を取り直して、天真爛漫が売りの彼女にしては珍しい曇り顔。…という生易しい表情で収まらない表情は日差し逆光に晒されて、瞬くように眼光が灯る。

「罰としてお兄ちゃんは私が没収するね?」

「くっ！ それでも…それでも私の拘束から引き？ がさない限りはどこにも…ひっ
!？」

「【捕食者】！」

メイプルの声に従い、地面から首だけを召喚されたのは甲殻で覆われた蛇のような生き物、それが2体。ニユルニユルと身をくねらせながら唾液を垂らしている。

醜悪なその姿に頬を引き攣らせたメルトリリスは、顎門を開いて喰らい付こうとする攻撃を全力回避した。

…粘液を滴らせるビジュアルに、大空洞の一件を思い出してトラウマになっているらしい。

そして彼女を排除する事だけに注目したメイプルは気が付いていないが、【捕食者】の行動は『一切制御不能』なランダム攻撃。メルトリリスが飛び退けば、必然的に間合いの中に残るのはアーチャーだけである。

「「「「「あ」」」」」」

グパアと大口を開いた捕食者は、彼の頭部を丸ごと包み込み。

ポロリと首を食い千切った。

兄妹恋愛とヤンデレの被害妄想

「これはきつと夢だ。」

「ごめんね、楓……。私はこの人と結婚するの」

親友の理沙が、綺麗なウエディングドレスを着て私に告げる。

その横には大好きなお兄ちゃんが寄り添うように並んで密着していた。

そんなのは見た事ない。そんなのはあり得ない。

迫られる事はあっても、決して自分から女の人にアプローチを掛けないのが、お兄ちゃんなのに。そんなのまるで、理沙だけが特別みたいに映る。

「……どうして二人は、私から離れるの？」

「これからはずつと、貴方を愛しています……」

ミイが、お兄ちゃんと抱き合つてキスをしている。

軽く唇を合わせる挨拶みたいなやつじゃなくて、恋人同士がする深い口づけ。

私より背が高いミイは少し顔を上げるだけで顔が届き、私に出来なかつた事を平然と

見せつけた。

二人の視線はお互いだけを見つめて、私は蚊帳の外。

お兄ちゃんは何度も見せつけるみたいにキスを繰り返す。

——どうしてそれを、私にしてくれないの？

「貴方は選ばれなかったの。諦めなさい」

メルトリリスさんが、縛られたお兄ちゃんに腰掛けている。

だけど肝心のお兄ちゃんは、まるで嫌がる雰囲気もなく喜んで従うように無言のまま踏まれていた。

何でも許してくれるのは私だけの権利だ。私だけが特別だから許されるのに……どうして勝手に自分だけの物にするの？

——それは私の物なのに。

小さい頃は私達だけの世界だった。

それがいつの間にか色んな人が群がって、惑われて勘違いされて、とつても可哀想なお兄ちゃん。

一番始めから好きだったのは私なのに。お情けで相手をしてもらってるだけなのに。どうしてそんなにお兄ちゃんを困らせるの？

行かないで、行かないで私を置いて行かないで。

そんな女より、私が、私こそがー。

ああ…だったらもう。

いらない。

そんな奴らは、いらない。

この世界でお兄ちゃんと結ばれるのは、私だけでいい。

理沙は私を裏切る。

ミイは私から奪う。

メルトリリスは私を苛立たせる。

いらぬ。いらぬ。いらぬ。いらぬ!!

恋とか、愛とか、どうでもいい。お兄ちゃんさえ側に居てくれば、私は何もいらぬんだ。

二人だけでいい。二人きりになれるなら何でもする。

ここ最近の寝不足や倦怠感を吹き飛ばすほどに、私の中で力が満ちるのを感じる。

そうだよ。私は我慢する必要なんてなかったんだ。

物心ついた時から一緒に遊んで一緒に成長して。いつだって私を守ってくれたお兄ちゃん。

幼稚園の時、のんびりし過ぎているからって誰もおままごとに付き合ってくれなかった所に来てくれた。かくれんぼをする時は隠れる場所を探してもらって二人で身を寄せ合った。

小学校の時、私達をからかう男子がいじめてくると先生より早くお兄ちゃんが助けてくれた。泣いちやう時も落ち着くまでずっと側に居てくれる。

中学生の時、お兄ちゃんに告白する女子がいた。でもそんなのはおかしい。あり得ない。だから断つたんだよねお兄ちゃん？ だって隣に必要なのは私だけなんだから。

そうだ。昔みたいに戻ればいい。先に進む必要なんて無い。今の余計な関係も捨てちやえばいいんだ。

お兄ちゃんと私だけで、これからも死ぬまで生きていければ、もう何も起こらないし、誰も邪魔しない。あの頃こそが完璧だったんだ。

私は遂に答えに至った。

私は、本条 楓は。何があっても彼から離れない。

例え死が二人を別つとも、私達は永遠に寄り添う。

『ええ、それで良いのです。その激情を餌に、貴方を苗床に。多くのプレイヤーデータが集まる次の機会で…』

『私は再生しましょう』

「ううん…ううん」

「甘噛みされてもダメージ判定があるのか…」

第三層に位置する街の上空で、巨大なシロップに乗ったメイプルとアーチャーが膝枕をしながら浮かんでいる。

最近、本格的に睡眠不足になりつつあるメイプルは、NWO内なら寝れるのでは？と相変わらず突飛な思いつきでイベント前で忙しい彼を呼びつけた。

無論、そんな無茶な要請を断ろうとさせる事実上の上司であるミイだったが、無自覚シスコンのアーチャーは今度詫びを入れるからと、またフラグを立ててメイプルを優先してしまふ。

その結果は見ての通り。子守唄を聞かせる事もあやす必要も無く、膝に頭を乗せて笑みを浮かべたと思いきや、そのままコテンと眠ってしまう。

時折むずがるように身動きするが、痒そうな所をゆっくり撫でてやると緩んだ顔が更にフニャフニャになって安らかな寝息を立てる。

かなり上空を飛んでいるせいで街の喧騒は遠く離れ、二人きりの時間がのんびりと流れていく。シロップは決められた順路を旋回しているので衝突する心配もない。

ゆつたりと流れる時間での膝枕。自然と考えるのはメイプルの事だ。

幼い頃から一緒だったから兄妹のように仲が良いと、今でも彼女は思っているだろう。

しかし、事実は違う。アーチャーが明確に兄であろうとしたのは小学生最後の夏で肝試し擬きで騒動が起こってからだ。

それまでの彼はメイプルの事を手間の掛かる幼馴染として扱うのに苦労していた。

いや、むしろ実の妹の世話を含めて彼女を煩わしいと思っていた時期すらある。彼とて一般人である以上、人並みに思春期を迎えて苛立ちや喜びを覚えてきた。その最中に身近な人物がいるとしたら、対応が変わってくるのは必然だろう。

この頃から女性に対して無碍に扱う事を嫌うドンファン気質を持っていたアーチャーは、明確に口には出さないが、いつまでも精神的に成長しない彼女を持て余していた。

何事にも限度がある。もしサリーと出会って役割を分担しなければ、そのまま自然消

滅し、将来仲の良かった友人程度で関係が終わっていたかもしれないのだ。

もし、この話をメイプルが耳にすれば間違いない彼女が現実を受け入れられず、心を無くしてもおかしくない。

ただ、そうはならなかった。

先の通り肝試しの一件以降、彼は母親から『ある教え』を受けてメイプルの兄貴分を自覚した。すると自然と対応は柔らかくなり、驚くほど波長が合うようになる。

今はどれだけシスコンと卑下されても、無意識に彼女を守ってしまうくらいに大事に想うほどに。

アーチャーの女誑しと女難の相は天性のものだ。けれども彼が特定の相手を選ばないのは何も優柔不断だとか、この関係が心地良いからという理由ではない。特に後者は絶対にあり得ない。そして選ばないのには最大の理由がある。

本人だって、無自覚なのだ。

彼は本条 楓をずっと好きだったから。

苦勞したのは、好きな女の子が無防備に近づくから。

煩わしいのは、自分の気持ちに気付いてくれないから。

持て余すのは、今の関係を変えたかったから。

昔や今の関係ではなく、もつと先を二人で歩みたかった。

彼女一人を守る為のお題目として正義の味方を掲げた心根は、今も変わらず在り続ける。

ロールプレイでエミヤを選んだのは、『間桐桜を救うたった一人の正義の味方』に憧れたからこそ。

秘める事も無くただ自覚出来ない恋慕は、長い年月のお陰で拗らせて彼女を大切な妹としかみていない。

アーチャーとは、英霊エミヤに憧れた一般人に過ぎない。

けれどもその精神性は、とある結末を選んだ彼と同様に他の全てを投げ出す程に熱く、固く、血潮は鉄のように、心は硝子のように精錬されて生まれた想いなのだ。

ただ問題なのは彼を想うあまり、集まった女性全員が『他の女を選んだ程度』で止まらない事だ。

ほぼ間違いなく、選ばれた側に危害を加えるか、アーチャー自身を狙うだろう。下手に言い出せば取り返しのつかない事になる。

これに関しては全面的に彼が悪いのだが、本来ならば相思相愛になれたメイプルにとつて不幸としか言いようが無い。

そんなチグハグだらけの二人は風に揺られて共にいる。

ここはゲームの世界。

危険な事なんて、どこにもないのだからー。

「ーさして、気を取り直して状況を整理しようか」

今は第四回イベントの真っ最中。

良くないハッスルを白昼堂々かましたミイに自省を促してから、自陣の発令所代わりに設置された円卓を囲む。

その場所には既に主要メンバーであるミザリーとマルクス。

そして最近何故か奇行を繰り返してミザリーに告白を敢行し、当然のように失敗して人格が変わった元団員D。彼はキャラクターを死ぬ気で作り直し、別人になりすまして軍師ポジションで居座っている。

「整理など不要です。計略は一点突破。――自爆しかありません」

「なぜそんな結論に…」

「この人本当に軍師なの？ 自爆以外の作戦聞いた事ないけど」

「ふむ…まあそれが効果的なのは認めるが…」

「そ、そうなのか？」

元団員Dこと陳宮の言葉は続く。

「元より、このイベントは限られたオーブをより多く集めた者が勝つ戦いです。そしてそれはギルドメンバーが0になれば消滅する有限の資源。だから皆、手早く集めようとしています」

「…団員の多い炎帝ノ国ではそのリスクが限りなく低い。団員を一人でも潜伏させれば良い訳だからな。加えて攻撃の範囲を広げる事も可能なら取れる策略がある。という事だな」

説明に相槌を打つアーチャーに陳宮は満足そうに頷くと、自軍の団員数と周辺地域に

位置するギルド拠点の数や規模をマップに広げて再確認していく。

「副団長の仰る通り、我らにリタイアはありません。ならばより多くのオーブを集めるよりも、ギルドそのものを狙い逆転の目を潰すのが上策かと…」

「示す先は小規模ギルドに分類される拠点ばかりだ。」

「中規模、大規模ギルドは同士討ちを期待して放置致しましょうか。情報もだいぶ集まりましたのでここが攻め時。そして自爆時。より確実に敵を殲滅する為にも、さつきまでギルドだったものを、辺り一面に転がしてみせましょう」

「怖いなーうちの軍師…」

「えーと、そのアーチャーさんこれは…」

「要約するとだ。被害を考えず自爆覚悟で特攻し、ポイント先行で逃げ切る作戦だな。乱暴だが少なくとも愚策ではないだろう」

「お褒め頂き感謝の極み…」

「いや、褒めてはいないが…まあいいか。ミイ、この作戦についてどう思うかね」

「ミイというカリスマの元に集まった炎帝ノ国では、全ての決定権は彼女に委ねられている。…実際にはアーチャーのさじ加減で幾らでも意見を変えるミイなので本当は機能していないのだが。」

それでも人の上に立つ以上、自分で必死に考えて決断を下さなくてはならない。

必要以上に悩む姿を見せないよう彼女は勢いよく指示を飛ばす。

「陳宮の策を採用する。各班に伝令を飛ばし、強襲部隊として再編成させよ。マルクスは万が一を考えてオーブ防衛のトラップを増設し、いつでも逃げられるようにしておけ。ミザリーは緊急時の援軍としてこの場に待機。陳宮は好きなだけ団員を使つて状況把握。アーチャーは……私と共にギルドを潰しに行こう！」

最後に本音が混じつていたが、概ね作戦はうまくいきそうだと安堵するアーチャー。それぞれが与えられた任務を全うすべく散らばっていく。

また二人きりになったミイとアーチャーだが、今度ばかりは真剣に話し合う。

「さて、わざわざ私とミイの二人という事は、撤退を含めた強行偵察が目的とみたが……違うかね？」

「ふっ……正解だ。ここから向かう先は団員を引き連れては被害が増える一方だからな、機動力に優れた者でなければ務まらない」

「……ならば、集う聖剣か」

「ああ。個人戦力、ギルド規模を比較すればまともに戦う相手ではないだろう。しかし、今回のイベント前にペインが宣誓した内容が真実なら今のうちに手札だけでも開示しておかねばなるまい」

大四回公式イベント開始直前。

運営からの説明とカウントダウンが始まる前に集まった参加者達に向けて、ペインが大々的に喧伝してみせる。

今現在でも長距離チャットが使用不能のバグが放置されたまま迎えたイベントはプレイヤー達の創意工夫で伝令や魔法での狼煙、不遇と呼ばれていた弓使い達を雇って矢文で連絡を取るなど、多様性を生み出す事態となった。

そして多くのプレイヤーに意思を伝えるならば、集まる場所へ短距離通信のアクセサリを装備させた団員を各所に配置して音声放送を飛ばすというやり方があった。

「……まずはいきなりの非礼を詫びよう。俺の名前はペイン。集う聖剣というギルドのマスターを務めさせて貰っている。…さて、自己紹介も長々とするものではないし。早速本題に移ろう」

ペインの口調は冷静そのものだ。だからこそ、次に口から出た言葉にほとんどのプレイヤーが度肝を抜かれる事になった。

「今イベントにおいて、我々『集う聖剣』は全ギルドに対して宣戦布告を行う。共闘して

挑むもよし、単独で攻め込むもよし。全ての挑戦をこの聖剣に誓って受け入れよう！」

全ギルドVS集う聖剣

有り得ざる戦況に自らを置くペインはいったい何を思うのか。
そして、メイプルの運命とは…。

次回、ヤンデレが怖いので炎帝ノ国で弓兵をやっています。

最終決戦。

電脳世界とヤンデレの暴虐。正義の味方。

苦しいからこそ、愛している。